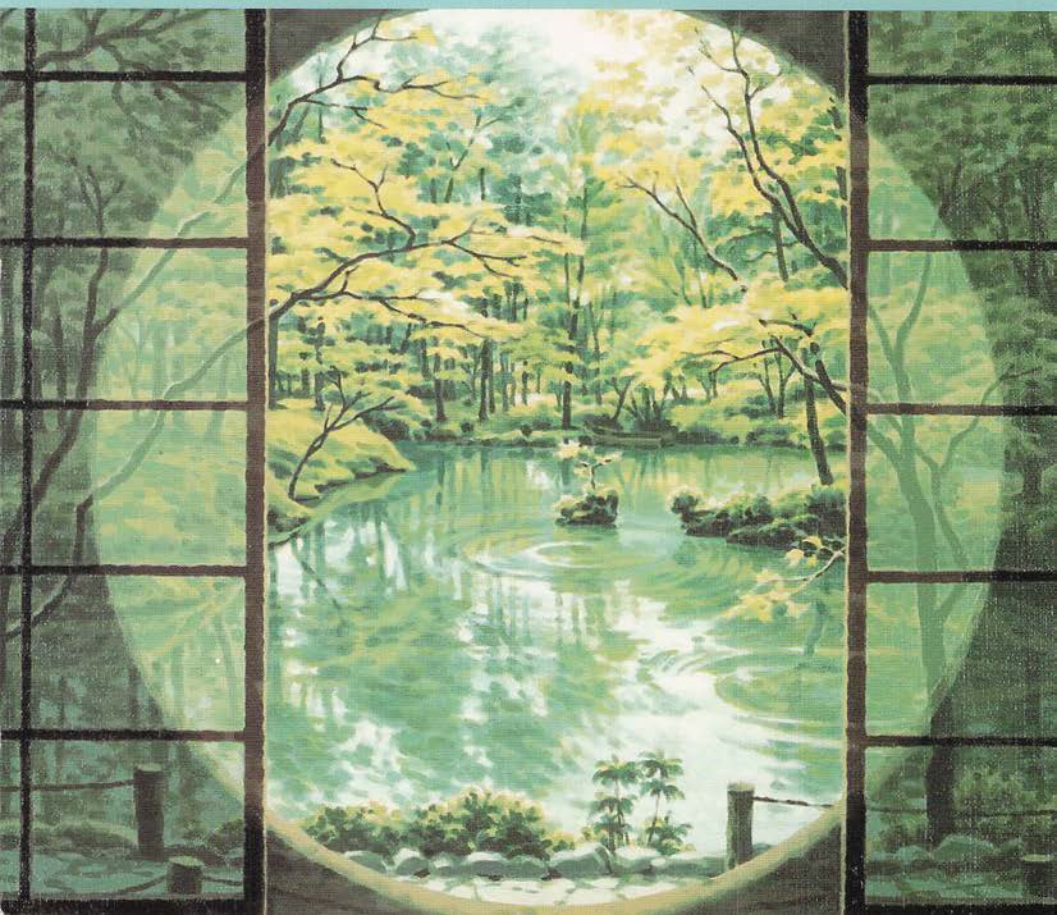


第49号 平成30年11月  
関東氷上郷友会

山  
ざ  
ら



# 三協運輸 株式会社

本店住所 埼玉県桶川市坂田字向990-1

創立30周年を迎え、お陰様でつつがなく発展しております。

東海道を中心に大型トラック約200輛

最新鋭設備を備えた物流センター及び倉庫約12,000坪  
を軸に毎日フル稼働の体制で活動して参ります。

[安全・安心・朗らかに]を旗印にご期待に応じて参ります。



本店 新社屋(敷地面積4,000坪、建物面積2,000坪) 平成23年10月1日完成



関東発一関西行の風景  
出発直前の大型トラック部隊

毎日200台の車輦群が東海道を  
中心に走っております。

〔主要取引先〕 順不同

三井化学(株) 味の素(株) ダイキン工業(株) アサヒビール(株) 三菱商事(株)  
キリンビール(株) 沖電気工業(株) 古河電工(株) ハウス食品(株) 帝人(株)  
新神戸電機(株) (株)東芝 キューピー(株) (株)ブリヂストン 江崎グリコ(株)

# 三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本 勲(水上町出身)

本店 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (728) 9380  
E-mail : sankyounyu\_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (729) 0466  
大阪支店 大阪府大東市新田中町3-3 TEL. 072 (806) 2821

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪

山  
女  
子

第  
49  
号



# 山ぐる 第49号 目次

〈表紙〉笹倉鉄平画「静かなる気配」／〈扉〉写真Ⅱ徳田八郎衛

ご挨拶……岸本 勲 5

平成29年度「ふるさとの会」開催……6

柏原藩織田家第十九代当主 織田信孝氏講演会要旨……8

平成29年度「ふるさとの会」出席者……12／会計報告書……13

懇親会スナップ……14／祝寿の方々ご紹介……19

## 《ふるさと随想》

中井書店と私……瀬々妙子 26

僕の中の丹波……西畑健一 29

萩田庄五郎先生の想いで……藤田正雄 31

同窓会参加への旅……浮田信子 34

わたしの氷上中学校の思い出……本城英明 36

## 《近況・エッセイ》

来し方は波乱万丈新茶汲む……久呉道子 40

この頃思ふこと……足立和子 43

音楽と私……頼澤 豊 46

五輪の記憶「発想の転換とオリンピック金メダル」……足立敏晤 49

東海道6日間自転車旅へその1 平成30年1月25日～1月30日……廣内喜彦 51



《インタビュコーナー》

坂上勝朗さん “山ざる” のことなど……編集部 58

《丹波から》

丹波から、焼きたてパンを日本中に……塚本久美 83

《丹波ブランド紹介》

〈その9・丹波ブルーベリー研究会〉夏の新しい特産に……古西 純 88

《丹波通信》

国指定重要文化財の高座神社本殿―「平成の大修理」でよみがえる……荻野祐一 92

《丹波人物記》

井上 秀 女子高等教育の先駆者 その3……徳田八郎衛 96

《山ざる研究》

「乳母」って何？―様々な「乳母」の肖像……石橋順子 103

《丹波のまつり》

三輪神社 市島町与戸宮の杜……荻野忠一 109

ふるさと「鴨庄」の祭・考……吉見弘文 111

旧吉見村の御祭神……荒木壽一 114

「丹波竹田祭」神輿の由来を探る……青木正文 118

丹波竹田の祭りの思い出……山本喜則 121

ふるさと探訪市島町内（前山・余田編）……余田節哉 122

《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇……63

ふるさとトピックス（丹波新聞から）……70

《MYギャラリー》鈴木智丈／北村貞子／酒井典子／原谷洋美……71

《簡単レシピ》上田道代／安井孝之……75

《丹波を撮る》……徳田八郎衛 77 BOOKS……127

会員だより……132 同窓会だより……138 インフォメーション……140

寄付者芳名……142 《協賛広告》……143 編集後記……156

竹田の里うた

昼は田の草四十ひろとらず 夜は小麦を五升挽かず

昼は麦まき夜さはりは夜なべ 腕もかいなも抜けるよな

歌はよいもんじゃ仕事ができ 話しや悪いもんじゃ手が止まる

暮れになつたら歌など歌うて 仕事倦いたと思われな

人のことなら言わんがよかる 乱れ髪なら結うがよかる

切れた草履の粗末にやならぬ お米育てた親じやもの

仕事なされやきりきりしやんと かけた襷が切れるまで

竹田村志「竹田の俚謡」より抜粋

# ご挨拶

会長 岸本 勲



明治二十九年十一月二日  
(西暦一八九六年) 関東水上  
郷友会は、東京神田の青柳亭  
で産声をあげて以来今年で百  
二十二周年の歴史を刻むこと  
と相なりました。

東京在住の丹波人の有力者たちが親睦を深め後身の  
若者達を応援すべく奮い立った結果の伝統ある組織団  
体でございます。

明治二十年代と言えば薩長土の藩閥政治が終焉を迎  
え、鹿鳴館外交の時代に入り西洋との不平等条約改正  
を目指した時代でした。一方海外では米国の独立百十  
周年頃にあたりフランス国民から贈られた「自由の女神」像がニューヨークのリバティ島に設置された頃で  
した。

さて百二十二周年の今年の総会にはロボット工学の  
世界的権威者春日町縁りの金出武雄先生を迎えて日ご  
ろのお話や「これからの日本」のお話を拝聴しようと

企画致しております。

金出博士はコンピュータビジョン、AIロボット  
工学、自動運転車やドローン、アイビジョン、顔認識  
認証、バーチャルリアリティー、一人称ビジョンなど  
の世界的権威者であります。

一九八〇年代人工知能研究で世界最高峰の米国カー  
ネギーメロン大学に招聘されたのを機に、永年にわた  
り「すぐに出来そうにない先進的且つ大きな目標を立  
てたプロジェクト」を数多く進めてこられました。

自動運転などでは一九八四年頃に取り組み始め、一  
九九五年には「ハンドルから手を離してのアメリカ大  
陸横断」という自動運転実験も実現されました。「人  
工知能は我々の生活に影響を与える重要な技術であり  
関心を持つべきだ」「ロボット研究の面白さは、素人  
の様に考え玄人として実行する」をモットーに、益々  
研究に余念のない日々を過ごされておられます。

また今年も、友情出演のハワイアンバンドパーム・  
アイランダーズの皆様の生演奏と日本屈指のフラダン  
スダンサー石原ひな子様のダンス披露の催しも企画し  
ております。

平成三十年十二月一日(土)の学士会館での総会に  
は多勢様のご参加を心よりお待ちしております。





## 平成29年度「ふるさとの会」開催

平成29年度の「ふるさとの会」は11月25日(土)11時より、東京都千代田区の学士会館で開催され、藤田純常任理事の総合同会の進行で行われました。

総会に先立つセミナーは、「丹波と織田家と信長の今」と題して語って頂きました。(8頁参照)

総会では岸本勲会長の挨拶と報告、引き続き、谷口副会長(会計担当)よりの会計報告、監査報告があり、拍手で了承頂きました。

その後、満80才を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた皆さんのうち参加頂いた藤田玲子さんに岸本会長より祝辞と記念の似顔絵を贈りました。何時もながらお若くとも年齢を感じさせない容姿に感心するばかりでした。(なお今年





岸本会長

も似顔絵の制作は、  
ふるさとひょうご  
「道草」句会の宗匠  
住田道人氏にお願い  
しました。

懇親会は岸本会長

の司会で開会、御来賓の兵庫県東京事務所所長 早金  
孝様と柏陵同窓会会長 竹内牧人様に県の近況、柏陵  
同窓会の近況等の報告とお祝いの言葉を頂きました。

本日の講師の織田信孝さんに乾杯の発声も頂き、宴  
会がスタート、御来賓のご挨拶では、丹波新聞社小  
田会長、柏原高校 大西校長、神戸新聞社 村上東京支  
社長より故郷の近況報告も頂きました。

今年も昨年好評だったパームアイランダーズの皆様  
によるハワイアン音楽の演奏、石原ひな子さんにはフ  
ラダンスと飛び入り参加も加わってフラダンスのレッ  
スンも頂き、例年にも増して和やかな楽しい会となり  
ました。又今年も関西からのご参加もあり、より一層  
会を盛り上げて頂きました。

何時もながらあつという間に予定時間が終わってし



産を頂いて帰ることが出来ました。

又今年も西山酒造様より銘酒の差し入れを頂き、皆さ  
ん懐かしい味に酔いました。

総会の締めくくりはハワイアンの伴奏、笹倉強先生  
の指揮で「故郷」の大合唱になり大いに盛り上がりを見  
せました。

和やかな会も来年又元気に会えることをお約束し閉  
会となりました。

(岡 吉明)

## 柏原藩織田家第十九代当主

### 織田信孝氏講演会要旨



プロフィール 1959年神奈川県藤沢市生まれ。織田信長直系の18代目当主（柏原藩主として数えると19代）。信長の次男・信雄から続く家系の子孫。学習院高等科を経て学習院大学法学部卒業後、広告制作会社、採用情報誌の制作ディレクターを経て、30歳のときフリーライターとして独立、現在に至る。

### 〈「知られないこと」の問題に気づく〉

3年ほど前から柏原の織田まつりの運営をされる組織から声をかけていただき、大名行列での殿様役として歩いています。

私は東京で育ち、仕事も東京が中心ですから、柏原を訪ねる機会は少なく、廟所への墓参や催しに呼ばれて足を運ぶ程度です。柏原に行ったときは旧上級家臣の組織である「無印会」の方々をはじめ、旧知の方々にはお会いしますが、交友関係が大きく広がることはありませんでした。昔なら、当主のお国帰りはそれに大きな出来事だったでしょうが、現代はそんなこ

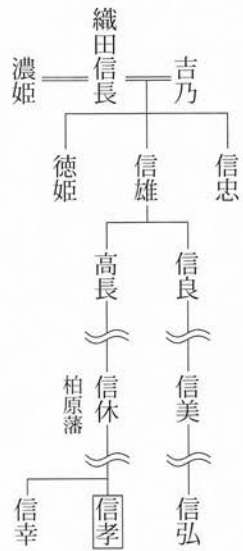
とはありませんし、私も目立たない方が気が楽でした。しかし、近年、あまり知られないことも問題ではないかと思うようになりました。というのは、かつてこの地を治めた藩主が織田信長の子孫だったこと、今もその家が存続しているといった歴史を、柏原でもご存知ない方が増えたことを実感したからです。

ちよつと驚いたのは、あるとき柏原で初めてお会いした方に、「(元)フィギュアスケーターの織田信成さんとはご親戚ですか？」と真顔で尋ねられたことです。他の町ならこういうことはしばしばあります。しかし他ならぬ柏原でこういうことを聞かれるとは、以前なら考えられませんでした。

織田家の子孫と言われる家は複数ありますが、今日まで続き、かつ歴史的な検証にも耐えうる家はわずかです。柏原藩織田家はその一つです。

ここに家系図をお持ちしたのでご覧になってください。織田信長直系の大名家には二つの家系、つまり次男信雄から続く柏原藩織田家と天童藩織田家があります。現当主はそれぞれ私と織田信弘君です。彼は四歳下で、母校が同じだったこともあって昔からの友人で





す。また信長の兄弟の系統では、末弟で茶人として有名な織田長益（有楽斎）から続く家系が二家あります。これら四家だけが今日までつながる大名の織田家です。いずれも大名で藩主ですから、出自がはっきりしているわけです。

ちなみに織田信成君の家は、信長の七男織田信高から続く旗本の家系とのことです。私の知る限り、大名織田家の誰一人、この家の存在を知りませんでした。だから歴史的な裏付けがある家かどうかはわかりません。それでも世間には、彼の家だけが織田家の子孫だと思っている人が結構いるのではないのでしょうか。



大名行列終了後

〈情報発信しないと、存在しないことにされてしまう時代〉  
 しかし考えてみれば、こうしたことが起こるのは当然とも言えます。かつて地域の由緒や歴史はコミュニティで共有され、子供たちはそれを親や近隣の人々の話から自然に知るものでした。しかし、代々続けて住む人が減るとそういう文化はなくなっていくからです。新しい住民が増えれば、例外はあるものの、地域の歴史や文化を知らない人の割合も増えていきます。

私自身、20数年前から神奈川県茅ヶ崎市に住んでいます。茅ヶ崎の歴史について未だによく知りませんがたとえば茅ヶ崎には「大岡越前祭」という祭があります。

す。名奉行として知られる大岡越前（大岡忠相）が、なぜ茅ヶ崎市と関係があるのか、私は長い間、知らないうまま暮らしていました。これは三河国発祥の大岡家が徳川家康につき従って関東に入り、相模国高座郡（現



谷口進一・丹波市長(左) 福田裕光・奈良県教育委員会教育長(右)

在の茅ヶ崎市)の領主  
になったことが由来で  
す。

もう一つ、現代的な  
背景もあります。それ  
はネットやSNSの存  
在です。ネットやSNS  
が普及した結果、「情  
報がないこと」存在し

ないこと」と思われてしまうことが起こります。「沈黙は金」という言葉がありますが、今は「沈黙はゼロ」なので。

しかもネットでは情報は、あまり検証されないうまま、  
広範囲に伝わります。誤った情報であつても拡散し、  
いつまでもネットに残つてしまいます。それを修正す  
るには大変な労力が必要です。

こうしたことに気づいてから私は、メディアなどに  
出る機会があれば、織田家についての正しい情報を伝  
えようと心がけるようになりました。また丹波や柏原  
についても話し、地域へ貢献することを意識するよう

になりました。

〈危機的な状況にある地域コミュニティ〉

地域の良さを支えるのは地域の人間関係であり、コ  
ミュニティです。しかし日本のコミュニティは今、危  
機状況にあります。それは日本全体が抱える最大の  
問題、少子高齢化(もつと正確に言えば、生産年齢人  
口の比率低下)が止まらないからでしょう。

私は四人きょうだいの長男で、下に妹二人、第一人  
がいます。私の少年時代は子供が三、四人いる家庭は  
珍しくありませんでしたが、今は非常に少ないですね。  
それほど今の日本では子供が減つたということです。

かつては長男や長女が故郷に残り、次男や次女以下  
の子は他の地に出てそこで家族を作るといったパターン  
がありました。また一度故郷を出ても、家族を連れて  
故郷に戻る人もいました。長男・長女を中心に地域の  
人間関係が再生産されていたわけです。

しかし少子化によつてこの循環が途切れつつありま  
す。ただでさえ数の少ない子供が故郷を出るとなかな  
か戻りません。ではその若者が住み着いた先でコミュ

ニテイが作られ、続いていくかというところ、それもあまり期待できません。若者が移り住んだ町で家族を作っても、その子供はまたその町を出ることが多いからです。

残念ながらすぐにこれを解決する手段はないでしょう。いずれ人口が回復するとしても、それまでには相当の時間がかかります。血縁に頼らない地域社会ができれば良いですが、これも当面はむずかしいと思いません。

### 〈一人が複数の拠点を持つ社会に〉

私はとりあえず一つのアイデアとして、当面、日本人全員の移動量を増やす、言い換えれば一人の人間が住んでいる地域以外に拠点をもち、その間を移動する回数を増やすことが有効だと考えています。

丹波で言えば、丹波出身で今は他の地に住む方が、そこと丹波を年に何度も往復し、二カ所で人間関係を育てること。これまで帰省が年に一度だった人は二度、二度だった人は三度、と丹波に戻る。同窓会、冠婚葬祭、法事など、機会をとらえては頻繁に往復する。日

本中でこういうことが起これば、消費の機会も増え、経済の活性化にもつながるのではないのでしょうか。

ただこれには交通費がかかるのが難点なので、そこに公的補助などがあつたら理想的だと思います。維持費ばかりかかって利用度の低いハコモノを建てるくらいなら、出身者が帰省するための旅費を援助した方がよっぽど郷土のためになると思います。企業に、従業員が故郷を訪問するための有給休暇を作らせる手もあるでしょう。

解剖学者の養老孟司さんは以前、霞ヶ関の官僚を定期的に地方勤務させる「現代の参勤交代」を提案されていました。しかし、地方との関係をどうするかは、官僚に限らず、すべての日本人が考えるべきことでしょう。

誰もが複数の拠点を持ち、複数の人間関係を育むというのは今までにない社会のありかたです。しかし、やってみる価値はあります。私も先祖からの縁を大切にし、もう少し頻繁に丹波・柏原を訪れたいと考えているところです。



◎平成二十九年年度「ふるさとの会」出席者

(順不同・敬称略)

会 員

来 賓

早金孝 兵庫県東京事務所所長

竹内牧人 柏陵同窓会会長

大西伸弘 柏原高校校長

小田晋作 丹波新聞社社長

村上早百合 神戸新聞社東京支社長

西山裕三 西山酒造会長

講 師

織田信孝 柏原藩織田家第十九代当主

演奏とダンス

パーム・アイランダーズと石原ひな子

祝 寿 昭和12年生まれ(一九三七年)

藤田玲子

青垣町 市島町

柏原町

山南町

氷上町

春日町

西脇市

足立悦雄 足立吉数 田村公平

荒木司郎 荒木輝雄 石橋順子

井出恭子 木下寛爾 高見秀史

藤田千治 藤田純 丸川宥次郎

丸川寛子 山本喜則 吉見弘文

岡吉明 岡洋子 岡田昌子

北村貞子 木下正勝 河本幸子

瀬々妙子 仁藤欽嗣 三觜洋子

植木十和子 大野義昭 久保良雄

勢川武彦 中居篤子 原谷洋美

廣内卓生 藤原ひさ子

足立明子 足立謙悟 足立義雄

安達健一郎 井上巖 上高子

上田道代 上野忠明 大坪眞子

岸本勲 岸本敏子 坂上勝朗

杉岡明美 谷口捷 谷口浩章

徳榊雅孝 藤田玲子 安井孝之

金出一郎 木呂子惠美子 原利充

原智美

大石佐代子 笹倉強 笹倉郁子

# 会 計 報 告 書

(平成 29 年 7 月 1 日～平成 30 年 6 月 30 日)

関東氷上郷友会  
 会計理事・谷口 浩章  
 原谷 洋美

(単位：円)



収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1704489	郵便貯金 904489	出 版 費	854,275	『山ざる』48号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	159,257	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	575,711	総会関係支払
年 会 費	358,000	延179名	会 議 費	154,091	役員会等
総 会 費	480,000	60名	支 払 手 数 料	0	振替手数料
会 議 費	147,000	42名	消 耗 ・ 備 品 費	75,232	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	294,366	延57名	繰 越 金	1,771,278	郵便貯金 971,278
広 告 料	570,000	延45名			定額貯金 800,000
冊 子 代	35,986				振替貯金 0
そ の 他	3	利子			
合 計	3,589,844		合 計	3,589,844	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成30年 8 月 7 日

会計監査

中居 篤子   
 谷 敬三 



# 懇親会 スナック

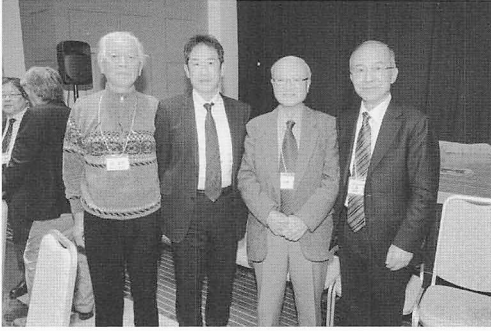
撮影：岡 吉明













# 祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で80歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる25名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、8名の方から回答頂きましたのでご紹介いたします。また、浜田春子様からは、元気にしているとお返事をいただいています。(誕生日順)

- ①生年月日
- ②ご出身地
- ③上京の年月日
- ④上京の動機
- ⑤これまでに最も印象に残ることは
- ⑥祝寿を迎えられてひと言

生まれた年 昭和13年・戊寅・1938年 国家総動員法制定で本格的戦時体制確立。わらわし隊(金語楼、アチャコ、エンタツ)中国戦地へ出発。標語「ガソリンの1滴は血の1滴」。東京都でバスに木炭車導入。映画



撮影・岡田昌子

「愛染かつら」公開。プロマイド売れ行きNo.1上原謙・高杉早苗。歌謡曲「人生劇場」「支那の夜」。戦時歌謡「麦と兵隊」。岩波新書発刊。年賀切手図柄は、しめ飾り2銭。あんぱん1個5銭、ジャムパン10銭。米10kg 2円28銭。(編集担当 本城英明)

木呂子 惠美子様 (旧姓河内)



①昭和13年1月18日

②春日町多利

(出生は東京)

父の春日部村診療所勤務で昭和25年中2〜高校卒業まで多利に住む)

③昭和31年3月

④荻窪の母の実家に寄宿(昼は仕事、夜は学びの生活は結婚まで続きました)2年後に父も上京。久米川で住み、36年に結婚、清瀬に住んで54年になります。その間49〜52年4年間主人の香港勤務で香港に住みました。

⑤息子のシンガポール滞在中、マラッカに旅した時、海に近



## 祝寿の方々ご紹介

い川岸の古い茶寮二階で、お茶を飲みながら眺めていると、向う岸の石段に寝そべっていた二米もありそうなコモドとかげ(?)が泳いでこちら側の眼下近くまで来て、悠久の時間が止まった様な不思議な思いをしました。

⑥高3、17才の時作詩した柏高の応援歌が今も母校に残り、多勢の人に歌いつがれていることを面映くも光榮な事と感謝しています。「山ざる」3号から手元に有り郷友会では渡邊会長はじめ坂上さん鶴田先輩や皆様大変お世話になり有難うございました。元年に主人を亡くしてからは心の支えになりました。たった一人の孫娘は9才になります。持病は沢山ありますが、今も

生命をつなげてもらった事を沢山の人と見えない力に感謝しつつこれからの日々、大切に生きて行きたいと思います。

### 大坪 眞子様

私は1938年3月9日、高知県越知町で4人姉妹の3女として生まれました。一家を挙げて丹波に引っ越したのは、医師だった父が成松の病院に勤務することになったためでしたが、まだ幼かった私に当時の記憶はほとんどありません。

その後父がこの病院を譲り受けたため、私たち姉妹は戦中戦後の動乱の時期をこの地で育ちました。

忘れられない思い出は第二次世界大戦の敗戦です。玉音放送があったその日、遊び疲れて帰宅した私は、日本が戦争に負けたことを知りました。結核の既往症があつて兵役を免れていた父が招集され、小倉の連隊に編入されたのは、敗戦の3か月前のことでした。当時すでに45歳、軍医がよほど払底していた証拠でしょうが、戦地に送られる前に終戦を迎えたのは幸いでした。

神国日本、負けるはずのない日本がなぜ？疑問と不安がないまぜになって、ひどく心細かったものの、父が間もなく帰ってくるという喜びが我が家を包みました。

その日から、夕方涼風が吹くころになると母と4人の娘

## 祝寿の方々ご紹介

が一個連隊を組み、唱歌を歌いながら町はずれの京橋まで父を迎えに行くのが習わしとなりました。

やがて父が帰還。親子6人戦後の混乱の中にもそれなりに穏やかな日常が戻ってきた。私たち家族にとつてあの頃が一番幸せだったかも知れません。それから間もなく、母は病に倒れ長い闘病生活のち帰らぬ人になったのです。私たち姉妹はその後二度目の母に恵まれて成人し、大学進学を機に一人ずつ故郷を巣立っていきました。1957年、私は東京女子大に入学し、1961年卒業、同年結婚、4年間姫路市広畑ですごしたのち夫の転勤で首都圏に戻り、今日に至っています。

80歳になった今思うことは、戦争の傷跡の大きさです。殺さなければ殺される極限状態の中で、優しい夫や父親、心温かな兄弟、思いやりのある隣人が鬼畜生にならざるをえない、それが戦争です。銃後に残された家族も大きな犠牲を強いられました。大黒柱を奪われた家族の悲しみや労苦、食糧をはじめとする極端なものの不足、大都市を一瞬にして廃墟にする空襲など、私たちの世代は身をもって経験してきました。戦争に勝者はありません。2度と戦争を起こさない、起こさせない、そのために何をすべきか。今こそ歴史に学んでほしいと心から思います。

### 谷口 捷様

①昭和13年3月10日

②氷上町(旧幸世村) 南油良

③昭和36年5月

④学生生活が終り社会人となるため

⑤社会に出てすぐに、コンピュータ技術をとおして黒部ダム建設に関わり合ったことである。このことは、自分の生涯において仕事面はもろろんのこと人間関係において多大なる影響を受けたという意味で非常に印象深い。ひと言特筆したいことは、当時の日本にとって必要不可欠なるものは電力であった。その中の関西電力の大事業に対し、私利私欲をはなれ企業間の枠を越

## 祝寿の方々ご紹介

えて協力した民間の企業経営者がおられたことである。

⑥80年の人生を振り返ると、自分にとつては波瀾に富んでいいたと思う。今でも毎年のごとく会っている大学教授を勤めた友人から、「お前はどのように食っているのか想像すら出来ない」と言われたことがあった。自分が意図することから無理に意志を貫き通していたら耐えられたかどうか自信がない。しかし変化の度に不思議な力に導かれ、それに逆らわずに従って来たことにより、大過なく勤め上げられたのは運の強い人生であったと感謝している。残りは何れだけあるか不明だが、静かに世の中の平穩無事を祈りながら勝手に気ままに思う道を進めたらと

願っている。

### 今田 一三三夫様



①昭和13年5月

1日

②春日町

③昭和44年11月

④昭和32年高校卒業後、大和銀行（現りそな銀行）に入り大阪の二ヶ店を経て東京へ転勤となる。渋谷支店を皮切りに都心店をまわり、昭和53年より現住所（流山市）に住んでいる。

⑤40才の時審査部へ転勤となったが、上司はじめ先輩、後輩は皆一流大学出身者ばかりで、そんな中自分一人が高卒の審査マンで肩身の狭い思いを抱

きながら忙しい業務を乗り越えられたことは銀行員時代の忘れることの出来ない思い出である。

⑥59才の時、突然心筋梗塞で倒れ救急車で運ばれ、その場ですぐ手術を受けた。幸運なことにその医師が天皇陛下執刀医の現順天堂医大天野教授であった。三本バイパスの大手術であったが、命を救われた。まさか傘寿を迎えられるとは夢にも思わなかった。これからは一段と体力の低下は否めないで、気力だけでも持つて一日でも生き伸びることが教授や諸先生方への恩返しだと思っている。

## 祝寿の方々ご紹介

### 坂上 登様

- ①昭和13年5月21日
- ②水上町下新庄754
- ③昭和34年4月
- ④昭和29年4月～32年3月兵庫県立柏原高等学校、昭和32年4月～34年3月大阪府立大学工業短期大学部電気通信学科、昭和34年4月東北大学工学部鉱山工学科編入学、昭和36年3月卒業、昭和36年4月1日矢崎電線工業(株)入社、昭和37年9月7日退社。
- ⑤「研究教育への想い」この頃は民間会社での技術研究のあり方は、海外からの技術導入のみの時代であったと思われる。ここで、私自身は東北大学でお世話になった先生と相

談して、これからの技術研究

を大学に帰ってやり直すこと

にした。昭和38年1月1日文

部技官教育職(一)5等級6

号(東北大学電気通信研究所)

に採用される。昭和52年10月

12日工学博士(東北大学)『酸

化亜鉛単結晶の水熱育成に関

する研究』

(参考文献)「山ざる」43号P1

25～129

### 徳田 八郎衛様



- ①昭和13年7月6日
- ②新井村(今は柏原町)母坪
- ③昭和41年3月28日
- ④大学院を終え勤務のため上京

しましたが、九十九里浜東端の飯岡で七年過ごす結果に。

⑤札幌勤務時代に全道にわたる通信演習を実施。「眠いなあ」

「そろそろ終わるだろう」と

いう声を感じる四日目の払暁

大韓航空機墜落事件が勃発。

心を鬼にして「全員配置に就

け。これは演習ではない(繰

り返す)」。全員よく尽くして

くれました。今も感謝していま

す。

⑥ひ弱な少年だったのに長生き

させて頂き、感謝しています。

新井小学校から柏原中学へ入

学して間もなく、面識のない

ある三年生に呼びだされた。

「生意気だ」といじめられる

のかと思ったら、やさしい声

で「君は本の虫で色々なこと

を知つとるそうやけど鉄道唱

歌知ってるか」と尋ねられた。「イエスサー」と第一節と第二節を一気に歌ったら「エイ、流石だ。だが、この福知山線にも鉄道唱歌があるのを知ってるかと聞いてくる。へー、そんな替え歌があったのか。流石は柏原に住む先輩だ。エライ！ムラムラと尊敬の念が沸き上がり「存じません」と、校長先生ぐらいにしか使わない最上級？敬語で応えた。「教えてあげる。入学記念に覚えとけ。今は知ってるのは年寄りだけだよ」と伝授されたが、この先輩も谷川駅と柏原駅の節しか歌えないし、やがて私も忘れた。だが谷川駅の後半と柏原駅の前半が繋がっている、この箇所だけは以後も忘れることはなかった。

た。  
「……鐘が坂くぐりぬけ 出  
づれば見ゆる柏原の」  
「三重の塔は空をつき、八幡  
の宮、神さびつ……」

## 木寺 昭三様

- ①昭和13年7月10日
- ②丹波市市島町(旧鴨庄村)
- ③昭和38年7月
- ④大學卒業後、勤務地の博多から東京営業所へ転勤で上京。この年、ケネディ米大統領の暗殺があった。翌年が東京オリンピックで、マラソンを甲州街道の淀橋浄水場の近くの食堂でテレビ観戦。
- ⑤中堅商社のオーナーのお供として全盛時の稀代の宰相田中

角栄の内輪の懇親会に行ったことがある。あの人間味豊かで迫力ある角栄説法を口角泡の飛ぶ距離で聴き入った。日本の今日の繁栄は、アメリカの核の傘の下のお陰で政治の注力を経済成長に注げたことにある。アメリカ様に感謝しなければならぬ……と。角栄さんの晩年は、アメリカの策謀によって日本の司法の下で、ロッキード事件として裁かれ、不遇のうちにこの世を去った。ひとときの出会いだったが強く印象に残っている。傑出した政治家だった。

- ⑥リタイヤー後は基会所通いと放送大学の受講である。囲碁を覚えて相当月日が経つが今もって遊び程度だ。ですが囲碁を通じて仲間を得たことは



## 祝寿の方々ご紹介

終生の喜びとするところ。放送大学の勉強は、かれこれ8年にもなるか。頭を使うことつまり脳神経細胞は、つかえば使うほど再生するんだそう。この頃足腰の衰えを感じ始めたが、心はまだまだ若くありたい。

### 辻 英子様

- ①昭和13年7月13日
- ②丹波市山南町青田
- ③主人の会社の転勤の為
- ④主人の転勤で大阪から家族4人で調布市に有る社宅に引越して来て間もない頃、東芝府中工場従業員の為の冬のボ―ナス現金3億円強奪事件が発生し連日連夜テレビ、ラジ

オで放映放送されていました。お隣の奥様がその東芝に勤務されていて、連日の様に警察官が聴き取り調査に来ていて、帰りの遅い主人ですから幼い子供達2人を早々に家の中に入れ、早い夕食をすませてしつかりと鍵をかけていたものです。身近かな所で事件が起きてとても恐ろしい思いでした。

⑥先日大阪吹田市に住む友人にご無沙汰と先日来の地震のお見舞いを兼ねて電話を致しました。近況報告と健康確認をして一安心しました。久々に話に花が咲き、物忘れはひどく人の名前が出てこない、出かける前になるとお財布、鍵と探し廻る日々、医者とは仲良くお付き合い、財布の中は

各病院の診察券とスーパーのポイントカードでパンパン、無いのは婦人科と耳鼻科位と大爆笑。2年後の東京オリピックは何とか元気で迎えられるそうだと彼女曰く「人生百才時代よ」と。そんな弱気な事を云っていたら駄目と発破をかけられてそのパワーに脱帽です。お互い傘寿を迎えられた事に感謝しつつ残された余生を静かに穏やかに明るく、楽しく過ごせる様に頑張ります。とうとう電話を終りました。



撮影：徳田八郎衛

## 中井書店と私

瀬々 妙子（大和町）

中井書店は柏原銀座にあり、兄（五代目）が平成5年に亡くなり、今は店を閉じています。

最初の中井書店は喜作旅館の隣りに住居し、そこで開店していたようで、地の利が悪いということと横町（今の柏原銀座、戦後変更）に越す事ができ、繁盛したと聞いています。

父（四代目）を始め姉・兄は以前の店で生まれ、私は引越した翌年に生まれましたので85年前から現在地です。

戦争前後の書店は時代に翻弄された変遷がありました。

懐かしさを感じて下さる方々に失望させてはならないと思いつつも、私が書店に生まれた幸運な子ども時代に、私がどう過ごしたかを思い出しながら書店の様子を簡単に書いてみました。

幼児期に不思議に感じたのは、店に続く奥の座敷に放課後のおじさん達（多分中学四、五年生）が十人ばかり集まってあぐらをくみ座り込んでいて、火鉢にかかっているやかんからお茶を飲んだり、秋祭りの頃は母お手製の鯖寿司や鱈寿司が無造作に置いてあるのを、美味しそうに食べている姿を見ていました。傍にいる幼い私は眼中になかったかも知れませんが、母は三代、彼らからは神戸弁を話す気さくな神戸っ子のお姉さんとして愛されていたのだらうと思います。

戦前の厄神祭は横町がごったがえしていましたが、近在から来られる方々と店先に値引き本を出して飛ぶように売れていたことを思い出します。

昭和十六年十二月に始まった戦争で出版物は目に見えて少なくなりました。児童本で特に好きな講談社の絵本は出版されなくなり、婦人雑誌（婦人クラブ、主婦の友）が辛うじての月刊誌。単行本は時代物が主でした。婦人雑誌の記事で山本周五郎の婦道記連載に影響を受け、武家女性のいさぎ良さのあり方に子供なりに戦時中をオーバーラップし魅入りました。

薄っぺらな新聞紙のような教科書に戦争のきびしさを体験、それ以前の教科書販売は大切な書店の仕事で、戦争中男性店員が次々と出征して行くので、十歳異なる兄と私が戦力でした。

父は私にとつては当時すぐ怒る恐ろしい存在でした。おどおどとうつぶむいて店番をしている私を役立たずと思っていたかも知れませんが、この教科書販売では言われた通りすばやく教科書を取り出して手渡す、氷上郡の小学校数カ所（当時中学校は県立柏原のみ）の手伝い、帰宅すると車座で金勘定（硬貨）。小さな手でよくより分けられるなどと褒められ笑顔が出ました。

小学低学年（終戦は六年生の八月）の私の愛読書は吉川英治の宮本武蔵（上下）で、何度も読み返しました。父の「判るのか？」の問いに「読めるのか？」と言われたと思ひ違いし、聞かれた真意を今になって思い至る幼さでした。武蔵の語る言葉の中、「我何事に於いても後悔せず」と決心する場面、小さな私に今も生き方の一部として残っています。

そのような中、同居の祖父中井正吉（中井盛久堂書店の創立者）は、小学生（当時国民学校）の私には近

寄り難い存在でしたが、昭和十七年八月八十一歳で死去しました。

やがて配給の時代になり開店休業のような状態の店に変わりました。父は何故か日通の支店長になり勤務、私にとつては静かな一時でした。母も細々と店番をしながら隣組のお役で忙しく家庭菜園での慣れぬ農作業、私も店番よりその手伝いが好きでますます無口になりました。

戦後（昭和22、23年頃）は女子店員がきびきびと働いていました。家族の手伝いは減りましたが、その後も私と妹は分担しながら精一杯店の手伝いをしました。立ち読みの注意は妹が得意で店番専任、接客が苦手な私はリヤカー専門です。駅に到着する商品を取りに行く仕事を一手に引き受けました。駅についた書物を取りヤカーを引いて行き来するわけですが、駅からの帰途に帰宅途中の高校の先生たちに出会い、不思議な顔で見詰められるので戸惑ったものでした。余程不似合いだっただけでしょう。

読書好きな私は書店が最適である事を認識したのは戦後でした。運んできた荷物をわくわくしながら荷ほ

どきし、ひそかに商品の中から読書用にと選び、店番の目を盗んでそれらを二階の居間へ移すのは至難の業でした。無論本は商品、新品で大事に扱いました。今も本は折つたり線を引いたりは出来ず、寝そべって読むなんておよそ考えられません。早く読み終えて店に出さねばと夢中の日常でした。

しかし読書傾向はいびつ。戦後ようやくグリムやアンデルセン童話等、大量の出版で、小学生の時は婦人物と武蔵しかなかった女学生の私はむさぼり読みました。

学制の変化も混乱を助長、つまり終戦の翌年（昭和二十一年）女学校最後の入試で女学生、一息つく間もなく二年生になると男女共学の併設中学生、高校に昇格した女学校と中学校の合併で、翌年卒業の四年生は女学校卒業で、三年、二年生は高校に進むか併設中卒か同年の女学校入学でありながら苛酷な別れでした。今でも同窓会は中卒と高卒の混入で神経を使います。

校歌も女学校と高校（私達の卒業式に始めて完成）を覚えています。

高校二年になってようやく新制中から下級生が入っ

て来て、上級生を体験して戸惑いました。そして、次の進学は家出の正当手段でした。その後、神戸に住んだ私に柏原の成人式は無縁でした。出られなかった（呼ばれなかった？）思いが郷里との縁をつないでいる不思議は、いくら娘や孫の成人式に思いを託しても浮かんできません。郷里へのなつかしさが少ないと思っていた私でも、切っても切れぬのが生まれ故郷と気づかされて居ります。

三年後、神戸より父に請われ教科書北部（兵庫県は東《神戸》西《明石》北《柏原》の三ヶ所存在）の特約会社（父は書店を兄に任せ代表取締役社長）の事務職として柏原に戻りましたが、二年足らずで父は上京途中の大阪で倒れました。最後にようやく父に認められた経理、いささか書店の役に立ったと自負する次第です。

（柏原町出身）

## 僕の中での丹波

西畑 健 一（市川市）



僕の丹波での生活は、昭和二〇年（一九四五）から昭和二五年（一九五〇）までの五年間だった。三月十日の東京大空襲で戦災に遭い、父の郷里の丹波に疎開して、県立柏原中学二年に編入。終戦までの間、最初は授業もあったが、六月からは山行きといわれる勤労働員。初めは柏原近くの山で松の木を切り倒す作業。道具は自弁で、在地の名士の息子たちの鋸と、疎開の生徒が借りてくる鋸ではくらべものになるわけがない。そんな中で太さ四十センチ以上の松の木を次々と伐採した。松根油のためだった。

炭焼きは、学校から三キロメートル以上離れた鐘ヶ坂近くの奥山で、炭焼き小屋を中心とした原木集めと、焼きあげた木炭の運搬。この時、炭焼きのおじさんからいろいろな話を聞いた。春の猪はとても危険で、十

匹近いウリボウを引き連れた牝猪が一番恐いという、気が立っていて人を見れば襲ってくる。しび（小枝）が敷き詰められた沢の水を飲みに来るのだ。物陰で息をひそめて見つめているだけだったという。夏にはしびの下にハメが潜んでいて、噛まれればもちろん危ない。ハメがいるところにはサンショのカザがする。踏みつけないようにと注意された。都会から疎開してきた生徒のひとりが、炭俵を足で転がして運んだといって、こっぴどく譴責されたこともあった。終戦の詔勅が出される二か月くらい前の話だ。

昭和十年代の初め、僕がまだ東京にいた頃、父の会社は織物卸販売の有限会社で、サラリーマンやお役所の勤め人のように日曜の休みはなかった。父はほとんど店を出ていて、休みは五のつく日の月に三度。父の休みの日と学校の休みが合うことは年に何回あったとか。

小学三年の夏休み、僕は初めて汽車での一人旅をした。東京駅から夜行列車に乗り、京都で山陰線に乗り換え、福知山経由で黒井まで。黒井から大路までは誰

か迎えに来てくれたのかもしれない。当時伯父の家では乳牛を飼っていて、搾りたての脂肪たっぷり生乳を飲ませてもらったことを覚えている。この頃僕は昆虫採集にはまっていた、図鑑で見た虫集めに夢中になっていた。いとこたちは、その虫がどこにどのくらいいるのかしつかりとつかんでいて、食べられる草の実などもっともよく知っていた。夏休みの暑い真昼を、歓声をあげて、真っ黒になつてともに走り回っていた。

一九四五年八月十五日終戦、この日を境にすべてが変わった。中学でも旧体制は一新され、威張りくさっていた配属将校や武道の教師、漢文や歴史の代用教員がくしゅんとなり、代わりに英語や数学、音楽、物理の先生が我が物顔に活動する。旧制中学第二回卒業の同級生の縁で、植木校長が現職の総理大臣だった芦田均を柏原に招聘し、大講演会が開催されたこともあった。

学制改革の翌一九四八年四月、旧中学と女学校が合併し、新制高校になった。僕は学級委員の一人として、現在の柏原高校の校章や校則の検討・協議に参加した。



大学受験で東京に移る一九五〇年までの五年間、活気に溢れた青春時代を僕は丹波で過ごした。生涯を通しての友達もこの柏高の級友だった。ともかく柏原高校図書館に通って学んだことが、現在八十六歳になるが、ここに到るまでのすべての出発点だったといえる。

いま僕は市川で暮らしている。丹波に帰ることは滅多になくなったが、父の郷里の先祖代々の墓には、分骨した父と母が眠っている。

二〇一八・三・二五

(昭和6年東京生れ／戦災で春日町に疎開、元角川書店編集部勤務)



撮影・井上麻

## 萩田庄五郎先生の思い出

藤田正雄(川崎市)

萩田先生について、転校生で後世歌人として名を成した上田三四二が処女創作集『深んど』の中で次のように述べている。

下級生のときはこわい先生で四、五年になると卑屈になるA教諭と同じように、下級生のときはこわい先生で、四、五年になるとそうでなくなる点では、(狼)という渾名のロイド眼鏡に興味のいいネクタイをした英語の萩島教諭も同じということだった。しかし、萩島を悪くいう生徒はいなかった。彼は教育理念としてそういう方針をとっているらしく、教え方も正確であることが最初の授業から私にもわかった。生徒は教師の人間を見抜いた上で軽蔑したり敬愛したりしていた。(補助線P163)

萩田先生の受け持ったクラスの進学率が高いといううわさは聞いていたが私たちの学年は先生の受け持ち

でなかった。しかし、全校生徒四百人余りで進学率五割程度の小さな学校では、五年の歳月は教師も生徒もお互いの存在を認識し理解するためには十分過ぎる期間であった。荻田先生は厳しい先生という噂だったが誰も悪く言う者がいない先生だった。これは上田が言うように教師としての実力とその教育理念が優れていたからである。

入学当初から私は西垣と学業そっちのけで小説を読みふけていた。三年終わりごろまで続いていた。その頃将来どうするかという問題に突き当たった。三年のブランクを埋めて追いつくためにはどうすればよいかそれを聞きに先生を訪れた。

先生は単語集と英文解釈、英作文の参考書を選んで一年間これを集中して実行するように指示された。先生は時々進行状況をチェックして適切なアドバイスを下さった。五年生に進級したころ英語の教科書や副読本が辞書無しで読めるようになっていた。それまで、ほとんどの時間を英語に集中していたのを五、三、二の割合で英語、数学、国語漢文に分散した。

昭和十五年の一二月岡本は海兵に入学し、佐中は四

年修了で政府派遣留學生として既に中国に渡っていた。翌十六年三月、私は六高受験に失敗した。その主な原因は数学にあった。そのため、東京の予備校で受験準備を開始した。予備校の教師は優秀だった。しかし、英語に関して荻田先生はそれらと比べても勝るとも劣ることはなかった。

予備校の勉強に集中しすぎたこと、それに加え下宿の粗末な食事、空気のきれいな山村から汚れた東京に出てきて運動を急にやめたこと、それらが重なって半年後の九月肺結核を発病した。当時は結核の治療薬は無く、死亡率が非常に高く死病と言つて恐れられていた。帰郷して、漸く回復に向かった昭和十八年十月二十一日学徒出陣のその日に私にも徴用令が来た。

横須賀海軍工廠の電気工として軍艦修理に励んだ。然し、翌年五月咯血した。肺結核の再発だった。海軍共済病院の重病棟に入院したが奇跡的に回復し、徴用解除となり帰郷した。二十年、私にとつて厳しく辛い日々が続いていた。その頃、中学校以上の学生生徒も軍需工場に動員され学業を続けるには厳しい状況にあった。英語は敵性語として禁止され、先生には苦し

日々だった。戦況は日増しに厳しくなり米軍の無差別爆撃、更には広島、長崎への原爆投下により、ポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏を決定、八月十五日終戦の大詔の玉音放送があり戦争は終わった。

其の時私は二十一歳だった。再会した先生とお互いの無事を喜び合った。戦時中の苛酷な経験から哲学を学ぼうと考えていた私は、年齢と健康状態から高校三年、大学三年の正規の道は不可能に思えた。先生に何か良い方法は無いかを相談した。先生は帝大に選科の制度があること、一高中退の菊池寛、四高中退の西田幾多郎等がその制度で学んだことを教えてくださった。二十一年は帝国大学の入試制度が大きく変更された。それまで高等学校卒業者のみに進学を許されていた特権が廃止され、国公私立すべての大学予科、陸士、海兵等の士官養成学校、専門学校以上の卒業者に開放された。高校卒業生で不合格になった者が多数出た年である。中卒で挑む私の合格の確率は限りなくゼロに近かった。然し、私は荻田先生の教えと励まし、それを忠実に守り実行した私自身の努力を信じて京大哲学科を受験し、合格した。三回生の後期それまで選科か

ら本科に転入は不可能だった制度が改革に依って可能になり、私は本科に転入し翌年無事卒業した。  
荻田庄五郎先生 先生は私にとって終生の恩師である。

(黒田庄町出身／柏中昭和16年卒業)



撮影・岡田昌子

## 同窓会参加への旅

浮田 信子（浜松市）

最近は日常生活と異なる行動する事に対して、様々な思いを巡らせ不安や戸惑いの多いものです。浜松から満八十三歳にしての一人旅、同窓生にお逢い出来るという幸せを胸に、心を奮い立たせ一大決心を致し前向きな気持ちを持つ事が出来ました。

当日は、心身共に爽やかな気持ちで出席致したく一泊二日の旅を計画しました。

以前は、日帰りの旅を致しておりましたが、これも年齢のせいでしょうか。

新大阪で乗り換え一路柏原へ。車中では、過去の思い出に色づけをしながら満ち足りた時間を過ごしました。

今年の桜花は峠を越しており、一抹の淋しさを覚えましたが山の緑の中に美しいピンク色が水玉模様に点在、山つつじでしょうか。自然の景色の移り変わりに

色を添えて楽しませてくれました。山合に目を配れば、谷川の美しい清流も格別な趣を多々たえて清々しさを心に加えてくれました。ぼんやりと鐘ヶ坂の春景色はどんな光景だったろうかと、高校時代に訪れた美しい思い出を懐かしんでいるうちに目的地柏原に到着。過ぎ去ってみれば短い時間でした。

私達の同窓会は、五年毎に母校の所在地柏原で開催されます。卒業年が昭和二十八年なので、"につばち会"と称して今日までずっと続いております。

前回は卒業六十年、還暦同窓会が平成二十五年四月十二日、駅前喜作にて開催参加者八十六名でした。今年はその節目に当たり、去る四月十日黎明館（旧柏原女学校）を会場に卒業六十五周年。本年は多くの方々

が満八十四歳を迎えます。

開会前に、玄関広場で参加者六十六名の記念撮影を済ませ、座席抽選に従い十テーブルに分かれ着席、乾杯の挨拶もそこそこに、蜂の巣を散らした様に思い思いに懐かしい友の顔を求め右往左往。スタートから素

同窓会ひるば



晴らしい盛り上がりでした。幹事さんが、懇談の様子をテール毎にスナップ撮影なさるのに一苦勞も二苦勞もなされ、動きの激しさに困惑気味のご様子を目に致しました。

盛大な会の雰囲気作りをして下さった、地元幹事の皆様には感謝くでお礼の言葉もございません。丹波新聞にも十二日付けで記事が掲載されておりました。八十余年の人生の中でこの様な、幸せな時間を頂けた事をどう表現したらよいものか、筆舌に尽くす事も出来ず悩みます。時が流れ去った今も尚、この幸せの余韻を心で暖めております。月並みですがありがとうございました。

私達、昭和九年、十年生まれは学制改革の狭間の中で成長して来ました。

- 昭和16年4月 国民学校第一期生として1年生に入学  
 昭和22年3月 国民学校制度最終の学年として6年生を卒業（小学校に行つて居りません）  
 昭和22年4月 新制中学校第一期生として1年生に入学（新制中学校発足）  
 昭和25年3月 新制中学校3年生を卒業

昭和25年4月 新制高等学校第一期生として新制兵庫県立柏原高等学校1年生に入学。初代高等学校長 後藤英太郎先生

昭和28年3月 柏原高等学校第一期生として3年生を卒業。卒業前年27年に校歌、作詞富田碎花、作曲山田耕祥で制定された

学校制度変革の節目くを歩んできた珍しい学年なのです。時代背景としては昭和十二年日中戦争勃発。入学した年の十二月、太平洋戦争が始まり昭和二十年八月太平洋戦争終結（敗戦）。

衣食に事欠く戦時中を過ごして来ました。

しかし、私達はどの様な環境にも負けず、波瀾の社会情勢の中を今日まで、遅しく生き続けて来た丹波の犬と猪です（戌年と亥年生まれなのです）。

これからも前向きに、力強く生き抜きたいものです。現在の幸せに感謝して、五年後次回開催の卒業七周年、米寿の会には多くの方々とのお顔合わせが叶う事を心より願ひ、希望を大きく持ち歩き続けて行きたいと思ひます。

（春日町出身／元地方公務員）

# わたしの氷上中学校の思い出

本城 英明（春日部市）



平成29年11月25日（土曜日）に、昭和42年3月氷上中学校卒業50周年記念同窓会が丹波市氷上町本郷ゆめタウンポップアップホールで開催されました。

れました。

当日はこの年卒業生の約25%にあたる一〇九名の出席がありました。

同窓会の案内状によると「中学校を卒業して50年になるなあ」と、M A君。「同窓会でみんなと会えないかなあ」と、T Y君。と話が盛り上がって企画されたようです。

氷上町は五か町村が合併し昭和30年夏にスタートしました。氷上町内には4つの中学校がありました。昭和36年に校名は統合され氷上中学校となりましたが、本校、東校舎、南校舎、北校舎、と4つに分かれて学



んでいました。それらを統合して学ぶ氷上中学校舎が、われわれが中学1年生になる昭和39年に氷上町成松に出来上がり、統合されて最初の中学1年生となりました。1・2年生は10クラス、3年生は11クラスありました。

わたし個人の中学時代の記憶を辿ってみました。入学式の記憶は全くありません。翌日や次週の連絡事項が校内放送で「生徒諸君は〇〇するように」と入るの生徒諸君という言葉聞いて中学生になったのだと思います。

校舎は3クラス分不足したのでしょうか、ブロックで枠を造り、ベニヤ板で仕切るいわゆる仮設教室で、われら1年5組と6組・7組は学ぶことになりました。（一学期間のみでしたが）人数調節もうまく行かな



かったのか、1組から5組へ1人移ってきました。

自習の時間は、男子生徒はプロレスごっこ。ロープに飛ばされ役はベニヤ板の仕切りに激突。3回くらい繰り返すと6組で授業中の先生がやって来て「おまえらは、何をやるとるんじゃ！」でした。5組は南側に面していたので、雨の日、風が強ければ黒板に雨が一筋、また一筋、黒板が使えなくなっていました。

体育の授業は出来ましたが、グラウンド整備は不十分でした。春の陸上競技大会は旧氷上中学校本校、グラウンドで行われることになりました。統合中学校になってクラス内に知り合いが少なく5組の代表選手は思うようには決まらず、放課後みんなが残って走ってみて選手を決めました。最後まで決まらなかったのが800メートル走者。担任の先生から「本城お前しかおらん」と言われ、生まれてから一度も走ったことのない800メートル走に出場することになりました。大会はクラス対抗で行われ、5組は第2位。代表してT君が表彰状を受け取り、わたしは準優勝楯を受け取りました。よほどうれしかったのか、わたしは今でもはつきりとその時のことを憶えています。が、同窓会出席

者で憶えている人はいませんでした。目を空けて相撲大会が旧氷上中学校本校の土俵で行われました。わたしは個人戦に出場。3位決定戦で相手を土俵際まで追い込みましたが、勇み足で敗れ4位になりました。

夏はプールが出来ていなかったので、体育の授業は佐治川で魚取をしたことがあります。男子はみんな川に入って素手で魚を捕まえる。ハエ、フナなどを捕まえました。中にはスイカの匂いがあるからすぐにわかったと、アユを捕まえた者もいました。授業が終わると「よしアユ以外はみんな逃がしてやれ、アユはワシが持つて帰る」先生は笹にアユを通して職員室に持ち帰りました。

秋になるとグラウンドもきれいに整備され、一周300メートルのトラックも完成。体育祭も開かれました。私たちが2年生のときには1年生がオバQ音頭を踊っていました。オバケのQ太郎に人気が集まった時代だったのですね。わたしたちが3年生のときには仮装行列がプログラムに入っていました。同窓会では何人かがかつらをかぶってエレキギターを抱えた写真が紹介されていました。わたしは、宴会用に作られた皿と

棒を持って皿回しをしながらグラウンドを一周しました。旅行もありました。1年生の時には比叡山へ。展望台付近でクラスごとに写真を撮り、出来たばかりの琵琶湖大橋を渡り、名神高速道路を通って中学着のコースでした。2年生の時には、京都で開かれていたツタンカーメン展へ行きましたし、宇治平等院鳳凰堂、銀閣寺を訪れましたが、クラスの集合写真は撮っていません。修学旅行は東海道新幹線開通後でしたが、われわれは修学旅行専用列車「日の出」号、「きぼう」号の時代。東海道本線の沼津駅で下車。当時大衆化を目指していた箱根へバスで向かいました。箱根で一泊、翌日は小涌谷から富士山を眺めました。わたしは、丹波に住んでいるので次にこの美しい富士山を見られるのはいつの頃になるのだろうかと思っていました。多くの外国人観光客が「オーワンダフル」を連発していました。大学箱根駅伝の山下り同様にバスで山を下り湘南方面へ向かいました。加山雄三が歌う「君といつまでも」が前から大ヒット。ガイドさんによる「左手に見えますのが加山雄三の家です」に女子生徒は大いに盛り上がっていました。後日発行された校内新聞

には「修学旅行で思い出に残る加山雄三の家」という内容の記事がありました。バスは鎌倉大仏などを見学後、宿泊する東京に入りました。希望者だけでしたが後樂園球場へプロ野球ナイター観戦に出かけました。東映対南海戦。東映には張本勲選手、南海には野村克也選手が在籍。南海のピッチング練習場では日本人大リーガー第1号の村上雅則投手が投球練習をしていました。最終日、夜の東京見学では首都高速を走るバスが日本橋の上を通過する前「みなさん一瞬ですから、しつかりと銀座のネオンを見てくださいね」とガイドさん。丹波の夜は、弱い光の街灯と月明り、懐中電灯に頼った生活。銀座ネオンの明るさにびっくり。世の中には、こんなに明るいところがあるのだ、と本当に思いました。森永地球儀ネオンが懐かしいです。最後はガイドさんが「ああ東京の灯よいつまでも」を歌ってくれました。

わたしたちが1年生になる年から男子生徒の髪型は全員丸刈りに。このため中学時代の写真はすべて丸刈りの髪型で写って残ることになりました。昭和40年に入って間もなく体育館が完成しました。

入学式、卒業式も体育館で行えるようになり、体育の授業やクラブ活動に利用されるようになりました。が、われわれには、模擬テストの会場にもなりました。各自が机と椅子を体育館に運び込み1組から10組までの組ごとに、出席番号順に机と椅子を並べて模擬テストに挑みました。

2020年に東京オリンピック開催が予定されていますが、われわれが中学1年生の年は東京オリンピックが開催された年でもありません。体育の授業では小講堂に設置されたテレビでオリンピック競技を観戦。夜は自宅でオリンピック競技中継に見入りました。あの夜、街にはタクシーは一台も走っていないかつたと言われた。あの夜は、引き離そうとする日本、粘るソ連女子バレーボール日本対ソ連の決勝戦が行われていました。日本が金メダルを獲得「なせば成る」が流行しました。オリンピック閉幕後には中学校へ陸上100メートル日本代表飯島選手、最終聖火ランナーの坂井選手、体操競技のメダリストらの訪問もありました。

校長先生が「氷上中学校の生徒は、本当に校歌が歌えない」と嘆かれたので、ホームルームの時間を使っ

てまでも練習をした校歌を同窓会では参加者が声を合せて歌いました。

後日送られて来た同窓会参加者名簿には、「楽しい一日ありがとう！感謝」の言葉が添えられています。

(氷上町出身／介護保険施設職員)



撮影・足立悦雄



## 来し方は波乱万丈新茶汲む

久 呉 道 子 (熱海市)



大変遅くなりまして申訳ございません。

『山ざる48号』暇々に繰返し拝読させていただき有難く思います。不肖私も高齢故にそれに加して五年前に「大腿骨転子下骨折」不注意による怪我乍ら、秘かに心当りがございませぬ。二ヶ月の入院後（年末年始がありお願いしまして永くなりました）杖二本で立ち歩けるまでになれまして「ホッ」としました。

その年でありましたと思いますが、『山ざる44号』を、お送り戴きました。お名は存じ上げる名士の方々にて、「どうして？」と思う時、丹波新聞社社長小田様よりの提言ではないかしら…と思懐かしく想いを馳せました次第。マンション生活は初にて悩む事多き中に、何とか前向き志向にとりむける事が出来ました。

有難うございました。

思いも寄らぬままならぬ日々を経て今日に致つております。父が陸軍の軍人でありました故に戦争故の思わぬ人生を歩むことになりました。「山ざる編集部様」より寄稿のご通知を頂きましたそれだけで老人も一人に数えていただけると心弾みます。墓地引きも一緒にさしていただきました故に長男高博にはまだテルモ(株)専務の要職中なのにもう少し挙田の地で辛棒して居ればよかつたものを、次の総会に社長の内定を戴いていたとは全く私は知りませず「お母さんに思う様にさしてあげたいので」と弟妹に口止めしていました由、後日知りまして臍を噛みました。墓地探しもなるべく宗派の変らぬお経をいただけるのがいいだろうから、と日曜毎に探してくれた様でございました。臨済宗妙心寺派は附近に多く有り七八年前私共老夫婦で探しましたけれど佳き地なくそのままになっていました。「清見寺」と云う寺院ありそこは、ずーっと以前より「新しく入れない」という事になっていきます旨、静岡のお人に聞いていました。高博はさような和尚様に「一度十分でいいのでお逢い出来ないかなー」とお電

話でお頼みし、「十五分程なら」と仰せいただきお目にかかれました由。後日亡夫の七回忌を清見寺様のお座敷借りてさしていただきました折和尚様のお話して「十五分間の予定が一時間近くになりました次第で『まだお決めでないならどうぞお入り下さい』と申し上げ墓地も整地して、山の高い所の檀家さんのご希望でお詣りし易い処へ整地したところです」ということで新檀家が何十年振りに一戸のみ入らせていただきました。「高博さんと想いが同感でございましたので一言申し上げておきます」との和尚様の言葉で檀家にし



ていただけました理がわかり、忝い思い一杯でございます。私も高齢ですし、五十七歳の時始めて集団検診を受け「大動脈弓石灰化」の判明の身でかような寺院に何のお盡くしもないでいますのは勿体ない故「何か機会あ

れば進んでさして貰つてよ」と申ししていました。今、本堂の戸帳が百年以上経ているので京都の織物屋さん  
に依頼されて居られ、「久呉さん如何でしょう」とお  
声掛けいただき有難くそれを寄進させていただき兄弟  
姉妹相集い、世界遺産の撮影と日が重なりテレビ局の  
撮影や朝鮮通信使の足跡を未来に紡ぐべく行列もあ  
り、あの広い国道も通行止め見物人も含み溢れまし  
た。

それから『山ざる48号』のあと、未知のお人よりT  
EL戴き「同じ熱海に住み乍ら一度も逢つてないとは、  
近いうちに伺います」とあり。後日フロントから「田  
村さんが見えです。お通ししましょうか」と。「私、  
下へ降ります」とサービスクーパーへ。田村公平様よ  
り「女学校校歌歌いましょうか!」「えっ! 私旧制  
の女学校ですよ」と。前号に記していたのを見て下  
さつて。「もーろともにー」と。田村さん音程も歌詞  
も寸分違わずに驚きました。総会には女学校卒の方も  
見えますので旧中学、女学、新高、三つ校歌大合唱し  
て再会を約しています。と。今宮神社は、全国神社年  
鑑見ますと写真入りで載っています。祭も熱海の町起

しでお役目大変と存じます。ご多忙と思います。私も  
冬期は咽喉を痛め易く、ようやく新樹の季を迎えられ  
ました。この投稿済めばTELで無沙汰のお詫びをし  
ようと思ひます。

なつかしい高見城跡。奥池の神秘。笛の音! ふる  
さとは遠きにありて思うものそして悲しくうたふもの、  
でございます。二人娘の私は長女故に結婚は婿養子縁  
組にて、自分でも勿論親戚も村人もその様に思つてい  
まして、父が第一回目召集令状受け、二年程北支に、  
金鷄勲章功六級、勲五等旭日褒章等の勲章戴き復員し  
てくれました。「関西水上郷友会長有田邦敬」銘入り  
裁縫箱拝受し、父勤務の団体事務所へ持参し自転車で  
帰りの折にと依頼、もう召集令状は来ないと思つてい  
ました。卒業後幼い頃からの望み「日本女子医学専門  
学校」へ出願し、受験し、合格通知。校長先生も私自  
身も大変嬉しく学校の名誉と飲んで下さいましたけれ  
ど、数日後五十歳近い父に二度目の召集令状! 父は  
「上京しようと思ふなら進学してもいいよ」と敬礼を  
し村人に送られて姫路へ。いよく私の上京の日!  
仏壇に供していた合格通知を丸めて裏の田の中へ深く

入れて！ 今八十年経ても三月の巡り来る度に胸を横切ります。

此の度の戸帳寄進詣で大へん有難くて。

「白蓮の且つ散る寺院仰ぎけり」道

(旧姓 谷口、柏原町出身／大正12年生、現在九十五歳)



撮影・井上巖

## この頃思うこと

足立和子(ふじみ野市)

2018年2月28日、日経春秋欄に、イギリスのメイ首相が、国民約六五〇〇万人中九〇〇万人の人が孤独を感じ疎外感に苛まれている実情に「孤独担当大臣」を新設し、健康保持対策に取り組むとあった。女の視点で設置された健康で心豊かな人生への願いをこめた施策が関係機関の密接な連携で展開するよう成功を祈りたい。

いじめや虐待、人間関係不適應等若い世代から高齢者まで年齢層が広い「ひきこもり」だが高齢者の場合は体力の低下、とりわけ生理機能のバランスの崩れから排泄のトラブルを案じて外出を控えるように思う。

新聞やテレビの生活用品広告は美容品と同等の頻度で高齢者の身体機能の補強や補助用品の紹介が目立つ。安心して外出したいと願ひ、他人知れず悩む方達に前向きに行動させるヒントを与えている商品の開発と



PRは今後益々増えていく。

私は60歳定年まで地方公務員として地域の健康づくり行政（保健師）に係わった。

はるか40年も逆上つての記憶でも健康相談で接した高齢者の相談内容は血圧のこと、歯の相談等の一般相談を重ねていく内に顔なじみになると身体機能退化の不安や排泄への不安が増えていた。

健康長寿は万人の願いで、運動不足の解消に仕事帰りにトレニングジムに通ったりジョギングやウォーキングに励む人も増えてきた。

しかし、体力が低下してくると根気も失せ、これとやってやるのではないのでついごろりと横になり、テレビの前で居眠り。飲酒傾向も強くなっていく。

筋力は3日寝込むと急速に衰え、益々出無精になり、歩く機能のみならず、脳や全身の機能低下、そしてひきこもりから孤立への悪循環を断ち切り「楽しく外出」を奨励しようと私が住むふじみ野市では2年前から健康機器メーカーと提携して「歩け歩け運動」を推進し、年間1000人の新規登録者に3年間継続で万歩計を貸与し、歩行記録や検診記録を定期的に入力さ

せ、年間歩数にに応じて、ささやかな奨励金を交付している。

歩きの健康習慣を定着させることで筋力を保持するねらいである。

地域で同じ万歩計を下げ歩いて歩くと初対面でも「頑張っていますね」と声を掛け合い、ちょっとした連帯感も生まれてくる。

実施期間を積み重ねると健康保持層が増えていき、「歩き」以外に健康習慣づくりの工夫も膨らむかも。

「健康は自分でつくり守るもの」一九七七年に50年後の超高齢社会を見据えた医療費抑制や寝たきり防止を目標に、当時の厚生省が掲げた標語が41年経過し、やつと実践定着かと感慨深く、期待もしている。

私自身の取組は退職を機に仕事と家事の両立から解放された自分時間を不得手な運動面に生かしたいと朝のテレビ体操、転倒予防の筋力アップ体操、グラウンドゴルフ（3年前から）、文化面で種々の講座やコーラス等の参加の際には中央公民館まで片道約30分歩いて運動量を増やしている。又、一人旅を楽しむ等自由時間を過ごしてきた。

健康づくりの3本柱「栄養」「休養」「運動」を念頭に活動する喜びと感謝の日々。そんな過ごし方も最近少し馬力が落ちて、週2日はのんびり休養を取ろう努めている。

隣人は元氣老人と羨ましそうに語りかけるから「私は寂しいのに」とは言いだせない。

大抵の年配者の心の内は私と同様に「孤独」なのかも想像して自分を慰めている。

子も巣立ち、部屋も生活用品も片づいた家は老いた二人の生活空間には広すぎるが「断捨離」作業も進まず、そこそこの生活が維持できる事が幸せかと納得して暮らす日々。

だが何故か佐しい。外出もせずそつと静かに暮らしておられる近隣の老家庭は一体どんな時間を過ごしておられるのかと隣の芝生が気になるこの頃なのである。

自宅で終末まで暮せることが最大の幸せと思う一方、老人の一人暮らし、二人暮らしを支援出来るボランティア人材もないと聞くといつまで現状を維持出来るかとその不安がまた孤独感をかきたてる。

老々支援は家庭内だけでなく地域で支えあい、慰

めあつて生きる時代になっている。

しかし、地域の受け皿の一つと思う老人会は「いきいきクラブ」と改名しても所詮はお茶のみとだべり会らしく、誘われても参加する気は起こらない。

少しはカルチャー要素がほしいと願っている老人向けに体操や懐メロ、ミニ健康教室等を組み合わせたサロンの案内が届いた。自宅近くのコミュニティセンターの集いはいつもの顔ぶれで会話も変化がない。

もう少し大きな輪の集いは小学校区単位なので少子化による空教室の開放は無理なのか。週2日開催し、種々(懐メロ、囲碁、麻雀や読書会……)クラス編成の老人学級にして参加者の輪が膨らむといいな、と思う。

保育園も不足している昨今、とても老人までは打ち切られること必至の夢を思いついてはため息が出るこのごろです。

(昭和14年生、柏原町出身/兵庫県で8年、埼玉県川越市で22年、通算30年間保健師活動に就く)

# 音楽と私

頼 澤 豊 (町田市)



この度編集部の方より投稿の御依頼があり、私が今までに経験してきた音楽関係のエピソードをまとめてみました。

小学四年生の時、団扇をヴァイオリンに見立てて弾く真似をした弟を、音楽好きの父が喜び、どのように調べたのかは分かりませんが、弟が氷上ヴァイオリン教室に通うことになり、私が黒井から石生の東小学校までの送迎をするようになりました。その内私も習うように勧められたのですが、当時ガキ大将だった私は「ヴァイオリンは女のする事」と渋っていたのですが、抗しきれず学年の終わり頃から習うことになりました。教室は氷上交響楽団の中心的な組織で、松原恭次先生（日経の私の履歴書の河合隼雄先生の時、一緒に合奏したメンバーとして登場）が吉良、酒井先生等郡内の

音楽の先生と協力して運営されていました。生徒は四十人位はいたかと思います。定期発表会の他、時には楽団と一緒に演奏会もありました。私の記憶では「ペルシャの市場」をやったのを覚えています。皆、戦後の自由で民主的な解放感の中で「音楽は本当に素晴らしいもの」といった絶対的な確信とエネルギーに満ち満ちていたように思われます。

教室は暫くして柏原駅前の中道洋裁学校に移り、私は中学二年の始め頃まで通いました。中学一年の時、父が妹のためにヤマハのアップライトピアノを買ってくれました。その後、妹が習っていた柏原町屋敷の桑垣先生（後の足立先生、オペラ歌手、足立さつきさんの母上）のお宅に暫く通いました。

また、これは余談になりますが、父君の足立先生には小二、小四と二回担任して頂きました。先生は立川清登のような明るい方でした。小六の頃、ヴァイオリンがとても好きになりよく練習しました。家には父のSP盤のベートーヴェンの交響曲全集等があり、運命、合唱等を始めの頃は手回しの蓄音機でよく聴いていました。

また、当時柏原町に、三谷広樹君というチェロの上手な同年の人がいて、後に芸高、芸大を経てNHK交響楽団のチェリストとして活躍しました。お姉さんもヴァイオリンがうまく地域の音楽の中心的な存在でした。残念なことに彼は若くして亡くなりました。芸高時代、帰省していた彼と彼のメンバーによるシューベルトのピアノ五重奏「鱒」の演奏の美しい調べが、ふと彼を偲ぶ時思い出されます。

また、最近では、黒井駅前旧姓山崎さんの娘さん、渚智佳さんが東京音大ピアノ科講師として頑張っておられます。昭和四十年、本来は哲学や思想を勉強しようと考えていたのですが、ひよんなことから私は東京医科歯科大学歯学部に通うことになりました。学校が何処にあるのかも知りませんが、それなりに刺激もあつたので暫く通ってみることにしました。

以前から上京したら作曲の勉強をしようと考えていたので、早速中古の足踏み式のオルガンを買い和声学の独習を始めました。その頃、書店で買った「音楽芸術」という月刊誌に、現代音楽の作曲家ノーノ（シェーンベルクの娘婿）のイル・カント・ソスペー

ソ（中断された歌）の分析解説記事があり、参考例として載っていた短二度の三音の堆積という不協和音をオルガンで弾いてみたところ、とても鋭く、透徹した美しい響きに感動しました。この体験が現代音楽に強く惹かれ、それを勉強するようになった原点だと思います。入学以来三年間大学に通っていたのですが、当時大学にはピアノが一台しかなく、練習することは本当に困難でした。

ある時電車から外を眺めていると「ピアノ時間貸」の看板が目に入り訪ねてみると、塾で教えてくれれば、ピアノはいくら弾いてもいいとの事でした。当時、ラーメンが五十円、ピアノは一時間二百円、一日二時間一ヶ月弾くと一万二千元、この額は六畳二食付きの下宿の一ヶ月の料金になりました。これならやっつけると両親に内緒で休学しました。結果的に二年休学し、塾では朝九時から夕方四時頃までほぼ毎日練習しました。それ以外に、ルーファーやレイボヴィッツの十二音技法の本を読み、更に松平頼則の「近代和声学」では、古代ギリシャから現代までの音楽理論、その他雅楽等の日本音楽、更に世界の民族音楽等多くを

学ぶことができました。

また時々、上野の文化会館の音楽資料室にも通いました。そこでは申し込むと、最新の現代音楽を楽譜を見ながらイヤフォンで聴くことができ勉強になりました。しかし能力もなく、このまま続けていると将来乞食になってしまうのではないかと考え、復学し歯科医の資格を取り町田市で開業しました。仕事が少し落ち着いてきた頃、桐朋学園の聴講生として週二日二年間通いました。三善晃先生の5人位の作曲入門的なクラスに入ることができ（その中の一人にピアニストの仲道郁代さんがいました）、戸田邦雄先生の十二音技法のクラスでは結果として私一人で一年間授業を受けることになりました。

また、八村義夫氏の現代音楽の授業では氏の強い個性が印象的でした。氏のフルートソロの名曲「マニエラ」の自筆譜のコピーを何回もお願いしやつとCDの発売会社の人から頂いた時は、大変嬉しかったという思い出があります。平成十一年、芸大に現代フルートに詳しい人と申し込んだところ、三田学園出身の増本竜士君が応募してくれました。

現在まで月一回のペースで勉強会を続けています。そして彼の先輩の木ノ脇道元さんには私の「独奏フルートのためのデカルコマニー」を吹いてもらいました。CDに仕上げ春日町明德中学校の古希の同窓会で配りました。また、卒十七回生が担当した柏陵同窓会の総会では増本君に同IIを演奏してもらいました。二年前前に出版された立花隆「武満徹、音楽創造への旅」は武満氏を知る貴重な本で、とても勉強になります。

因みに三善晃先生には「遠方より無へ」という達人の著作があります。西洋音楽はグレゴリア聖歌、ルネッサンス、バロック、古典派、ロマン派、後期ロマン派と発展し、二十世紀の始め独自の響を求めて無調からシェーンベルクの十二音技法による音楽が登場いたします。ベルク、ウエーベルンを経て、トータルセリエ、トーンクラスター、偶然性、ミニマル音楽等、いろいろなスタイルが現れ発展してきました。

最初は、機能と声学を中心とした調性音楽をいかに克服していくかという調性への挑戦から、現在では、あらゆる技法の使用を可とする「パントナール」汎調性という概念に至っております。私的には、一九五〇



会が都内を中心に開催されることになり、新国立競技

1 はじめに  
二〇二〇年は、スポーツの祭典第  
32回東京オリンピック競技大会及び  
東京二〇二〇パラリンピック競技大

足立敏 晤 (茅ヶ崎市)

## 五輪の記憶

〃発想の転換とオリンピック金メダル〃

年から七〇年位の間にはいい曲が集中していると思っ  
ていますが、結論的にはいい作品ならばどんなスタイル  
でもいいということであります。日本の現代音楽には  
優れた作品が沢山あります。私も未熟で遅々とした歩  
みではありますが、今後とも勉強を続けて行きたいと  
考えております。

(昭和二十一年生／春日町出身)

場の建設をはじめ、各競技施設の建設・リニューアル  
工事が佳境に入っている。一九六四年に東京都で第18  
回オリンピック競技大会がアジアで初めて開催されて  
いるので、実に56年振りのことになる。振り返ってみ  
ると私自身がオリンピックを記憶するようになったのは、  
第15回のヘルシンキ大会からであり、この時は、  
まだ家にラジオがなく新聞記事を読んで知るのみで  
あった。第16回メルボルン大会の時には、我が家にも  
ラジオが入り、南半球のオーストラリアからアナウン  
サーの声が遠くになったり、近くになったりするNH  
Kのラジオ放送に聞き耳を立てた記憶が懐かしい。四  
年ごとに開催されるオリンピックにおいては、その都  
度、数々のドラマがありヒーローとヒロインが生まれ  
た。今度の東京大会では、果たしてどのような名勝負  
が生まれるのだろうか。

## 2 「走り高跳び」のフォームの一大変革

一九六八年の第19回メキシコシティ大会では「男  
子走り高跳び」の種目で鮮烈な印象を残した。陸上競  
技の神髄は「より速く・より高く・より強く」へのあ

くなき挑戦である。より高木の競技種目のひとつに「走り高跳び」がある。メキシコシティー大会当時の跳躍フォームは、バーの上をうつ伏せになって跳ぶ、いわゆる「ベリーロール」が主流であり、出場選手がこのフォームで試技する中、これとは真逆にバーの上を仰向きになって跳ぶ、いわゆる「背面跳び」の選手が一人いた。彼こそが陸上競技王国アメリカが誇る「ディック・フォスベリー」選手であった。同選手も従来は、ベリーロールで跳んでいたが、一向に伸びない記録に悩み、練習の時何気なくバーの上を仰向きになって跳んでみると意外に軽く身体が浮くことに気付いた。それ以降「発想の転換」で得た独自の業「背面跳び」に一層の磨きをかけ完全にマスターし、メキシコシティー大会にさつそうと登場した。テレビ画面をおして観るフォームは奇抜で、世界中を驚かせるに十分であり、見事金メダルに輝いた。

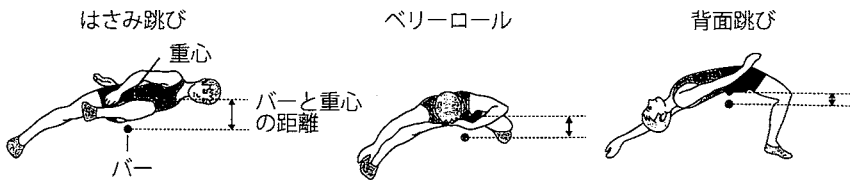
その彼が、後年、往時をしのいで、次のように述べている。

「オリンピック当日、私は最高のコンディションで試技を迎えることができた。スタジアムには8万人の大

観衆が詰めかけ緊張した。ウォーミングアップの時、観衆は私の変則な跳び方に気付き、それから彼らの視線が私に釘付けになっていった。私がスタートの態勢に入ると、スタジアムはシーンと静まり返り、バーを跳び越える度に大歓声に変わっていった。スタジアム全体がまさに私の背中を押ししてくれた。それが当時の五輪記録となる2m24まで一度も失敗せずに跳ぶことができた大きな要因だったと思う」

「走り高跳び」のフォームは「はさみ跳び」「ベリーロール」「背面跳び」の流れで進化(別図参照)して

●跳び方による重心とバーの距離の違い



深いアーチを作れないため重心の位置が高い。

腕や脚を下げることで胸や腹の位置を高く保てる。

深いアーチを作り、頭や脚を下げることで、お尻の位置を高く保てる



きたが、スポーツ科学の研究によって「背面跳び」は、バーと重心の距離が一番小さく「より高く」の理になったフォームであると解明された。50年後の今日にあつても「背面跳び」が走り高跳びの基本フォームであり、男女を問わず全員がこのスタイルで記録に挑戦している。現在の男子の世界記録は2m45であり、25年前に記録されたもので、すでに四半世紀が経過している。東京オリンピックが世界新記録誕生の舞台になるであろうことも、決して夢ではなく更新を期待したい。

### 3 おわりに

東京オリンピックの日程は、次のとおりであるが、炎天下の東京でどんな名勝負が演じられ、ニューヒーロー・ヒロインが現れるだろうか。真夏の祭典を現場に向いて観戦するのが目下の夢である。

①第32回東京オリンピック競技大会

二〇二〇年七月二十四日（金）

八月九日（日） 17日間

②東京二〇二〇パラリンピック競技大会

二〇二〇年八月二十五日（木）

九月六日（日） 13日間

〔注〕イラスト図版「金メダリストは知っていた！」技術評論社刊

〔昭和17年生、青垣町出身／元国家公務員〕

## 東海道6日間自転車旅〈その1〉

平成30年1月25日～1月30日

廣内喜彦（摂津市、在京時江戸川区）

大坂～枚方～京・三條大橋～石部～桑名～白須賀～

江原～小田原～日本橋

東海道57次（東海道53次、京～大坂、京街道4倍で57次）

総走行距離 約610km

### 1. はじめに

「東海道を京都三條大橋から東京日本橋へ歩いて行く」という思いはずっと前からあった。

東京で学生時代を過ごしていた昭和42年、2年生の

夏休みに綾部市出身の内藤君と、日本橋から京都三条大橋までの東海道を野宿しながら歩いて帰ろうという話を持ち上がった。近所の銭湯にでも行くような気軽な気持ちで、数千円のお金と着替えの下着を詰めたリュックを背負って出かけたのを覚えている。

当時の古いアルバムを引っ張り出すと40枚ばかりの白黒写真と行程表が貼ってあった。

「昭和42年7月11日午前0時日本橋出発 気温23度……」

無茶な歩きをしながら、「7月22日、三条大橋、午後4時47分着」となっている。

歩き旅はきつかったけど、楽しかった。軒先を快く貸してくれ、風呂にまで入って行け、と言ってくれたおばさんもいたし、道行く人との短い会話にも親切と温かみを感じ、三条大橋で12日間の旅を無事終えている。

そんな旅の後、今度は三条大橋から逆に日本橋へいつか歩いて行こうと思っていた。

それから50年近く経ち、定年退職した今、念願の日本橋行きを実現すべく具体的に考え始めたが、まず体

力は確実に落ちていく。連日の歩行に足腰は耐えられるのか不安があるし、半月以上宿に泊まっただけの旅の費用は大きい。

そんなころ、自転車旅の記事をたまたま新聞で読んで、一瞬でこれだと決めた。自転車であれば時間は歩きの半分で行けるだろう。足腰の負担は少ないし、掛かる費用も大幅に抑えられる。

自転車旅の経験は無かったが、大阪から丹波間片道約100キロ、往復200キロを2日で走れば東海道600キロを6日で走破できるだろうと考えた。近所の自転車専門店を手頃なクロスバイクを購入し丹波まで試走する。

丹波の旧友藤田君宅で一泊させてもらい、往復をほぼ予定の時間で走れて、これなら行けると自信がついた。

1月24日出発準備が整うが、その夜、「今夜遅くから今季一番の寒気が日本列島に入ってくる」とのニュースが流れた。25日早朝のTVでも「彦根や三重

県いなべ市で積雪26cm」と伝えている。

とてもだめだと諦めかけたが、行けるとここまで行ってみよう、鈴鹿峠が越えられれば後はなんとかなると考え直して呆れ顔の家内に見送られ、予定より1時間遅れて出発。

## 2. 寒風の中 いざ 日本橋へ出発

1月25日(木) 晴

午前9時出発。風が冷たい！ 覚悟はしていたが冷たい。走りなれた近所の道から安威川、淀川を越え、しばらく淀川河川敷の自転車道を枚方方面に進む。上空は晴れているが、北摂の山は雲に隠れて、おそらく雪だろう。さすがに、行き交う人も自転車もなし。

京阪電車の枚方市駅を過ぎ、桜で有名な淀川三川合流域から淀、伏見を抜け三条大橋へ向かう。京都市内に入ると、道端の日陰に雪が残っている。三条大橋には予定の12時に到着。

これからは、蹴上を通って山科に抜ける道だが、歩道には雪が残っている。踏み固められたうえ轍が出来、とてもまともに漕いで行ける状態ではない。両足を地

につけて蹴り蹴りしながら進んでいくが、幸いに次第に残雪は減っていく。

山科を越え、昔歩いて通った「逢坂の関」の石碑に一瞬の懐かしさを感じるも先の行程を思うと、一気に現実に戻り先へと急ぐ。大津市内を過ぎ琵琶湖畔進むこのころから左脚の大腿筋と膝に痙攣と痛みが走り焦る。右膝は時々痛むので覚悟はしていたが、左脚に異常がでるのは初めてだ。初日の半分を走っただけで異常がでるとは、焦りながらも暫く右脚だけで漕いで様子を見る。一過性のもので、焦るなど自分に言い聞かせる。500メートルほど左脚をだらしとして休ませていると、痛みが引いてきた、助かった、これなら多分行ける。ゆっくり漕ぎながら瀬田の唐橋を渡り、国道1号線沿いの今は県道になっている旧東海道を草津へ進む。

草津の本陣、東海道・中山道の分岐に立つ道標、江戸時代から続くという「うばがもちや」を後に、石部を過ぎ水口宿の手前、今日の宿泊地湖南市三雲へ向かう。予約のホテルは街道筋にありすぐに見つかる。午後4時50分到着。道中、日が落ちる午後5時までには

宿泊地に到着する行程を組んでいたもので、まずは初日、予定通りに安堵。

走行距離 93 km 実乗車時間 6..00

### 3. 小雪舞う鈴鹿峠越えへ

1月26日(金) 晴れ時々小雪

明けて二日目、午前8時30分ホテルを出発する。今日は鈴鹿峠越えに、気持ち引き締まる思いだ。なんとか雪なく通してくれ。しかし、土山まで11kmの道路案内板が出た辺りで雪が舞ってきた。これから峠に掛かるのに嫌な予感、先に見える山は雲に隠れ、不安が

よぎる。とにかく行けるところまで行く、と決め漕ぎ続ける。小一時間も走ったころ、薄日が差して晴れてきた。

国道1号線から土山宿のある旧道に入るが、思った以上に昔の街並みが整備復元され、町全体が町おこし

に力を入れてるのが分かる。土山を過ぎたところからそろそろ上り坂になりはじめ、歩道には雪が残っており、とても漕いでは上られない。車道をノロノロ漕いで上がるのは危険と思いつ道を押し上る。これが鈴鹿峠であれば、覚悟したほどの勾配ではない。さて、どこが鈴鹿峠か、と先を見やりながら押し上がるがきつそうな坂は出てこない。どこまで続くかと思っていた矢先「鈴鹿トンネル 長さ276m」の案内板が目飛び込んできた。峠はまだ先だろうと思いつつトンネルを抜けると下り坂。「三重県亀山市」の案内板、やった！ 鈴鹿峠は無事越えられた、逸る気持ちを抑えながら雪の消えている車道を一気に下っていく。まさにご褒美。全くペダルを踏むことなく走る、走る。鈴鹿馬子唄発祥の地と言われ、山間にある小さな集落、阪之下宿を過ぎ関宿まで快調に走る。

関宿も土山宿同様、昔の街並みが残されており西の追分から東の追分まで、2km弱の街並みに面影が残る。ゆっくり見聞している暇もなく出発。

ひたすら今日の宿泊予定地桑名を目指し走る。ただ今日のホテルはまだ決めていない。一日目がどうなる



鈴鹿峠の手前で雪模様

か不安もあり、二日目は行き当たりばったりで飛び込みで泊まろうと考えていた。桑名駅前に午後4時過ぎ到着。まだ陽もあるし10km程先の弥富までぐらいは行けるだろうと欲をだすがこれが誤算だった。

弥富はもう少し大きな町だと思っていたが、国道沿いには大きな建物もなく民家や畑ばかりで、近辺で泊まれるところは鍋田川温泉ぐらゐとのこと。一度も聞いたことのない温泉だが、陽も落ち午後5時近くになり冷え込みもきつい。教えられた道を辿ると、畑の中に一軒だけ温泉旅館があった。近郊の人が温泉浴場を利用してゐるらしく、思った以上に賑わっていた。飛び込みであることを伝え一人一泊出来るか尋ねる。二人からしか受けてない、とのことであったが、二人分でもいいからと頼みこむ。飛び込みは高いものにつく。

走行距離 94 km 実乗車時間 6 : 20

#### 4. 浜名湖畔めざしてひたすら走る

1月27日(土) 晴れ

天気がいいぶん朝の冷え込みが厳しい。午前8時35分出発。

宮・熱田を目指すが蟹江を過ぎて道端の雪の多さに驚く。この辺りは低湿地のせいか途中に川が多い。庄内川の手前の新川を越えた下り坂で、雪の踏み固まった歩道で一瞬にして横転した。なんとも怖い。ひっくり返った序に路面を見ると、薄っすら雪を被っているが下は氷だ。しばらく押し歩いて歩くことにする。熱田に近づくにつれ雪も消えやつと乗って走れる。

熱田神宮の南を通過、1号線を南へ、桶狭間の古戦場跡を横目に鳴海、知立へ。知立からの旧道筋には、今も一部松並木がきれいに手入れされ残っている。矢作川を渡り岡崎に入る。岡崎城を右手に尚も南へ藤川宿、赤坂宿、御油宿へ。赤坂宿と御油宿は、東海道の宿駅間では最も短い距離で、約1・7kmとのこと。御油の松並木は今も健在で見事な並木を見せていた。豊川を過ぎて吉田宿、現在の豊橋市の中心部に位置するらしいが、1号線通過でパス。懐かしい路面電車に遭遇した。そうか、豊橋にも路面電車があったのか。この先、二川宿まで進み二川で東海道と別れJR東海道線沿いの県道330号線で湖西市のホテルへ午後4時40分到着。今日も、午後5時までの到着で予定内。平

坦な道の連続で、距離も難なくこなせた。只、北に回った結果、白須賀宿を飛ばすことになった。

走行距離 106 km 実乗車時間 6..30

## 5. 思い出の大井川で…… 1月28日（日） 晴

天気もいので、気持ちよく、午前8時の出発とする。今日は、以前の清水市、現在の静岡市清水区の江尻宿までの走行だ。快調に15分ほど走って、ふと、今までと違う体の違和感を覚え背中に手をやるとリュックがない？ ホテルの部屋に置いてきたのだ。あれだけ忘れ物がないようにベッド回り、洗面所をチェックしてきたのに、自転車に次いで大事なリュックを忘れるとは……体から力が抜け、張り切っていた気持ちが一気に萎えるのが分かった。くよくよ考えても仕方ない、取られたわけでもないど苛々する気持ちを抑え、ホテルへ折り返す。結局30分のロスで、気を取り直し、折り返した地点も複雑な思いで通過して新居宿から、舞坂宿に向かう。舞坂は、今は浜松市西区、東海道は国道257号線になっており浜松市中心街に向かう。浜松駅を北側に越え、尚も北上すると途中にへ秋葉街

道〈国道152号線と案内が出ている。間違えた。駅を越えたところで右折するのだったと気づき戻すが、道中東海道は、国道、県道と頻繁に呼称が変わり分かりづらい。

広目に整備された天竜川の歩道橋を渡り、見付、袋井、掛川と割りと平坦な道をスムーズに進む。次に続く日坂宿は、山間のひっそりとしたところにあり、しっとりとした昔の面影も残している。今日の一番の難所は、日坂にある小夜の中峠とそれに続く金谷峠。覚悟はしていたが、長々と続く坂道に途中から押し上げることにする。

午後2時、前日に予約した清水のホテルまで、まだ50km以上ある。金谷峠を越え金谷の街外れを過ぎ大井川へと急ぐ。

ここは、学生時代東海道を歩いた道中で一番に思い出すところだ。大井川の橋の下で川風に吹かれ思いっきり昼寝し、大きな石の上に洗濯物を並べて干したのを懐かしく思い出す。当時、この川の袂で、自転車で乗ったおじさんが、連れの内藤君と私にそれぞれ1000円ずつ手渡し、「気を付けて帰りや」というよう

なことを言つて余り多くも語らず去つていった。多分、貧乏学生を気の毒に思つてのことだと思つたが、正直、有難かつた。これで数日分の食事代が出た。

そんな昔のことを思い出しながら大井川を渡り数キロ行つたあたりで、鉢巻をしてリュックを背負つた元氣そうな高齢男性に声をかけられた。大井川までの距離を訊ねられた後、自分は和歌山田辺に住んでいて全国を歩いて回つてると、延々と話は続く。

煮しめ色の鉢巻には、「全国一周」と書かれているのが薄つすらと見える。歳を聞くと66歳と見た目よりは若い。こちらは先を急ぐので、話を切り上げようとしたら、「あのう、出来たらカンパしてもらえませんか」と言われ、瞬時に昔貰つた1000円のことを頭を過り、何の疑いもなく、丁度ポケットにあつた1000円札を手渡した。「助かります、ありがとうございます」と言われてその場を去つたが、1000円でよかつたのか頻りに気になつた。50年分の利子は……。

島田に入り、藤枝を過ぎ岡部、今日、二番目の難所宇津ノ谷峠だが、これも難無く越えて丸子宿、ここはもう、静岡市駿河区、道中で最も小さい宿場だつたとか。

午後4時を回り少し急がねば、あと府中宿（静岡市）を過ぎ、18キロ先の、江尻宿（静岡市清水区）へ。午後5時の到着予定時間をオーバーし、辺りが暗くなつてくる分、道も判り難くなり、尋ねながら探すことになつた。午後5時45分到着。

走行距離 126 km 実乗車時間 7.40  
後編は50号へつづく（昭和22年生まれ 市島町出身）



撮影・足立悦雄





# “山ざる”のことなど

— 何事もなるようになるもの —

前郷友会会長・現顧問・山ざる編集委員

## 坂上勝朗さん

● インタビュアー

岡田昌子  
上 高子

(撮影上高子)



### 郷友会・山ざるとともに半世紀

—— 長らく郷友会の屋台骨として会運営を全面的に支えていただいています。その「山ざる」は来年で50号を発行することになりますが、会と「山ざる」に関りを持たれた経緯をお聞かせください。

坂上 友人に誘われて、昭和40年ごろに、たしか東洋経済クラブ（日本橋）で開かれた総会へ顔を出したのが、会との初めての出会いです。会長は春日町出身の石橋次郎八さんでした。石橋さんは、日本蚕糸業界の重鎮として知られていました。

—— 何人ぐらいの集まりでしたか。

坂上 40人たらずではなかったかと思えます。

—— 雰囲気はどんな具合でしたか

坂上 30歳を過ぎたばかりの若輩には、まわりの方々は大きすぎて、ただ恐縮して座っているだけという有

《プロフィール》 昭和9年9月 三田市生れ、昭和11年両親の帰郷により丹波市（旧水上郡葛野村下新庄）へ、以後高校卒業まで在住、昭和29年上京、法政大学政治学科卒業、時計商社を経て、創立間もないDMSへ（現在も「山ざる」送付作業を委託）入社、平成16年退社。



様でした。その総会で世話人をしてもらった松山幸逸さんが、来年には機関誌を発行したいと提案され、出席者から500円の出資を募られたのを覚えています。創刊号は昭和41年に発行されますが、わたくしの手元にはありません。誌名の命名と題字の揮毫は石橋会長の案と手になるのだそうです。

松山さんは、報知新聞の記者から重役を経て、戦後はラジオ東京（現東京放送ⅡTBS）創設にかかわった方と聞いています。

――創刊が昭和41年とすると来年は53号ぐらいになっているはずですが。

坂上 第2号が出されたのが昭和45年、第3号が昭和47年と逐年発行とはなっていない。「機関誌を出す」といっても、財源は全くなく、松山さんはわれわれ若い者に会うたびに、金が無い、お前たち何とかしろといいながら、広告取りやその他の財源を求めて走り回

ってもらった」（渡辺隆男さん談）という有様だったようです。

第3号からは二玄社社長の渡辺隆男さんが発行業務のすべてを引き受けられ、今日の礎を築かれたのです。――草創期の涙ぐましくも活気が感じられるお話ですね。そのころから「山ざる」にかかわられたのですか。坂上 いいえ。初めて出席してから10年ほどは会には参加していません。そんなところへ松山さんが私の職場に訪ねてこられて、会の活性化を図るため、会員を増やしたい。ついてはそのための名簿作りと事務方の仕事を手伝ってほしいとの申し入れがありました。

――名簿作りとはどんな方法？

坂上 手掛かりは当時の柏陵同窓会（柏原高校卒業生）名簿と桃陵同窓会（氷上農業高校卒業生）名簿。静岡県と新潟県を結ぶ線以東、北海道までの地域在住の人たちをリストアップしてカード化しマッチングしたものを名簿化するわけです。これが現在の名簿の原型をなすものです。

――そうやって得られた人数はどれくらいになりましたか。

坂上 従来の600〜700名を加えて2000人近くになりました。それをもとに様々な案内を出したり、「山ざる」を送ったりするのに、あて名書きをするのですが、その数になると、手書きをしていては時間と労力の無駄となってしまう。幸い当時わが社に漢字ラインプリンターが導入されたので、それにインプットして名簿を管理することになりました。現在は事務局を承ってくださっている岡吉明さんのお蔭で、数段のレベルアップが施され、迅速な作業遂行と完璧な情報管理がなされています。

この名簿づくりが、会にのめり込むきっかけとなりました。

——ここまでやってこられたのには、なにか信念がございましたか。

坂上 信念というほどのものではありません。ただ、引き受けた以上は、負託に応えるべく、自分なりの努力を注ぐということをモットーに、続けてきたにすぎません。自分に足りないところは、その道の能力のある人に助けを借りれば、素晴らしいものに仕上げてくださいます。そういう意味で、会長を務めさせていた

いた8年間は、実に素晴らしいスタッフに恵まれ、楽しく仕事を遂げることが出来ました。ありがとうございます。

——「山ざる」は表紙も内容も一流のプロとアマが上手に相乗効果をあげていて、お陰様で好評をいただいています。編集のようなことが、お好きな分野でしたか。

坂上 いや、この道には全くと言っていいほどの門外漢です。なにかの編集という、高度な創造性が求められるような仕事は、わたくしには向いていません。ただ、わたくしには、嫌な癖がありまして、本でも新聞でも、自然にミスプリ探しをしながら読んでいるという事なんです。蔵書を読み返していると誤字脱字を訂正したり、地名や年号などに？マークを付けたっている跡が見られます。こんなたわいもない悪癖が、「山ざる」の校正をお手伝いするときにお役に立っているのかも知れません。

家族揃って未来が輝いて見えた東京へ

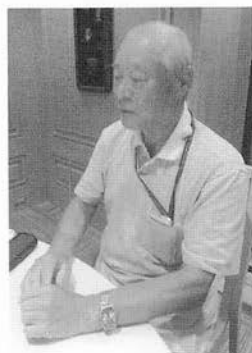
——上京の動機をお聞かせください。

坂上 青雲の志というようなものはなく、ただ現状の閉そく感からの脱却を、東京へ行くという中に求めたのではないかと思います。本来であれば、農家の長男で、しかも弟妹達はまだ幼いわけですから、家にいて、女手ひとつで5人の子供を育ててくれた母の手助けをすべき立場だったのです。しかし、没落農家の哀しき、耕す田畑はもういくばくもなく、担任の先生にも進学をすすめられて、葛飾区小菅にあった先生の親戚のお世話になりながら、学校通いをするようになりました。バイトしながらの苦学生ですから、授業料も滞りがち。一年生の期末試験は受験不可の裁定で留年寸前。ほかの貧乏学生を語らって学長室に受験許可の直談判に行ったことも、懐かしくもほろ苦い思い出です。

——田舎のお家はどうかだったのですか。

坂上 母はわたくしが卒業したら東京へ行くこと決めていて、わたくしの卒業と同時に、わずかに残った田畑と家屋敷を始末して、一家を挙げて上京してきました。しかし、家族そろったのもつかの間、その年に母は亡くなりました。家はもう跡形もありません。

——その後は辛い日々が続いたことを、お察しします。



お母さまへの思いが坂上さんを丹波探求に導くのでしょうか。

坂上 そうですね……。

苦勞の連続だった母を思うと、丹波でのこと

は、あまり思い出したくないのだけれど、心の奥底にはいつも、葛野村の山川草木、おさな友達の顔々などが漂っています。

### 元気の秘訣

——傘寿を過ぎてもお元気の秘訣は。

坂上 ことに健康のために何かをする、ということはありませんが、84才ともなれば通常は誰かが声を掛けてくれるということは少なくなります。したがって、こちらからその機会を作る必要があります。ですから、努めて人々との交わりの場と時間を求めるようにしています。それがテニスであったり、介護施設へのボランティアだったり俳句の会だったりするわけです。

それに、いささか道学者めきますが、「今日を精一杯

生きる」ことをモットーにしています。とはいえ、明日を思い煩うことも多いですね。

——坂上さんを知ることがは郷友会・「山ざる」の歴史を知ることでもありました。半世紀に亘って支えて下さった坂上さん始め渡辺会長・諸先輩方のたゆまぬご尽力の成果が今に繋がっています。尊敬の念を抱くとともに感謝申し上げます。

## インタビューアヒト言

岡田昌子

郷友会役員・「山ざる」編集担当の任務をいただいで以来お世話になっていきます。人への興味関心をうまく生かされ、ポジティブで寛大で受容的な態度は仏様のようなです。また博識家でもあり、我が身の足りなさを反省しながら学ばせてもらっています。

(柏原町出身)

上 高子

坂上さんとは長い付き合いで「NPOアジアの新しい風」では日本語学習者たちとメール交流をされ、留学生のお世話も随分して下さいました。いつもおばあさんたちの仲間に入って気楽におしゃべりを楽しめます。日本の男社会の負の面をよく分かっっておられ年齢の割にリベラルなところが垣間見られて心を許してお話ができる稀有な存在です。

(氷上町出身)



撮影・岡田昌子

俳壇

九十五歳の夏、俳句もエッセイも寄稿出来まことに感謝しています。『山ざる』に惹かれまして出来る上がる秋までの希望が湧きます。

久呉 道子（熱海市）

「祝盃」の独唱に酔ふ新年会

門松に出迎えられて正す衿

オーロラを放しつ日の出三日かな

虎が雨親しき友の逝きし夜半

春雨や山川草木美容液

さくらんぼ峠越えて来たりけり

永き夜の老い増す日日を惜しみけり

※

故郷は、ますます遠く遙かである。しかし、句に現れるところをみると、記憶の中の故郷は、変わらず近いということか。

金子 徹（富士市）

—悠郷・七句—

抗いて故郷発ちし霜夜汽車

茶の花や訛懐かし人と遇う

山菜で酌む酒地声の弾む宴

焼芋の温み一刻 故郷遠し

今も母校に大樹のありて楠若葉

そんなこともあったな桜と語る

ラムネ飲むどうの昔を転がして

※

わが家の戦後は耕やす田畑とてないに等しい有様でしたが、それでも麦刈り、田植、稲刈など、なつかしい農作業の思い出が蘇ります。

坂上 勝朗（板橋区）

麦秋や素首の痒き想ひのみ

毎年の垣に花織る烏瓜

野仏へ誰ぞが夏の涎掛

※

丹波市山南町上滝の恐竜（タンバチタニスアミキ

ティアエ)化石発掘現場へも、十一年を迎えた今も見学者が増えています。初めてのの方も何回もという方も、嬉しいことです。

大野 昶(俳号・沙年) (丹波市)

此の後は賽の目まかせ絵双六

花万朶もお寺も学校も

恐竜の幟はためく田植道

万緑を吹きぬけ風の無垢となる

秋風のそこに来てをり綾子句碑

自然薯やまのいも人それぞれ生き模様

一陣の風一山に木の葉雨

※

六月は父の命日もありますので、丹波に行きま  
す。

藤田 玲子 (人間市)

満開の花を引き立て昼の月

霞川名残の花を友と愛つ

やぶ椿いやいやをして春の風

鳥鳴いて水面に写る馬酔木かな

雨上がり傘をたためば著莪光る  
白藤の香に誘われて父偲う

※

年々感受性が薄れて行きます。

上田道代 (目黒区)

残雪の路地 するめ焼く匂い

よみがえる丹波の冷氣 今朝の鋭寒

凍てつく夜 アネモネ一束小さい暖

桜花 また一店舗消える街

赤濁満月 心騒ぐ 月食の夜

幼子のひらがな にじむ紫陽花雨



撮影・原谷洋美



## 詩 座……………

認知革命？

上 高子 (世田谷区)

「認知革命」という言葉に出会った。

それまでの慣れた考え、当たりまえ、大事に思っていたこと、などが

ひっくりかえってしまうような心の変化を言う。

ある朝、新聞で読んだ言葉が、ふと私の心を解放した。

「人は誰しも死ぬ。死ぬ存在として考えること自体の喜びが人間の最後の抛り所になる」

むろんこれは突然の認知ではあるまい。

ずうーっと心の奥底に沈んでいたのかもしれない。

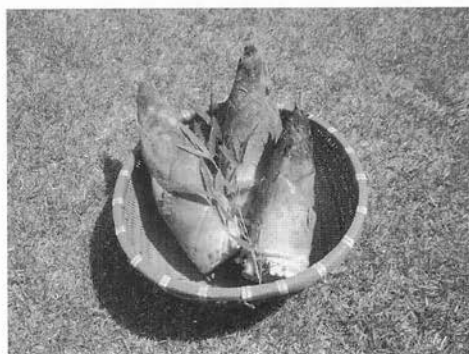
そうだ、「散る桜、残る桜も、散る桜」と先人は歌った。

認知革命というより、再認知と言った方が当たっているかも。

ちよつと早過ぎるじゃないの、と問う声。

でもちよつと楽になったよ、と別の声。

このところ、私の心はこの認知に揺れている。



撮影・原谷洋美

歌壇……………

一年ごとに体力の衰えを実感いたします。会いたい人にもなかなか会えず、週一回のリハビリ通いだけは続けています。

足立 美都子（春日部市）

同じ事また言っているお向かいさんリハビリ室の午後のひととき

室の外遠くに富士山見えますよりハビリ室のスタッフ告げる

故里にお墓残して街に住むいたし方なき事情あれども

足腰の弱りて長旅出来ぬ身を嘆きつつ見る故里の夢

春日部の街流れいる古利根の川面かすめてゆりかもめ翔ぶ

※

今年の冬一番寒かった二月五日の朝、五十三年間共に過ごして来た家内が突然天国に旅立ちまし

た。心の中にポツカリ穴の空いた毎日です。

荻野 哲男（狭山市）

春が来て三ツ葉つつじが庭に咲きひと枝折つて妻にささげる

猫までが妻が逝きたる事を知り古着の上で丸くなりたり

花が咲く春の季節が好きだった咲く花見ずに妻旅立ちぬ

※

届いた便りの中の美しい言葉を本歌取り。これも古くからの韻文の妙味です。

坂上 勝朗（板橋区）

植ゑし田と待つてゐる田の広ごりをパッチワークとふり便り

竹の子を掘りに来ぬかと誘ひ越ししインクの青の太さ懐し

踏ん張つてそれからどうする雨蛙天にも地にも敵満ち居るに

※

四十年以上も前の香港時代の繻子張りの手帖が出てきました。それにはさんであった「海外新聞（日本語版76年12月24日発行）」に、私の文「香港雜記」があり、三首を拾いました。絵に描いたようなお手伝いの阿媽。竿で漕ぐサンパンは水上生活者の自家用舟みたいで、いまも想い出します。

木呂子 惠美子（清瀬市）

夏風邪かいと長びきて涙ぐむ我に白きかゆ持  
ちくれし阿媽  
サンパンにて買物に來し海の子等舟をつなぎ  
て岩上に遊ぶ

街角の陽だまりを背に靴なおす老爺はのみを  
片手に居眠る

※

自然に振れることが好きですが、仲々出られる  
時ばかりではありません。元気で何時までも恩恵  
に預かれるよう願っています。

山本 述子（三浦市）

満開の花に集ふ家族連れ若者たちも穏やかに  
見ゆ



撮影・岡 吉明

塚山の花見帰りの楽しみは二輪草の群確かむ  
ること

真白なる花卉薄き利休梅弁天堂を守るがに咲  
く

新緑の寺の庭木の濃く淡く阿の字の池に影落  
しをり

花祭り天上天下を指し示す釈迦如来に甘茶を  
献ず

闇の谷戸螢追ひつつそぞろ行くいつしか心の  
闇も晴れをり

年々、加速度を増すように感じるこの頃、もう  
 ○○才、まだ○○才と葛藤の日々ですが相変わら  
 ず多忙に追われております。それもまた幸せなり  
 と。

※

井出 恭子（川崎市）

生き居れば百寿となりぬ父の年に金婚式を迎  
 えし我ら

水無月の父の命日巡りくるひ孫娘の就活実り  
 側溝に咲くたんぽぽとバスを待つ友の訃報の  
 届きし朝に

我が想い里に残して紫陽花の雨降りやまず今  
 日も暮れゆく

君の住む里までの距離六百キロ縮めてほしい  
 満月の夜は

※

一昨年、九十七歳の母を見送り、ふるさどがい  
 ちだんと遠くなりましたが、しかしなつかしい思

い出は次々と甦ります。

田中 一美（八王子市）

あそこにもここにもあると蓬つむ草餅つくる  
 祖母に応えて

見渡せる田圃の中を一輛の電車が西へと走る  
 山里

たんぽぽの茎を含みて笛を吹くれんげの花の  
 あふるる中に

中学の裏山に咲く山百合にあくがれつつもや  
 きもちやきし

友達のことばに悩み友だちを傷つけしことも  
 今はなつかし

教室の窓から見えし紫陽花の雨にうたれてさ  
 えざえと碧

夕暮れて友と語りし裏路地のあまりの狭さに  
 いま驚きぬ

※

丹波のミニ紀行、私も福知山線に乗っているよ  
 うな気持ちになりました。

福田 治子（横浜市）

右手首病みてもうすぐ三か月冷蔵庫の味噌干からびており

老二人訪ふ人もなき日よの午後のひととき  
昼風呂あびる

届きたる掃除機なんとピンク色新婚みたいで  
嬉し恥ずかし

※

丹波からの風、異国から吹いて来る風。日々を  
ゆらしたいと風待ちをしています。

原谷 洋美（杉並区）

さびしければ庭に出でたり白紫蘭探せば丹波  
ゆ風がこだます

萌黄風渡れる畦にへびいちご這ひもとほろひ  
朱実を灯す

芝に生ふ朝顔双葉は去年の種見えざる色を風  
は聴きゐつ

落ち種はなにいろ咲かすか花色に染まりて風  
は紅に濃紺

大き口開ける入れ子の鯉五ひき飾り飾られ風  
待ちをせむ

五つ目は親指ほどの金の鯉口を結びて疾風に  
向かふ

ロシア風をマトリョーシカは湛へり入れ子  
の鯉よりやはらかき風

六つ生る小さき緑の枇杷の実の七つめ風待ち  
坐るるをうな



撮影・岡 吉明

## あの将棋の羽生竜王が丹波にやってくる！

将棋の第31期竜王戦が福知山で開催される。現在30期の竜王である羽生善治さんが挑戦者と第4局を11月24日・25日に福知山城で戦う。これは福知山市が竜王戦の公募に申し込み、地域文化振興や話題性などが考慮されて決まった。

竜王戦は8つあるタイトル戦の中でも最高位にランクされるもの。ひよっとしたらあの藤井聡太七段との戦いが丹波で見られるかもしれない。そして福知山での戦いが第4戦であることを考えると、ここで「新竜王・藤井聡太」が誕生する可能性もあるかもしれない。

**丹波のふるさと住民登録制度に申し込みませんか？**

丹波市では「ふるさと住民登録制度」を設けた。丹波市にゆかりや愛着のある市外在住者

に情報を提供し、交流やつながりを深めることを目的にしたもの。市の発展を応援していたり、市の施策に理解や関心がある人らが対象。年齢、性別、国籍不問。登録料や年会費はいっさいなし。登録者には、広報紙や観光パンフレットの送付、市の計画などへのパブリックコメントの案内、市の施設の入館料免除、登録店舗で使えるクーポン券プレゼント、市の特産品がもらえるキャンペーンなどの特典がある。今年度1000人の登録をめざしている。あなたも登録してみたいかが？

## ドローンブームは丹波にも

社会的にドローンがブームである。ドローンを使って配送する計画も実現間近だし、自動車教習所ではドローンの操縦を教え、ライセンスを発行するところも出てきている。

そんなドローンだが、丹波市でもドローンを使った新しい

ビジネスが誕生している。水上町市辺の酒井農機商会では、スマートフォンとドローンを使って農業の空中散布事業を始めた。無人ラジコンヘリコプターを使ったものより機体が安価なため費用が安く抑えられる。今度丹波に帰省したときにはあちこちでドローンが飛び交う散布姿が見られるかもしれない！

## 映画「恐竜の詩」公開

もうご覧になりましたか？「恐竜の詩」。静かな山間の村が、恐竜の化石が発見されたことで世界的に有名になってしまふ。これを機に村おこしを！と村は大いに盛り上がる。しかし、そのためにやってきたのは風采の上がらない中年男…。

丹波市を舞台にしたこの映画は6月に東京・渋谷でも上映された。ふんだんに丹波の景色が映し出され、思わず「久しぶりに帰ってみようかな？」という

気にさせてしまふ。

## 丹波でも古民家ホテル

丹波市は柏原町藩陣屋跡にある江戸時代の武家屋敷や古民家を購入した。一棟貸し宿泊施設として2020年のオープンを目指す。

古民家ビジネスは丹波の隣の篠山では既に進み、城下町ホテル「NIPPONIA」は全国的にも有名である。柏原も城下町。篠山で可能なら丹波でも古民家ビジネスが可能はず。

## くすぶり続ける「丹波」の名称問題

JAや商工会などが、篠山市を「丹波篠山市」に変更するよう市長らに求めている動きは未だに収まりそうもない。住民投票を行い、市長に嘆願書も提出した。この問題は簡単に解決しないだろうが、このような問題があることは知っておいた方がいい。

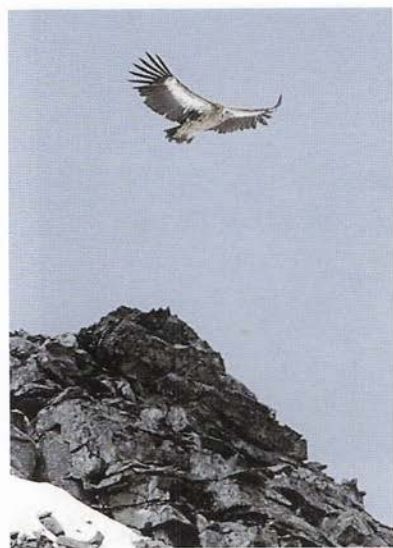


# My Gallery

鈴木 智丈 (すずきちじょう) さん (山南町出身)



オグロツル 撮影地 中国四川省 標高3500m 平成29年6月11日  
オグロツルは世界的に貴重な種で最も高所(チベット高原)で繁殖するツルとされています、間近で撮影できたことはラッキーでした。



ヒマラヤ  
ハゲワシ 飛翔

撮影地  
梦笔山  
MT.MENGBI  
標高4114m

マミジロマシコ  
緋色の鳥が囀っていた  
撮影地  
高山(黄龍)





# My Gallery

北村 貞子さん（柏原町出身）

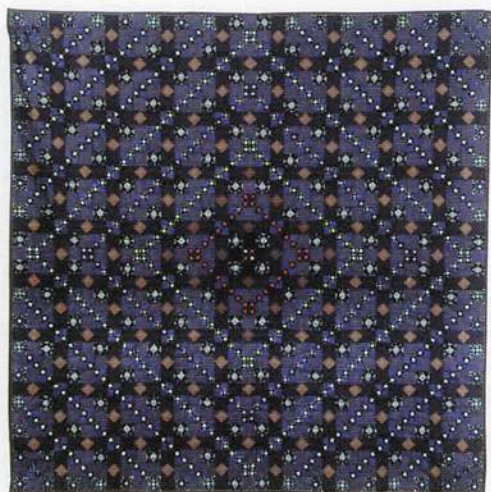


ベッドカバー 面影 225cm×170cm



ベッドカバー 中心部の拡大

キルトを始めて10年余り、60年もの長い間箆笥の中に眠っていた私の着物がログキャビンという手法でベッドカバーに蘇る喜びを感じながら作りました。



紺の紺 紺 180cm×180cm



紅（くれない） 120cm×120cm



# My Gallery

酒井 典子さん（氷上町出身）



小花のコンチェルト

酒井登巳子先生の下、モンシェリーフラワー、布の花、花まゆと花造りを35年続けています。



テッセン

八重桜



# My Gallery

原谷 洋美さん (山南町出身)



雛どのに物語りつつ

白磁器に好きな柄をトレースし、色を塗っては焼き塗っては焼きを繰り返すポーセリンペインティングは、昔々に親しんだ「ぬりえ」にどこか似ています。



あぜ道で摘みましたの

# 簡単レシピ 女のレシピ

上田道代



大根とちりめんじゃこの  
サラダ

材料：

大根

ちりめんじゃこ

いりごま

柚子絞りまたはカボス

サラダ油少々



## 作り方

大根は皮をむき銀杏切りに  
フライパンにサラダオイルを  
少々、ちりめんじゃこを入れて  
カリッとなるぐらいに炒る



熱々のちりめんじゃこを大根の  
上のにせ、炒りごまも入れる。  
柚子絞りまたは、カボスをかけ  
て混ぜていただく。

なければマヨネーズでもいけます。

(じゃこの塩気と炒りごまの香ばしさと、  
柚子、またはカボスの爽やかな  
香りで、食が進みます。

酒の肴にもなります。



# 簡単レシピ 男のレシピ

安井孝之

## 「夢民」のカレーライス

「夢民（むーみん）」は東京・西早稲田にあった伝説のカレー店である。カウンターだけの4・5坪の小さな店に大学教授や学生、地元の人たちがやってきました。

高村俊男さん、知江子さん夫婦が考案したスープカレー状のルーに野菜たっぷり具が放り込まれた独特のカレーだった。人気の「ベーコンエッグ野菜カレー」は早大理工学部の学生の発案だった。

夢民のカレーにはホウレンソウやトマトなど緑黄色野菜がふんだんに入っていた。若い人に不足しがちな野菜を食べて欲しいという高村夫妻の願いからだった。

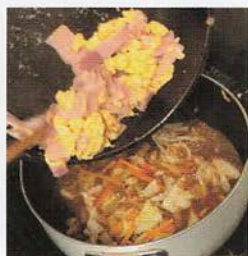
1975年から2012年まで西早稲田で営業したが、閉店。だが「夢民カレーを食べたい」というフジテレ

ビ社員らの働きかけで15年、東京・お台場で復活。その独特のルーが通信販売され、自宅でも食べられるようになった。店主の俊男さんが汗をかきながらつくってくれた味には及ばないが、40年前の記憶がよみがえる。



## 「ベーコンエッグ野菜カレー」の作り方

100グラムほどのキャベツとピーマン、人参は少々をサッと炒め、温めたルーに入れる。40～50グラムのベーコンと卵を炒め、ベーコン入りのスクランブルエッグにし、さらにルーに加えて、出来上がり。野菜は炒め過ぎないように。



# 丹波を撮る

写真と文：徳田八郎衛

## 変わる丹波変わらぬ丹波(1) 春日町黒井の明暗



←この春、春日町黒井中心部の商業施設「アルティ」の中核スーパー「サンウエキ」が破産し、多くのテナントがやむを得ず移転、あるいは廃業しました。1992年の開業時には丹波市内最大の量販店として他町村からも客を集めました。最近の安売り競争に対抗できなかった模様です。

### 告示書

サンウエキ株式会社は、平成30年7月頃、神戸地裁所柏原支部に対して破産手続開始の申立てを行いました。

この建物及び建物内の一切の動産類は申立代理人土が占有管理しており、その許可なく建物内に立ち入り、又は建物内の動産を搬出すること等の行為は禁じています。許可なく無断で建物内に立ち入り、又は動産を搬出等する者は、刑法により処罰されることがあります。

なお、破産手続開始後は、裁判所が選任した破産管財人が、この建物及び建物内の一切の動産類を占有管理することになります。この場合も、その破産管財人の許可なく立ち入り、又は動産を搬出等する者は、刑法により罰されることがあります。

平成30年4月24日

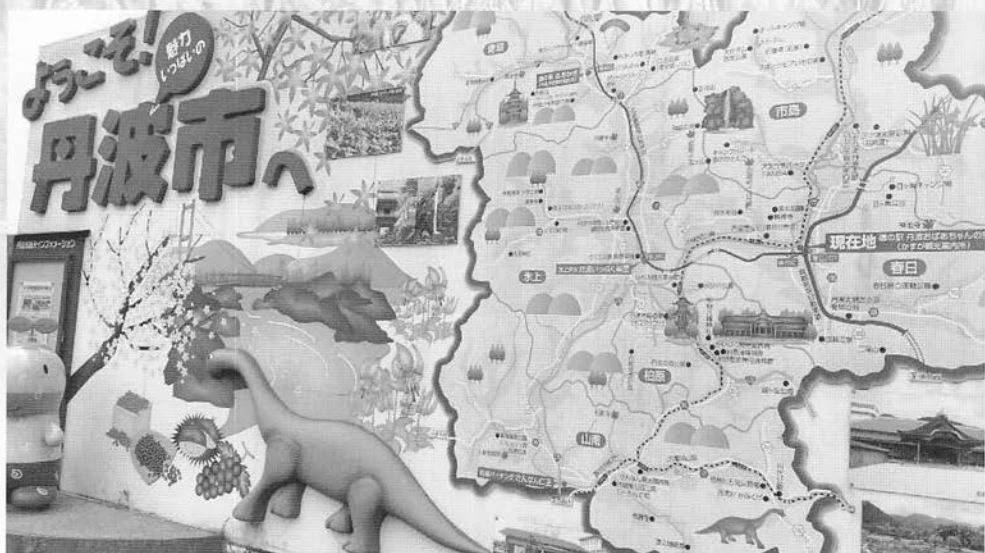
↓国道沿いのスーパーは、どれも健在ですが、車に乗れない町内の高齢者には行きづらい高台にあります。



←しかし街の東外れにある「道の駅」は意気軒高。休日に行くと駐車場へ入れません。閑東ナンバーの車も見られます。



## 変わる丹波変わらぬ丹波(2) 丹波市の明暗



↑この道の駅「丹波おばあちゃんの里」で感心するのは、丹波市の代表であるという意気込みです。他の道の駅や観光案内所では、その周辺の案内しか表示しないのに、ここは「ようこそ！丹波市へ」と迎えてくれるのです。



←観光案内所の方は、午後4時半に行くと、もう閉店だし、運営される曜日・時間帯も表示されていません。せっかくの丹波探訪者も困っています。

# 丹波を撮る

## 関東で出会った丹波(1)

2018年春の選抜高校バレーボール大会へ2年連続出場の氷上高校女子。惜しくも2回戦で大分県代表、東九州龍谷に25-22、25-23で惜敗した。34回目の出場だった。忘れられないのは1991年春である。準決勝で前回優勝の八王子実践を15-13、15-7、15-6で撃破し、優勝戦では大阪女子短大付属を15-0、15-12、15-7で圧倒した。しかも予選も含め全10試合を失セットなしの完全優勝、そして初優勝であった。あの偉業を忘れた人は思い出し、そして伝えて下さい。いつまでも



写真：氷上高校提供

## 関東で出会った丹波(2)



← 渋谷の文化村通りを歩いていると、ヤヤ、丹波市が舞台となる「恐竜の詩」上映の案内に出会いました。



← 「これを見捨てておかりょうか」と、あまり奇麗ではない階段を駆け上がると、ちょうど開演前でした。



← 近藤拓史監督（右から二人目）と主要出演者が「挨拶しよってやとこ」でした。挨拶にも劇中の会話にも「丹波弁」、いや「関西弁」さえ登場しなかったのが惜しまれます。



# 丹波を撮る

## 関東で出会った丹波(3)



←丹波に出会いに、いや、丹波を踏みこみ香取市佐原を訪れました。↓



←スポーツ愛好者には6日間我慢してもらい、市民体育館で「伊能忠敬翁没後200周年記念・全国パネル公開展示」が開催中でした。伊能さんの原図から1/36,000で編集した全国地図を踏んで廻れるのです。ワオ！しかし館内はガラガラです。涙！列車にはザック背負ったオジサン、オバサンが多数居たけど、皆さん、水郷や伊能翁旧宅へ…



←若狭や播磨、但馬北部に比べると、伊能さんは驚くほど細かく西丹波を踏破しています。江戸から600キロも離れた土地なのに関東平野並みの細かさです。

		西郷 9		金沢 8	高山 10	長
		杵築 34	松江 36	鳥取 35	宮津 36	岐阜 6
		見島 34	浜田 40	岡山 41	姫路 43	京都及大阪 8
		豊浦 37	山口 43	広島 41	丸亀 5	徳島 35
		小倉 45	中津 2	松山 5	高知 4	和歌山 9
		熊本 5	大分 4	宇和島 4	与津師 44	山田 6
		八代 1	延岡 3			田辺 7
						山本 3
						伊豆諸島 4
						伊豆諸島 4

←その結果、「宮津」「鳥取」などは明治30年に陸地測量部の三角測量による「帝国図」に更新されたのに、「京都及大阪」は大正8年まで、伊豆七島に至っては昭和初期まで「伊能図」が使われました。駅で出会った佐原高校の生徒諸君は、これらの「偉業」を良く理解しています。流石です。

# 丹波を撮る

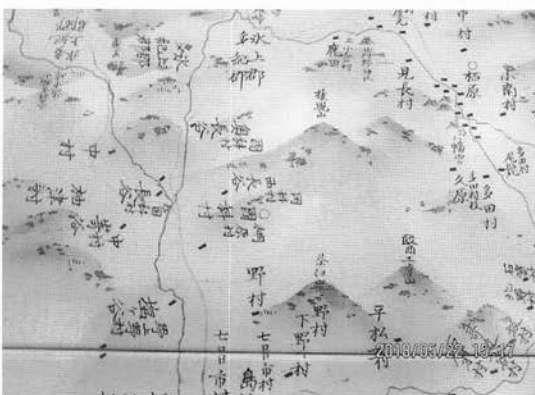
## 関東で出会った丹波(4)



←文化11年新年早々、一行は播磨から小野尻峠、和田村（泊）、草部村、佐野村を経て萱刈坂へ。さらに鴨野村、大新屋村から柏原町（泊）へ到着。西脇街道の要所、井原村や野坂村は通らないので記載されず地図では真っ白。



←ここは柏原北部です。石負町から横田村、伊佐口村（泊）、棧敷村、佐治町（泊）、遠坂村（泊）を経て遠坂峠から但馬へ。伊佐口以降は昼食地と宿泊地が同一に。お疲れなのが、天候が良いので夜間に天測するための準備が判りませんが、とにかくご苦労様。



←1月末に一行は福知山から中竹田村（泊）、大多利村、国領村（泊）、小多利村（泊）、黒井村、柏原町（泊）、鐘が坂峠、追入村（泊）を経て篠山へ。弟子たちの別動隊は国領から佐中峠や追入（瓶割）峠まで、追入から追入峠まで測量しています。この図は黒井東部ですが、城山の傍をかすめる国道175号が造られるまでは、国領村が街道の分岐点だったことが判ります。



撮影：徳田八郎衛 犬岡橋から下流を見る

## 丹波から、 焼きたてパンを日本中に

塚 本 久 美 (丹波市)



・はじめまして

ヒヨリブロートという、それはそれは小さなパン屋を氷上町にて営んでいます。2016年3月に生まれ育った関東を離れ、丹波に引っ越してきました。そして、同年の10月にパン屋をオープンし、現在2年目を爆走中の36歳です。

ヒヨリブロートは丹波を拠点としていますが、店舗はありません。あるのは厨房のみ。そこから通販で全国へパンをお届けしています。しかも、パンを焼くのはお月様に従って。新月から満月を超えて月齢20までは丹波でパンを焼き、残りの月が小さくなっていく期間は旅に出ています。大変なことも山ほどありますが、なんだかか自由で楽しい人生です。

そもそも、なんで丹波がホームに定まったのか。今考えても、不思議な引力が働いたとしか言いようがありません。始まりは東京でパンの修業をしていたお店に丹波のカフェ (cafe maro) の店主、北さんが来てくれて、そのうちに丹波に遊びに行くようになり、気が付いたらスタツフの恵さんと一緒にパンを焼いていて、友達だらけになっていて、現在の厨房の大家さんである山下さんが「お前のパン美味しいからうちの裏でパン屋やったらどうだ」と言ってくれ、仕舞には新卒時に就職した会社の同期の横田さんが「そしたらうちのシェアハウスに住んだらいい」と。

なお、この頃の私は焼菓子を学ぼうと憧れのフランス菓子屋さんに転職したものの、挫折。島根の友人であるパン屋 (ベッカライコンディトライヒダカ) の日高さんが、オープンしたてで大忙しだから手伝いに来てよ！ と声をかけてくれて、急遽島根へ。頭の中では、こうなったら自分でやってしまおうかと、東京での開業を考え物件探しをしたり、お店のコンセプトを考えたりしていた矢先。ヘルプを終え、年末の帰り道に立ち寄った丹波でのことでした。

瓢箪から駒とはこのことで、東京でやろうと思っていた私はびつくり。でも、いや待てよ。考えてみればもともと、通販だけのお店にするつもりでしたし、島根のパン屋で感じた大自然の中でパンを作る心の幸せも、近所の方との触れ合いも、新鮮で最高の食材がそろう環境も、夜に星や月を眺める静寂も、ここならば叶うのではないかと年を超えて帰るときにはすべてがすくとんと落ち着いたようで、「次は引越してきます」と家路についたのでした。

#### ・果たして丹波は田舎なのか

最近では「塚本さん、どこの中学校だっけ？」と言われるまでに丹波になじんでいる私ですが、いまだに自分でも答えの出ていない問題が一つ。果たして丹波は本当に田舎なのかということ。丹波の直前が島根県の石見銀山、人口4000人の町にいたせいか、電車も高速道路も通っていて、衣料品も日常雑貨も大型店が立ち並び、大阪も神戸も1時間ちよつとで通勤もできてしまう。もちろん携帯の電波も良好。あれま、何一つ困ることがない。東京駅の目の前の高層ビルで働

いていたことから考えれば、それはそれは田舎なのですが、むしろ同世代の仲間のコミュニティもすっかりしていて、自分の足で立っている人が多いので、日々学びや刺激がいっぱい。

絞り出して考えてみた残念なことは、映画館がないくらいのことでしょうか。

ヒヨリブローもなんとか2年目を迎えている中、実際に丹波で開業してみても、感じていることをまとめたいと思います。

① 情報の距離は、もはやほぼ存在しない。

通販とイベント出店のみで営業をしていると、東京と丹波のどちらで厨房を構えるかということは、結果的にはほぼ差がなかったように思います。今や、ホームページやSNS、メール等を通じて、全国（あるいは全世界）の人々へ情報発信をすることができますし、お客様からの口コミ情報もネット上で拡散されていきます。

② 冷凍技術、輸送網の発達による「焼きたて」の概念の変化

パン屋さんで買い物をする楽しみの一つに、焼きた

てパンを持ち帰れるということがあると思うのですが、当店では急速冷凍機という特殊な冷凍庫を導入しています。これを使うと、焼きたてホカホカのパンが数時間のうちに完全に冷凍できてしまうため、焼きたての香りや水分を逃しません。つまり、ご自宅で解凍していただくと、その時に焼いた直後のおいしさが戻ってくるのです。となるとヤマト運輸さんがいてくれる限り、アツアツでこそありませんが、日本中でヒヨリブローのパンは焼き立てが食べていただけるのです。

③ 近所付き合いの楽しみ

東京で暮らしていた頃、結局最後までお隣さんを知らずに引っ越しをするということは割と普通のことでした。今はといいますと、なんだかみんな親戚かなと思うほどのお付き合いをさせてもらっています。ヒヨリブローの仕事が立て込んでいるときなどには、食事を届けてくれたり、ヘルプを申し出てくれたり。近所づきあいというと、煩わしいイメージがあったのですが、丹波については嬉しくありがたいことばかりです。今後は村の仕事なども少しづつ関

わらせてもらって、ますます丹波の一員になっていければと思っています。コミュニティがあるというのは改めて素晴らしいことです。



### ・丹波の魅力を再考する。

実は私、もう少し若いころはドイツに住みたいと思っていました。今もその思いはいくらかあるのですが、以前のように日本なんて飛び出してという気持ちではなく、ちょっと暑いのが苦手な私ですから、夏場は涼しいドイツでパンを焼き、冬は日本でパンを焼くなんていう生活を夢見ていたりします。

というのも、父親の仕事の関係で神戸と島根出身の両親は、一時的な気持ちで千葉県に引っ越し、そのま

ま今に至っています。そのため、我が家はなんとなくそのうち関西に戻ろうという気持ちでいたため、私自身にも育った千葉県にさほど地元感がありません。

そうして育つと、一つ所で腰を据えて生活したいという気持ちがありません、どこでも地元のように馴染んでしまう。こうして、一月のうち10日ほどは旅してパンの食材や生産者さんに会いに行くような生活が始まりました。旅した先には、それぞれに親戚のように迎えてくれ、一緒に食事をし、夜遅くまで語りつくす、そんな仲間が増え、そこそこに故郷があるような感覚になっていきます。

これがとてもいいのです。一つ所に長くいると、日常になじみすぎて、身近な魅力を忘れてしまいがちです。ドイツに何度も行くようになってから、日本をもっと好きになったように、いろんな場所に行くことで、不思議と丹波の魅力が浮き出てくる。丹波に引越して2年と少しですが、今ではあのポコポコと連なる山々を見ると、ああ丹波に帰ってきたとしみじみ感じます。

山々に囲まれた、それでいて十分に空が広い丹波の

盆地。昼はしっかり暑くて、夜はけっこう冷える。ちよつとカビが心配なぐらいの湿気と柔らかい水のおかげで保湿いらすだし、外から来た人間を「よく来たな」と迎え入れる丹波の人々の懐の深さ。

これは若者に向けての提案なのですが、旅に出よう。そして、外から地元を見てみようということです。かわいい子には旅をさせよ、なんて聞き古した言葉かもしれませんが、旅をすると旅先のすばらしさ、そして地元の良さを知ることができる。結果として丹波を出ることもあるでしょうが、外からでも地元を応援したり、つながっていることは、思った以上に簡単で、意識さえあれば、ふらりと住み着いてしまった私のように、いつだって戻ってくることもできるのです。

やりたいと思っていることの多くは、実は丹波がびつたりかもしれませんかよ。

(1982年 大阪生まれ、千葉育ち)

HIYORI BROT (ヒヨリブロード) <http://hiyoribrot.com/>

(通販は現在、多くのご注文を頂戴し、新規のご依頼は受けできていません。イベント出店等の情報はインスタグラムやブログ等でご案内しています。)



撮影・岡田昌子

# 丹波ブランド紹介

## その9 ブルーベリー

### 夏の新しい特産に

古西 純

(丹波新聞社)

お菓子で目にすることも増えた丹波市の新しい特産「ブルーベリー」。2000年ごろから市内で栽培が始



ジャムの製造を行っている研究会の加工所。両端が山本さん夫妻、中央が研究会3代目会長の野花敏郎さん（氷上町新郷で）

まり、今では兵庫県内で最大規模の産地になった。ブルーベリー商品の製造販売を手がける「株式会社生活」（本社京都市、角谷建耀知社長）の後押しもあり、幅広い層にアピール

力をもつ特産物に育ってきている。

### 旬の夏にフェア

ブルーベリーの収穫シーズンは、夏。6月末から8月中旬まで、農家は摘み取りと出荷作業で忙しい日々を送る。

旬の時期をねらい、今年も7月末から8月中旬まで「わかさブルーベリー祭り」が開かれた。生産者グループ「丹波ブルーベリー研究会」とわかさ生活とのタイアップにより、市内の飲食店舗20店で地元産ブルーベリーを使ったスイーツなどが提供され、市内6農園で摘み取り体験が行われた。参加店舗は年々増え、これを機に魅力的な新商品も登場している。

### 魅力的な新菓子

ブルーベリーを使ったお菓子の開発は、近年活気づいている。



「藤屋」の「とけないアイス・くずもちアイスパー」





「いっぶく茶屋」の「丹波産まるとブルーベリーソフト」

「御菓子司藤屋」（丹波市山南町井原）は、今夏、「とけないアイス・くずもちバー」を開発。ブルーベリー、イチゴ、大納言小豆の市産品を、果実、粒のままベイスのミルクくずもちに閉じ込めて凍らせ、棒アイス状にした。溶けても垂れないのが特長。時間を追って、アイス、シャーベット、くずもちゼリーと、異なる種類の食感が味わえる。

春日和田山道氷上パーキングエリア（氷上PA）の食堂兼喫茶店「丹波いっぶく茶屋」（氷上町本郷）は「丹波産まるとブルーベリーソフト」を新発売。ブルーベリー20粒ほどを冷凍のままミルクソフトに乗せ、自家製のブルーベリーソースをかけている。

ブルーベリーの新商品には目で見てても楽しいものが多く、若い人たちにも注目されそうだ。

### わかさ社と連携

丹波市内のブルーベリー栽培の“歴史”をたどってみると、先駆的



共同出荷場に持ち込まれたブルーベリー果実を受け付ける山本さん夫妻（氷上町新郷で）

に取り組んだ一人が、氷上町新郷にある「ノビリス農園」の山本一さん（75）だ。「退職後はブルーベリー園を造りたい」と、定年前の2000年に苗木140本を植えた。

個人で始めた栽培は、2003年、薬草薬樹公園を通じて「わかさ生活」の角谷社長が山本さんの下を訪れたことがきっかけで、市全域の取り組みとして盛り上がっていくことになる。

春日町出身の角谷社長は「ふるさとが元気になるよう応援したい」との熱い思いを山本さんに伝えた。これを受けて有志8人が発起人となり、2006年、「丹波ブルーベリー研究会」が発足した。

同研究会と同社とのつながりは深まり、サンタクロースの本場・フィンランドからサンタクロースを招き、保育園の子どもたちと交流していた時期もある。また

市内の保育園にブルーベリー鉢をプレゼントしたり、同社がスポンサーとなつて市内の園児らを摘み取り体験に招待する活動を行つており、丹波の子どもたちは小さい頃からブルーベリーの木に親しむ機会を得られている。

### 栽培の裾野広がる

同研究会は、会員数60人でスタートし、ピーク時の2010年ごろには120人にまで増えた。健康志向ブームと相まって、丹波市にもブルーベリー栽培に関心を持つ人が多くいた。現在の会員数は元の約60人に



山本さん方の「ノビリス農園」でブルーベリーを収穫するスタッフ

戻っているが、自宅の庭先で数株程度を栽培している人も増え、ブルーベリー栽培のすそ野が大きく広がった。この20年弱でブルーベリーは市民に身近な存在になつてきた。行政主導ではなく、同研究会の活動がブルーベリ

ーをここまで特産に育ててきたといえるだろう。また同研究会は、農薬と化学肥料を使わない栽培を基本としており、「ひょうご安心ブランド」の認証も取得している。

### 阪神間の菓子店へ

同研究会は、2010年には共同出荷をスタートした。現在、山本さん宅の敷地内に集荷所と加工所があり、フレッシュ果実の集荷と発送、冷凍果実の貯蔵と発送、小粒果実のジャム加工を行っている。

丹波市産のブルーベリーは、菓子材料として市内のほか、神戸市内や宝塚市内の店舗へ販売されているほか、加工業者へも流通している。



丹波ブルーベリー研究会の手作りジャム

2017年度は、加工用で2ト、生果実500キを販売した。3年前には、販売に力を入れすぎて商品が足りなくなった経験があり、



集荷されたブルーベリー

現在は「生産量に見合う販売を心掛けている」（山本さん）という。

このほか、丹波市の「ふるさと納税」の返礼品のひとつとして全国へ発送もされている。

### さらなる特産化へ

研究会を中心とした努力により、特産品として徐々に認知されてきたブルーベリーだが、山本さんは「まだ特産といえるまでにはなっていない」と話す。「市内農産物では、栗、小豆、黒豆がトップ3。4番目を山の芋とブルーベリーで競っている状況だと思う」と

みている。

さらなる特産化のためには、地元の人に消費してもらうこと、栽培技術の基礎を固めること、核となる大型農園をつくる必要がある。と山本さんは考えている。栽培技術を高めるために詳しい手引書を作成中で、来



青紫に色付いたブルーベリー

### 新規栽培者も募集

定年後に栽培を始める果樹として、山本さんがブルーベリーを選んだのは、低木で高齢になっても世話が続けやすいと考えたからだ。今年75歳になった山本さんだが、まだまだリーダーとして丹波のブルーベリー栽培を引っぱる気概だ。「丹波市の特産の一つとして市民のみなさんにしっかりと認識してもらえるようにがんばりたい。新たな栽培者も募っています」と話している。

丹波ブルーベリー研究会・山本さん（0795・82・0959）。

年発行される予定だ。また、多くの農園で定植から10年以上が経ち、木の老化による生産量減少がみられ、昨年からは、丹波農業改良普及センターの指導で木を若返らせるための剪定講習も行っている。

## 国指定重要文化財の高座神社本殿

—「平成の大修理」でよみがえる

荻野 祐一

(丹波新聞社社長)

首から上に関する願い事がかなうとされ、合格祈願などで訪れる人が多い「首切り地蔵尊」に至る手前に、丹波地方では最大級の規模と言われる近世神社本殿を有する神社がある。山南町谷川の高座神社たかくらである。ご存知の方も多いだろうが、今年5月、めでたくも同神社本殿が国指定重要文化財となった。丹波市内では、柏原八幡神社本殿・拝殿、山南町の旧友井家住宅に次いで3件目で、丹波市の誇りがまた一つ増えた。

高座神社本殿が国指定となったのは、平成24年度から4年間をかけて行われた大規模な修理事業によるところが大きく、田中史夫宮司は「事業を行っていなかっただら指定は難しかったでしょう。氏子のみさんの気持ち伝わったのだと思います」と喜んでおられる。

国指定を決定つけた修理事業はどのようなものだったのか。そもそも高座神社はどのような神社なのか。「山ざる」編集部の依頼により高座神社について書かせていただく。

高座神社は、丹波国を治めていた国造くにのみやつこが創始したと伝えられ、その祖神である高倉下命たかくらしのみことや、その祖神みことをまつている。『高座神社略記』によると、高倉下命について「早くより紀伊国熊野に天降られ、その地方を統治される



高座神社本殿正面



本殿向拝に施された彫り物「高砂」

とともに、人々を悩ます厄難を祓除し、幸運をもたらさし給うた神であらせられます」と記されている。国造が、そんな高倉下命を丹波開発の守護神として創始したのが高座神社の起源のようだ。

延長5年(927)の延喜式の神名帳に記載された式内社である高座神社だが、創建年代についてはくわしく分からない。ただ一説によると、元慶3年(879)、北西に3・5キロほど離れた金屋地区に社を建てたのが始まりとされ、弘治3年(1557)

に現在地に移したとされる。中世には、当地で勢力を誇った地頭久下氏の祈願所となり、近世には「高座大明神」として柏原藩織田家に庇護され、社領の寄進を受けている。

現在の本殿は、

江戸時代に再建されたものだ。神社に保存されている棟札には、宝永2年(1705)11月に上棟し、翌年2月に遷宮祭が執り行われたことが記されている。棟札にはまた、棟梁として地元谷川の清水武右衛門眞宣、大工として同じく谷川の清水七良左衛門らの名前が記載されている。山南町には、高座神社をはじめ、17世紀末から19世紀中頃までに建てられた神社本殿が多数現存しており、そのほとんどが地元工匠たちによって建築され、修理が施されてきた。清水武右衛門や清水七良左衛門も谷川村に住むそのような大工だった。

本殿が再建されて以来、これまで幾度も修理が行われてきた。ひとつは屋根の葺き替えで、享保9年(1724)、元文2年(1737)、天明3年(1783)、明治4年(1871)、大正8年(1919)、昭和49年(1974)に檜皮の葺き替えが行われたことが記録や調査からわかっている。明治45年(1912)には神棚の改造が行われ、大正8年には箱棟や鬼板の修理が行われた。しかし、この二つの修理を除くと、大きな改変はなく、このたびの

修理事業に伴う調査によって、大部分の当初材が残されていることが確認された。再建当時の姿をよくとどめているという  
ことであり、その意味でも貴重な文化財と言える。



本殿正側面（南東より見る）

昭和51年には県の重要文化財に指定されるなど、18世紀初頭の神社建築として他に例のない貴重な遺構と評価された高座神社本殿だが、歳月の流れとともに建物の傷みは進んだ。化粧材のうち、特に松材の虫害は著しく、彩色の剥落なども目立った。屋根



多彩な彫り物

の檜皮葺きも耐用年限に達し、竹釘が露出するありさまとなった。

このため、保存修理の必要性が論じられるようになり、平成20年、臨時総代会で「貴重な文化遺産を後世に引き継ぐのは

我々の使命。非常に厳しい状況ではあるが、高座神社総代会として工事資金を確保するため努力しつつ、本殿改修に向けて事業を進める」との結論に達した。工事に向けた準備を整え、平成24年度に着手した。

修理は、半解体修理で行われた。腐つて傷んだ木材は取り替えるなどの対応をとり、使える木材は支障がない限り用いた。取り替える場合も、原則として旧材と同じ材種のものとし、旧工法を踏襲した。屋根はすべて解体し、葺き替えた。彫刻などの彩色

については、外部のものは剥落が著しく、当初、ほとんど判別がつかないように見えたが、注意して観察すると、肉眼でも7割ぐらいは色や模様判別ができ、残る3割もさまざまな調査方法から推定できると思われ、復元する方針をとった。もちろん基礎部分の修理も行った。

平成24年12月に着工した大規模な修理は平成27年9月まで続いた。総事業費は約2億円。県や市の補助を受け、氏子や企業などから奉賛金を集めた。

次に高座神社本殿の造りについてふれるが、これに関しては丹波市教育委員会からいただいた資料を引用し、記述の責をまぬがれることとする。

「本殿は五間社流造、檜皮葺きで、正面中央に入母屋造、軒唐破風付の向拝を付し、大屋根に左右二個所の千鳥破風を飾る。身舎は桁行正面五間、背面六間、梁間二間で、正側面に擬宝珠高欄付の縁をめぐらせ、縁の後端に脇障子をたてる。内部は棟通りの柱筋で内外陣に分け、外陣正面は格子引違とし、内外陣境は板唐戸を開く。内陣は、奥寄りに桁行全

長の棚を造り、五区画の神棚を設ける」

彫刻も多彩だ。高砂、力士、天人、雲、龍、牡丹、さまざまな鳥、実のなる植物など、極彩色を施した多彩な彫刻類が目を引く。丹波では今、彫り物師の中井権次の顕彰が盛んだが、高座神社の彫刻は中井一統の作ではない。

高座神社本殿は、冒頭でふれたように丹波地方では最大級の規模を誇る近世神社本殿であり、複雑で巧緻な組物や華やかな屋根形式などに豊かな創意と高い技量が見とれ、丹波地方の社寺建築の特長が認められるという。そんな貴重な高座神社本殿が氏子らの地域の熱意に支えられて、平成の大修理によってよみがえり、国指定重要文化財となった。次代への贈り物になったことは言うまでもない。



撮影・岡 吉明



女子高等教育の先駆者

井上 秀

その3

徳田八郎衛（柏原町）

1 アジアでも珍しかった日本の女子教育

井上秀についての拙稿へ多くのお尋ねを頂いた。その大半は「女子教育の先駆者成瀬仁蔵や井上秀が皇室の後援さえ受けて40年頑張ったのに、なぜ日本女子大学校は大学になれなかったのか」というものである。昇格を阻む文部省回答の透明性が低いのが残念だが、その前哨戦、「女子高等教育無用論との闘い」については多くの記録が語ってくれる。

秀はさほど評価しなかったが、女子教育への熱意では日本はアジアでも異質だった。浦安市でホームステイしたアフガニスタン高校生たちが、これについてよく調べていたのに感心したが、「タリバンが復権したら私たちは生意気だと殺されます」と女生徒は呟いた。決死の覚悟で日本へ来たのだ。日本は、1872（明

治5）年の学制發布から3年間でほぼ全国に小学校を設け、私の祖母も満6歳で成松小学校尋常科へ入学し「44年ケーザル刺さる」を学ぶ。それを生徒たちに語ると「最初から女子も？さすが日本。それにうちの小学生なんかシーザーを知りませんよ」。

死刑になる怖れもなく津田梅子たちが岩倉使節団に同行できた日本だけに女子初等・中等教育は順調に始められたが難しいのは高等教育だ。「中等教育の教師には高等教育が必要」「女子にも高等専門教育を」という理屈で女子高等師範に続き女子英語塾（津田塾）、女子美術学校（後の女子美術）、日本女子大学校、東



禁止された女子教育の頃にはアフガニスタンの高校生がタリバン専制の頃にはアフガニスタンの高校生がタリバン専制の頃にはアフガニスタンの高校生が

京女医学校（後の東京女子医専）が1900年から翌年にかけて次々と開校するが、「女子に高等教育は不要」「未婚女性が増え亡国の始まり」というのが「輿



論」であった。

## 2 反対輿論に真向から反論

開校5年前1896（明治29）年夏に成瀬が書いた「日本女子大学校設立乃趣旨」は、輿論に真向から反論する。まず「我らは第一に女子を人として第二に婦人として第三に国民として教育する方針だ。世間の女子教育ときたら、すぐ役立つ知識芸能を授け、人としての教育を行わない。これあってこそ心身の能力を開発し円満完備の人となる。どんな境遇、職業にあつても対応できる」と一般（教養）教育の必要性を説く。

続いて「心身の構造と社会の組織上から女子には女子の尽すべき天職があり、その主なものが賢母良妻（原文のまま）を務めることだが、これは容易なことではないから高尚の女徳、鋭敏の智力、強健の身体、相応の芸能を備えさせる」と記す。この芸能とは文化的素養である。賢母良妻と聞くだけで否定する人も多いが、「育児にはこれほどの徳や智や健康や素養が必要で、世にいう花嫁教育ではだめ」という厳しいものだ。

さらに「女子も国家の一員だ。明確な国家的意識を

育て、英米仏独の女子ではなく日本婦人としての特性を備えさせる」と記す。今なら「国際人を育成する」となるのだろうが、「坂の上の雲」の時代としては当然の教育目標で批判するのも難しい。

反論は続く。「本邦の中等女子教育はようやく進展してきたが、高等教育は女子高等師範のみだ。これ以上増やすのが無用か？ 有害か？ 男子が高等教育に進むのに、その伴侶たる女子が琴やお茶を知るだけで家庭教育の法に暗く、夫の事業や国家の発展や社会の改良に協力できないのでは国家の損失だ。初等女子教育が定着してから、という声もあるが、上下両端より着手してこそ進展する。北米合衆国（原文のまま）では、上の教育が大きな影響を下の教育に与えているのだ」。なお当時も今も「女子高等教育」が普遍的であるが、この設立乃趣旨だけは語順が逆になっている。

## 3 反対は教育関係者から

この設立乃趣旨を知って続々と批判が殺到する。そこで成瀬は翌97年3月、貴族院議長近衛篤磨公爵、陸軍大将大山巖公爵夫人（捨松）、文相蜂須賀茂韶侯爵

夫人（よりこ）、前外相兼文相西園寺公望侯爵、外相大熊重信伯爵、海軍大将樺山資紀伯爵夫人（とも）、日銀総裁岩崎弥之助男爵、実業家澁澤栄一男爵、大倉喜八郎、廣岡浅子などの政財界指導者を發起人として第1回發起人会を開き、近衛公を設立委員長に選出した。翌日、帝国ホテルで第1回創立披露会と称する演説会を催して攻勢に出る。近衛公は「女子教育と男子教育の関係」を論じて賢母の感化力を称え、大熊伯は話題の金本位制になぞらえて「男女両本位制」を説く。中核となる演説は成瀬の「高等女子教育の必要性を論じ、併せて反対説に答う」であるが、9つの反対説（論）を挙げてゐる。

①女子に大学が必要か？ ②教育の順序を間違つていないか？ ③女子大学は初等教育の妨げにならないか？ ④女子大学尚早論。⑤高等教育は女子を生意気にする恐れあり。⑥日本主義か？ 欧米主義か？ ⑦学校教育は人情を疎く処世術を下手にする。⑧家庭の寄宿舎制度を設けるにせよ適切な舎監がいるか？ ⑨教育は女子の身体を弱めないか？

ややピント外れの反対もあるが、成瀬は一つずつ真

面目に論破し、最後に文相の蜂須賀侯が登壇して締めくくった。一介の牧師で女子教育者の成瀬が、これほどの応援団を開校前に集めた手腕には驚くほかはない。それを批判する教育者も多かつたが、語学や文学の専門学校と違つて理系教育に基づき総合大学を目指すのだから資金集めが必要だつた。社交界で著名な大山公・樺山伯両夫人をまきこんだのは賢明だつたが、特に捨松は、岩倉使節団に同行して11年間滞米した日本女性最初の大学卒業生で、兄の山川健次郎は帝大総長というインテリ女性のナンバーワンであつた。

実力者、伊藤博文侯爵の名がないが、成瀬が数年前に支援を求めて飛び込んだのは伊藤侯であり、親切な伊藤の紹介で西園寺や近衛、澁澤の知遇を得たのだつた。頑迷固陋な輿論と比較すると当時の政財界指導者の先見性に驚く外はない。

同年5月、外相官邸で開催の第1回創立委員会には時の首相、松方正義伯爵も参加するが輿論の圧迫も高まり、それも教育に無縁の者よりも学者に多かつたと同校40年史は語る。これは文部省と学者の複合体のことだと語つた母は、「単科大学志向の他の女専と違つ

て総合大学を目指す日本女子大は生意気だとみられて目の敵にされた」と嘆いた。1917（大正6）年内閣に設置された臨時教育会議が教育制度改革を議論した際、山川元東京帝大総長は「亡国の女子高等教育」を説く。3年後の「大学令」によつて多くの官立高商や医専が大学に昇格し、「専門学校令」の下で大学と名乗つていた私大も正式に大学として認められるが、女子の学校は見捨てられたままであつた。

#### 4 文部次官も無用論

「生意気な日本女子大」を裏付ける研究会がある。1906（明治39）年7月、同校評議員に早大や慶大の学長、帝大教授などの在京教育家や女子高等師範、府立第一・第二高女、女子英語塾、実践女学校、東京女学館などの錚々たる校長・教頭を加えた女子高等教育研究会「毎月会」が発足した。初回は首相の西園寺侯、牧野文相まで参加して「無用有害論への防衛」を図つたのだ。毎月会と称しながら年毎の開催となつたが、「女子高等教育と人口問題」、「女子の結婚年齢について」、「家族主義と個人主義の調和」などが議論さ

れている。

その検討成果を自校の教育に反映するというのだから10年後に設置される臨時教育会議を先取りしたような生意気な会議だ。男子にも私学の総合大学は無いのに、理科教育を基盤とする家政学部が中核となる女子総合大学計画など生意気以外の何物でもなかつた。ちなみに東京専門学校が早稲田大学と改称された後、理工科を設置するのは08年である。

だが見過ごせない研究会であつた。現代も掃いて捨てるほどあるこの種の研究会は、同意見の者ばかり集まりヨイシヨの決議で終るのであるが、毎月会は反対意見の論客も招いている。第二回目の会合には澤柳政太郎文部次官が参加し、「高等教育とは職業教育のことだ。これを必要とする女子は最も不幸な女子だ。女子の高等教育は疑問である」と断言した後「女子には普通教育（教養教育）こそ授けたい、という議論もあるが、日本女子大の教育は普通教育なのか職業教育なのか」と成瀬校長に迫つた。

教育史に通じた読者には秀以上に馴染みのある澤柳であるが、略歴を記すと1888（明治21）年帝国大

学文科大学哲学科を卒業し文部省に勤め、「修身教科書機密漏洩事件」の責で依願退職した。だが関係者はその才を惜しみ、28歳の若さで93年京都大谷尋常中学校長、続いて群馬県尋常中学校長となる。第二高等学校長、第一高等学校長を経て98年、34歳で文部省普通学務局長（後の初等教育局長）として呼び戻される。素人文相、樺山大将が「教育学者の行政官」を探した為だ。ここで8年も義務教育無償化にまい進しながら、高等教育整備にも尽力する。1906年次官となった翌年に毎月会へ参加したのである。

この辛辣な次官発言を受けた成瀬校長は「我が校の教育は両方を含む。今日の社会は、大学すらも人格修養に重きを置かず職業教育を授けるような風潮で困ったもの。特に女子の大学にはリベラル・エジュケーションが必要だ」と応えたが、生徒の必須科目数を見れば同校の一般教養重視は女高師以上であったことが判る。教員養成のための教育学部家政科本科第二部では女高師と同程度に裁縫関係の科目が多いが、家政学部本科では心理・生理・衛生・家事・応用理科等に加え英語を週5時数も必須科目に含め、料理と裁縫は週4

時数に留めている。さらに豊富な選択科目で応用博物、哲学等を学ばせるのが同校の家政学教育であった。

終戦直後の1946年、大学昇格を求めて各校が文部省と個別交渉を行った際、どの学校も教養教育3年・専門教育3年の案を提出したが、秀が率いる日本女子大だけは教養教育4年・専門教育2年の案を披露し、「戦前から準備した計画」と述べ文部省を驚かせた。「学生の一ズに應えて」教養課程を抹殺した現在の大学関係者には理解できないであろう。さらに秀を憤慨させたのは「勅令の学問体系に家政学など存在せぬから家政学部は認可できない」という指摘であった。「女学校の家庭科の延長」という認識なのである。

## 5 変心した文部次官

この毎月会に出席した後の澤柳の言動は急激に変わった。1911年、理科大学と農科大学（後の北大）から成る東北帝大の初代総長に就任するや理科大学の入学資格を緩和し、高等学校を終えていない専門学校卒や中等教員免許状所有者にも道を開いた。また女子の入学を禁じるという項目はないから受け入れるとい



晩年の澤柳政太郎

う意向を関係者に伝えたので、東京女高師や日本女子大では卒業生に受験を準備させた。第3回生の募集なのに東京帝大や京都帝大ほどの応募がなく空いていたからできたともいえるが英断であった。

1913年9月、合格した女子3名が入学するが、5月に京都帝大へ総長として迎えられた澤柳はもう居なかつた。実際に受験や入学を許可しイチャモンをつける文部省を説得したのは後任の北条時敬であったが、男女共同参画関連の多くのサイトには澤柳が女性の守護神のように登場する。

だが彼は京都帝大では女子を受験させていない。東北と違い欠員がないのである。着任早々取り組んだのは、帝大教授として不適任と彼が判断した7名の教授への勇退勧告であった。これは成功したが、法科大学教授会から「教授の任免は総長の一存でなく必ず教授会の同意を」という意見書を突き付けられ、「京大澤

柳事件」に発展する。

これを円満に収めて総長を辞し成城中学校長に迎えられた澤柳は、精力的に講演・執筆を行い、膨大な「澤柳政太郎全集」を残したが、大正末期執筆の「女子の高等教育機関について」では目を見張るような変心ぶりを示している。即ち「近年、女子中等教育の発達は顕著で1919年度資料では中学校よりも高等女学校の方が校数も卒業生も多い。だが高等教育は未だ不振だ」。高等教育は主に職業教育であるから必ずしも男女平等でなくてもよいが、女子の中等教育がこれほど進み、また職業を持ちたい女子も増えてきた今、国は女子の高等教育を振興すべきだ。「国は多くの帝国大学、単科大学、専門学校を経営するが大半は男子のため、女子には2つの女高師しかない」。

そして最後は桜楓会の出版物と間違えそうな結語となる。「近世の文化は男性だけによるものではなく女性の力が加わっている。我が日本文化の発展のため、家族制度を本位とする我が国の家庭生活や家庭教育改良のため、女子の力に待つ所の多い社会事業発展のため、この問題はなおざりにできないのである」。

毎月会参加の頃と比較すると驚くほどの変心・改心?であるが、不可解なのは京都帝大教授陣、特に法科大学教授会である。澤柳総長退陣で祝杯を挙げ、「大学の自治」獲得を誇るが、帝大の女子学生受入れという発想は何年経っても出なかった。

## 6 各校バラバラの昇格運動

学者も文部省も脱皮しない1918年、成瀬校長が他界する。秀は家政学部長となり、麻生新校長を支え、大学昇格のために奔走する。成瀬の遺志を実現できない責を負って麻生が勇退した後、卒業生の誰もが呆れる「91歳の渋沢校長」が就任半年後に他界した31（昭和6）年、待望の秀が校長となる。

翌年の柏原高女創立30周年記念に柏原劇場で講演して郷党の声援に応えた後、津田英学塾、東京女子大と3校連合会を結成して大学昇格を図る。農学部の新設も視野に入れ、小田急沿線の西生田に用地を取得して戦時中は食料増産にも励んだ。だが1929（昭和4）年、東京と広島の高師が共学を認める文理大学となり、1923年の同志社大を皮切りに多くの私学も共学と

なったので、昇格にブレーキがかかる。やっと1940年に教育審議会が「女子大学の制度化」を答申したが、開戦で棚上げとなった。

各女子校にも各々の事情があった。一般の女専は、日本女子大や津田英学塾のような「中等教員無試験検定取扱許可」を文部省から取得するのに必死で共闘どころではない。終戦直後の秋、女子高等教育機関の頂点に立つ東京女高師が「旧大学令の帝国大学令」に基づいて「東京女子帝国大学」に昇格する案を決定し、それを文部省が認可したことも共闘の難しさを物語る。結果的には財源難を理由に大蔵省が蹴ったが、官学と私学も昇格運動はバラバラだったのだ。

ようやく戦後、多くの女子大学が誕生するが、やがて「女子学生亡国論」が登場し、さらには経営難から共学に走る女子大も増えてきた。「女子大でないときない教育」を目指した先駆者たちは、草葉の陰でどう思うだろうか。

満州奉天市生まれ／浦安市在住／元防衛省勤務／（財）平和・安全保障研究所客員研究員

# 山ざる研究

「乳母」って何？

— 様々な「乳母」の肖像 —

石橋 順子（町田市）

徳川家光の「乳母」であった春日局は江戸城の大奥を築いた実力者として知られている。丹波の黒井城（興禅寺）で生まれ3歳までを過ごしたと言われ、丹波市観光協会「丹波戦国名将伝」などでも紹介されているように丹波の人々にはより馴染みが深い。彼女は戦国の世で紆余曲折を経、家康の長男竹千代の乳母になり竹千代の為に献身的に働き、家康に直訴までして次男の国松を抑え彼を3代将軍にすることに成功した。しかし今の時代「乳母」という仕事はもとより、言葉の存在さえも影が薄い。「ベビーカー」の代わりに「乳母車」と言う若い母親がどれだけいるだろうか。「乳母日傘（おんばひがさ）で育つ」や「船頭、馬方、

御乳の人」という表現はどうだろう。これらの表現もまたほぼ「死語」である。辞書によれば、前者は「乳母をつけ、外出には日傘をさしかけて、大事に守り育てること。過保護に育てること」、後者は「弱みにつけこんで法外なねだりものをする卑劣な者のたとえ」とある。

「乳母」という仕事は古の昔から日本にあり、その仕事の内容や社会的評価は時代により一様ではない。ある時代では女性にとつての憧れの「仕事」であり、ある時代では子供の教育者としての資質が問われた。しかし明治に入ると急速にその存在が薄れ消滅していった。ここでは各時代の様々な乳母のあり様を取り上げ、またその消滅の原因を探ってみたいと思う。

（以下の文中『』は書物名及び原文引用、「」は私訳）

〈平安時代（794—1185）鎌倉時代（1185—1333）〉

平安末期、藤原氏全盛の頃、中関白家中宮定子の御所に宮仕えをした清少納言は『枕草子』の中で「乳母」やその夫たちの振る舞いについて次のように書い

ている。

『ちこの乳母の、ただあからさまにとて出でぬるを、もとむれば、とかく遊ばしなぐさめて、とく来と言ひやりたるに、今宵は、えまぬるまじとて、返しおこせたる、すさまじうのみにもあらず、にくさわりなし』

「ほんの少しの間といつて外出した乳母が帰つてこず、乳母を求める赤ん坊をあやしていたがなかなか帰つて来ないので、早く帰ってくるようにと使いを出したが、今夜は帰れませんかと返事を寄越してきた、興ざめどころかはなはだ憎らしい」清少納言も赤ん坊には勝てなかつたようで、「乳母」の「超」わがままな仕事放棄にお冠りだ。その夫たちについても『にくきもの、乳母の男こそあれ』とし、養君を盾に宮中で横柄な振る舞いをしていると非難している。位の高い主君のすぐ側で仕える「乳母」やその家族は時として目に余る言動があつたようだ。

『更級日記』の中にも乳母の記述が見られる。作者の父菅原孝標は菅原道真の4代下つた子孫であり、母は

藤原倫寧の娘で母の姉は蜻蛉日記の作者という家柄である。作者が10歳の時父が上総に赴任し、継母や姉、乳母たちと共に同行した。13才（1020）で帰京するが、作者がとても愛着を覚えていた乳母が伝染病で亡くなり悲嘆にくれる。その後も桜の咲く頃になると乳母を思い出し悲しむ作者であつたが、さらに仲の良い姉までもが出産の際に亡くなつてしまった。姉に仕えていた乳母は、「今は何にすがつていられますようか」と泣く泣く実家に帰つて行つた。作者はその乳母に「走り書きの筆跡が氷のように固まり書きたいことも書けません。あなたがいなくなつてしまふと何をもつて姉の形見とすればいいのでしょうか」という歌を送つたところ、乳母から「慰めるお方も亡くなつた今は千瀉のない渚の浜千鳥のように辛い世に跡を残しても仕方がありません」という返事が来た。

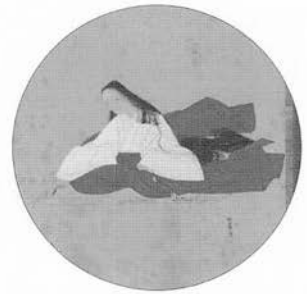
孝標の女 『かき流すあとはつららにとぢてけりな

にを忘れぬかたみとか見む』

乳 母 『なぐさむるかたもなきさの浜千鳥なに

か憂き世にあともとどめむ』





春日野局像 狩野探幽筆

このような記述から

菅原家の乳母は子供たち  
に慕われ、家の家風にも  
適応できる教養を備えて  
いたと思われる。晩年の  
作者は自分の人生を振り

返り、「夢占い師が皇子や皇女の乳母になって天皇や  
お後の庇護をこうむるようになる」と占ったけれど何一  
つ叶わなかった」と嘆いている。興味深いのは、夢占  
い師が菅原家のような国司の娘ならば、皇子や皇女の  
乳母になって宮中に仕えても遜色ないと考えたことだ。  
作者はその夢もかなわなかったと嘆いているのだが、  
宮中での乳母の仕事は国司級の家柄の若い娘たちに  
とって憧れの仕事であったことが伺われる。

『保元物語』は保元の乱（1156）の顛末を描きだ  
す。保元の乱は武士が台頭するきっかけとなった朝廷  
の内乱だが、敗れた上皇方の武士源為義の7歳から13  
歳の四人の息子たちが天皇方の源義朝の命で京都船岡  
山で処刑された。その際それぞれの息子に付けられて

いた乳母たちは、「首のない養君のむくろに抱きつき、  
天をおおぎ地にふしてなきさけび腹をかき切つて殉死  
した」筆者は『合戦の場に出でて、主君と共に討ち死  
にをし、腹を切るは常の習ひなれども、かかる例は未  
だなしとて、ほめぬ人こそなかりけれ』と乳母たちの  
行為を称賛する。武家社会の主従関係の下、乳母たち  
の生き様もまたすさまじい。一方、義朝の三男で鎌倉  
幕府を打ち立てた源頼朝は自身の乳母、摩々局（まま  
のつばね）に長年の奉公に対して知行地の税金を免除  
し新しい土地さえ与えている。鎌倉時代に築き上げら  
れた主従の御恩、奉公の強い絆はその後の武士の生き  
方に、そして乳母の生き方にも受け継がれる。

〈室町時代（1338～1573）〉になると上流社  
会の教養のある乳母とは全く異なる乳母が登場する。

『乳母の草紙』（作者不詳）という書物には良い乳母  
と悪い乳母が滑稽にまた揶揄的に描かれている。あら  
すじをかいつまんで言うところのようになる。

さる左大臣家の姉妹の姫たちに対照的な二人の乳母  
が雇われた。姉の乳母は見た目も不格好で、怒りっぱ

く、他人の言う事は意に介せず、思い上がって勝手なふるまいをするので童王というあだ名をつけられた。一方妹の乳母は性格もよく、「源氏」なども読んでおり琴、琵琶、和歌など並ぶ者のないほどの腕前である。童王は和歌など教えても「銭・米にもならぬ」と姉嬢に「九九」を教えて周りから正気でないとしられるがまったく気にしない。ある時左大臣夫婦が娘たちの成長ぶりを知りたいと呼び集め、名月をお題に和歌を詠むことになった。童王に育てられた姉嬢は

『つくつくと眺むるかいも名のみにて口には入らず望月の影』

と詠み周囲を呆れさせ失笑させた。「つくづく月を眺めていても餅をついて食べられるわけではなく餅のような丸い月が輝いているだけだ」といった意味であろうか。童王は結局暇を出されてしまう。童王は常識外れで無手勝流の教え方をしているが、今日から見れば合理的で現実的な考えの女性とも言えよう。ここでは乳母は赤ん坊の世話や身の回りの世話ではなく、雇

われの家庭教師として子育ての責任を一身に負っている。子供が良くなるのも悪くなるのも乳母次第と雇い主は考え、乳母は解雇もありうるりっぱな「職業」と考えられる。子供に何をどのように教えるかは昔も今も変わらぬ永遠のテーマのようだ。

〈江戸時代（1603—1867）〉

江戸時代、家康を始めとして徳川の將軍たちは儒教を社会秩序の拠り所とした。儒学者たちは中国の儒教の教えに則り社会秩序のあり様を説いた。彼等の著書の中には子供の教育について触れているものも少なくない。例えば儒学者の中村惕斎はその著『比売鑑』（1661）の中で「子供を産んだら直ぐに乳母を雇いなさい。乳母は心が広く寛容で優しく穏やかで慎重深く、言葉数の少ない者を選びなさい。」と乳母を重視する。医者で儒学者の貝原益軒は我が国最初の体系的な教育書といわれる「和俗童子訓」（1710）を表し、「子供が悪くなるのは父母、乳母、家人たちが教えの道を知らないことが子供の本性を傷つけてしまうからだ」とし「乳母を雇うには温和で慎みがありま

めやかで言葉少ない者を選ぶのがよい」と説く。しかし実際理想的な乳母を見つけてるのは難しいようで、江戸時代中期の医者香月牛山の日本で最初の育児書と言われる『小児必用養育草』（1703）には次のような記述がある。

『乳母は多くは賤しき家より出る者にして、その性ひずかしくねたまし。心奢りて怒りやすし。その上大切なる児子を育つる事を、ゆだねおく事なれば、父母も殊更要ある者におもい、おおかたの我がままは許しおくによりては、ひたぶる奢り出来て、家の法を乱すにいたる。よくよく心得べきなる』

乳母の好ましくない素性に言及し、それゆえ扱いが難しくわがままを通ず者が出てくるので注意すべきだと言う。文化は水のように高い所から低い所へ向かって広まるのが常だが、乳母を雇う慣習は江戸時代には町衆、一般庶民の間にも広がり、その出生も多様になつているのがわかる。とくに「乳母」の「わがまま」ぶりが取り上げられ教育上問題視されている。

〈明治（1868—1912）・大正時代（1912—1926）〉

明治維新以降社会の様相は激変するわけだが、明治の初期の書物には乳母に育てられたという記述がまだ多く見られる。1873年生まれの泉鏡花は『みさごの鯨』というエッセーの中で『浴衣に広袖をかさねて持つて出た婦はと見ると、赭ら顔で、太々とした乳母（おんば）どんで、大編のねんね子半纏で四つぐらいな男の児を負つたのが、』と当時見かけた乳母を描写している。その他、折口信夫、小山内薫、岡本かの子、下村湖人など作品の中で乳母を取り上げたものは枚挙にいとまがない。

やがて明治後半から大正にかけて乳母に育児を任せることへの批判が噴出する。1885年に創刊された『女学雑誌』には「乳母の弊害」といった記事が繰り返し載せられ『其の子を愛するもの真の母に越したるにあらず』と子育てにおける母親の重視が叫ばれるようになった。1900年の『婦女新聞』第1号では、『児童を強健活発に成育し、壽を永世に保たしむるは、

富国強兵の一大要素なり』と子育ては国の為と主張し、下田歌子や鳩山春子といった論客たちの論調も「賢母」による子育てを重視したものだ。また衛生面の改善についての記事も頻繁になり、やがて人工栄養のミルクが一般に流布するようになる。

また近代的経済観念も乳母という仕事が厭われる要因であった。清水紫琴が1897年『女学雑誌』に発表した短編、『今様夫婦氣質』には当時の先端的生活スタイルを送る若い夫婦の生活が描かれている。役所勤めの夫と女教師の妻というモダンな共働きの夫婦に子供が生まれ、『赤様は乳母の手に、虫気もなく育ちたまふ』と乳母を雇って育てていた。ところが月々の生活費が足りなくなり、その原因が、『身分不相応なる乳母といふ金喰ひ代物、これで確かに五六円づつの相違はあり、』ということによって乳母を解雇し妻が仕事を辞めて家事、育児を行い家計はやつと落ち着いた。雇主と労働者として雇用契約を結び賃金（給料）を払うという近代経済は乳母を締め出す大きな原因でもあった。

〈おわりに〉



春日局ゆかりの鐘楼（再建）  
春日心寺

とも言えるだろう。明治維新以降、西洋の近代思想や経済観念、近代教育、衛生志向などが怒涛のように押し寄せてくると情でつながる主従関係はひとたまりもなく崩れ去ってしまった。人工ミルクや新聞、雑誌などの普及も乳母消滅の傾向に拍車をかけた。しかし日本の歴史の中に、数少ない女性の「職業」の一つとして「乳母」が存在したということもまた事実なのである。

〈参考文献〉

秋谷修他校注『室町物語集下』「乳母草紙」 岩波書店1992

清水紫琴『今様夫婦氣質』女学雑誌1897『紫琴全集全一卷』

草土文化1983 他

（市島町出身、柏原高校20回生、神奈川県立高校英語科講師）

# 丹波のまつり

## 三輪神社 市島町与戸宮の杜

荻野 忠一（市島町乙河内）



祭神、大物主、大国玉、事代、猿田、愛宕、天満、若宮の各神である。氏は与戸、乙河内、酒梨の三集落である。

明治末の統合令までは祭神は大物主（大国さん）であり、本社は奈良県桜井市の三輪神社であった。従って神社の構成は、旧宮山に三の鳥居があり拝殿に二の鳥居があり、ここから二十間南に三の鳥居がある。殊に三の鳥居は豪華であった。左右ともに親柱を支える支柱があり、かなり広い敷地に建っていた。三輪郷六集落の氏神さんであった。祭礼も三輪郷で行われるので、神輿は絢爛豪華であったようであ

る。ところが明治末の神社統合で、大物主命に加えて大国玉命・事代主神・猿田彦命・愛宕神社・天満宮・若宮さんが合祀されてこの神社は乙河内・与戸・酒梨の三集落で祭司を行うことになった。祭礼も神輿は廃止され、神社の北にこんもりした塚があり神輿塚と言っている。奉納されたもようである。

在来は大和の三輪神社の様式が行われたが、統合は鴨神社系が合祀されたので、年間の祭礼も京都の加茂神社の様式が取り入れられ秋の例祭も京都の加茂神社で行われている「流鏝馬」を奉納するようになった。

各神社で奉納される祭礼は、神社の特性のある催しであるが「流鏝馬」は馬が登場するので、子どもたちの人気を高めたものである。

当地では「馬駆け」といい秋には子どもたちの待望の行事であった。

三輪郷（与戸）三輪神社

吉見郷（梶原）鴨神社

鴨庄（南）知乃神社

この三社共通の祭礼で、秋祭りも同日に行われた。

「馬駆け」の諸準備は酒梨が主に担当して行われたようである。流鏑馬に必要なものと言えば、

騎乗者の衣冠束帯一切

馬一頭

弓矢、的などである。

農耕馬から依頼されるのであるが、時代とともに農耕は牛が主となり、時には美和で一頭が飼育されているのみと言うこともあったようである。たまたま美和珪石の搬出にベタ車を使用していた。これに馬が使用されたのである。宮役はこの馬を早くから流鏑馬に依頼したようである。騎乗者は、たまたま軍隊で騎兵経験者があり、この方に依頼した。



〈与戸 三輪神社／10月10日〉古来からのやぶさめの神事にかわり、荒神払いが有志により奉納されている。四季の舞に続いて、五穀豊穡を祝う神楽が有志により奉納されている。

馬場は一の鳥居から宮橋まで（百五〇米）、的は宮橋手前に建てた。

このような段取りをして当日を迎えるのであった。騎乗者は「馬駆け」ちかくなると馬を借りて農道などで予備練習をするのであった。

いよいよ十月十七日になると、朝から太鼓の音、参拝者の振鈴のおと、神前で甘酒を振舞われて、祭り気分も高揚する。

境内の東通路が馬道である。一の鳥居には大幟、通路には一間いっけんおきに灯籠がたててある。的場にも大幟、この間、二百米くらいを馬が走るのである。石垣には子どもらがずらりと並んでいる。

「馬駆け」は一〇時からである。この半時まえくらいに騎手と馬が二の鳥居まえで神前に礼拝した。正装である騎手は衣冠束帯、手に鞭と弓……「アレ騎手はどこかで見たぞ」「とんぼりの上山百貨店のおじさんじゃ」「かっこいいなあ」。

馬の腹掛け、金色刺繍の綺麗な光をあたりに投げかけている。境内の裏道から一の鳥居に向かった。「早くこんかなあ」



「丹波叡山」と呼ばれる天台宗の古刹である神池寺の「施餓鬼法要」、「採燈大護摩供」として古くから行われていた宗教儀式だが、いつの頃からか定かではないがこの日に盆踊りも行われるようになった。

五十数年前、これといった娯楽もない時代にこの廿六夜祭は子どもたちにとつて夏休み最大のビッグイベントだった。

当時市島駅から村の中心部まで路線バスが通っていたが、この日ばかりは神池寺までコースを延長して夜を徹して参拝客をピストン輸送するほどの賑わいを見せていた。もちろん私たちは徒歩で登ったものだが。

盆踊りは夜を徹して行われ、夜店が出たりしてこの日は大晦日と同じように子どもたちも夜更かしが許されていた。

しかし、神池寺がある標高五百四十メートルの妙高山に通じる道路幅は狭く、車の行き違いが困難で危険であることなどからバスの運行が廃止されて参拝客が減少し、また麓にあった集落も廃村状態になるなどしていくなどしておよそ四十年前に盆踊りは

行われなくなつた。

そんななか、往時の賑わいを知る人たちからの「何とか賑わいを取り戻して村の活性化を図りたい」という提言を受けて場所を鴨庄小学校に移し「鴨庄ふるさと夏祭」として復活、今年で三十七回目の開催となる。

現在では丹波市各地で行われる夏祭の締めくくりの祭として丹波市観光協会でもPRされ、帰省客や他の地域からの参加者も目立つようになって年々賑わいを見せている。

さらに二十年前からは地域興しの一環として区内で「案山子まつり」も開催されるようになり、回を重ねるごとに活況をみせるようになった。

もともとこの鴨庄地区には竹田地区などで行われているような大きな祭がなく、竹田の秋祭りの日は友だちとわざわざ出かけて行った思い出がある。

村の人たちに尋ねてみても、「鴨庄村誌」などの資料をひも解いてみても鴨庄村の祭についてはわからなかつた。

その理由については明らかではないが、この地区



## 丹波のまつり

はもともと水が少ないうえ、粘土質の土壤で保水力が弱く、田畑の耕作に適さなかつたようだ。

そのため、鴨庄地区で祭らしい祭と言えば毎年九月一日(旧暦の八月一日)、出穂の時季に知乃神社で行われる「八朔祭」が思い浮かぶぐらいで、秋の豊穰を祝う竹田祭のような秋祭を行う風習がなかつたのではないかと思われる。

その後、いまから八十年前に神池というため池が築造されてこの鴨庄地区は他の地区からうらやましがられるほど水が豊かな村になつた。このため池の完成によつて村独自の発電所が作られたり、他の村に先駆けて各家庭に水道も整備され、また、養魚場を作つて鯉の養殖を手がけて村の財源に充てるなど、当時は先進的な村として各方面から注目されていたようだ。

民俗学者としても知られた時の大蔵大臣・渋沢敬三や民俗学者の宮本常一なども鴨庄村に着目してこの地を訪れており、特に宮本は鴨庄村についてその著作集「農業技術と経営の史的側面」と「村の旧家と村落組織」の中でかなり詳細に著している。

しかし、時代の移り変わりとともにこれらの一次産業は衰退し、人口が激減して高齢化率も約四十％に上昇。『出店』と呼ばれた村の中心にあつた店も後継者がいないことから次々と閉店して現在では皆無となつて、限界集落になることは必至だと懸念する声が聞かれる。

鴨庄地区以外に目を向けてみると、毎年正月明けの一月九日と十日に市島の恵比須神社で行われる十日恵比須祭や七月二十九日に行われる川裾祭があつて賑わいを見せている。

しかしこれらの伝統ある行事や祭も担い手不足や運営費用の逼迫は否めず、さらに安全面の問題とも相まつて毎年人気だつた川裾祭の花火大会も昨年からは中止されるに至つている。

現在鴨庄地区は他の多くの地域同様人口減少に伴つて空き家が増加しており、UターンやIターンなどによる地域活性化策が講じられているが、移住してきていもいわゆる「ムラのつき合い」が多いことに負担を感じる若者や、現在検討されている学校の統廃合問題にとまなう子どもの教育問題を懸念する子

育て世代があるとともに、これまで各小学校区単位で活動し維持してきた各種の行事が学校の統廃合によつて維持できなくなるなど、地域が抱える課題は少なくない。

このような時代にあつてこれまで営々として守り続けてきた地域の伝統や風習をこの先どうやって維持していくのか、厳しい問題に直面しているのも事実だ。

鴨庄地区ではその打開策の一つとして、これまでの伝統や風習にこだわることなく、若い世代の自由で新しい発想や感性を尊重し、これまで村のしきたりを守ってきた村の「長老」は「金は出すが口は出さない」という立場で見守つていこうという取り組みを始めたたり、都会に出ている人たちに寄付を呼びかけてその見返りとして米や野菜など地域の特産物を贈る、いわば「地域版ふるさと納税」的な取り組みをしてはどうか、といった議論もなされているようだ。

さあ、今年も懐かしい人たちと再会し、故郷の明日を語らいに故郷の夏祭りに出かけよう。

(丹波市市島町上牧出身／大阪丹波友の会会長・柏陵  
同窓会阪神支部副支部長・柏原高校コーラス部OB会  
「柏原高校好楽会」事務局長)

## 旧吉見村の御祭神

荒 木 壽 一 (市島町梶原)



### 1 鴨神社の歴史と由緒

鴨神社の創立は不明であるが、古伝によると賀茂真襲の創立にかかると伝えられている。京都の下鴨神社の御神祭賀茂建角身命(八咫鳥)から、三十三世代直系の平安期の初め桓武天皇(七八一年)の当時、賀茂社の禰宜で賀茂県主真襲が、賀茂建角身命の姫神である伊賀古夜比売の出生地であるこの地に祭祀して宮守りとして来往した。

この神社の本社は、賀茂別雷命の社を中心とし東西10間(20米)、南北2間(3米)の長方形拝殿を前に、塀をもって三方を囲んだ社殿を賀茂四座大明

## 丹波のまつり



陋身門

神といった。

現在の場所に本殿ができるまでに既に、神野神社と呼んでいた社・伊古夜姫の父神・神野神と共に建角身命（いづれも下鴨神社の御祭神）の御祭神があつたことを知るもので、この神野神社の上

棟銘が丹波誌記載の応永二十八年（一四二一年）建立の延喜式内神野神社であり、天正の兵火で焼失した社である。このことは、古代の御霊代が村岡元治宮司によって、境内東北隅から拾得されている事と、延宝八年の再建の際の寄進表によって一層明確になった。

この寄進表には、梶原村、南村、奥村、北村、小多利村、黒井町の住民二〇名の名が記され、本柱、栗の木、飾り物、縁分、杉、布、鈴、銀40枚等が寄進ものとして記され、時の社僧大応の署名とともに「神の社」（かものしゃ）の神社名が明記されている。



拝殿（本殿）

これは現在の神社名が「賀茂」でなく「鴨」であることから、主神は下鴨の神で延宝八年、現在の場所に再建された際、上賀茂と合祀されたものと見るべきであろう。ともあれ、天正年間まで存続していた社殿と、応永二十八年

までの社殿も共に、正統を踏んだ由緒と社構を備え、延喜式目支配の神野神社であつたことがうかがえる。

◎摂社（塀外の社）は次のとおりである。

・金刀比羅神社

塀外の西北隅の小社、金刀比羅宮は、その石灯笼銘により延享四年（一七五四年）戸平村の建立となつている。

・庚申堂

創建年代は不明であるが、この社も恐らく塀内神社移築に続いて創建されたと思われる、神仏習合時代をものがたる。このあたりには珍しい神社である。

・厳島神社

この社も創建年は不明であるが、江戸中期のものと推定される。巖島とは市杵島神社という神で古来から福の神として、遠く飛鳥時代に発祥を見、全国各地に水神として、弁天様ともいわれ商売繁盛の神ともいわれる。

・下の森神社

昭和二十二年三月現在の場所（境内の西端）に移すまでは、現在の梶原区民広場がその神域であった。祭神は伊勢皇大神宮で創建年は棟札によると長享元年（一四八年）と云われている。

・柿本神社

祭神は万葉の歌人、柿本人麻呂朝臣で文教守護の神と云われている。この神社が梶原に勧請されたのは、文化四年（一八〇七年）で稲次家（大阪在住）



御神木の大公孫樹

が自家の武運長久を祈願して勧請されたものである。その後、久下市蔵氏宅が管理されていたが、祠の荒廃甚だしく極めて神威を損なっているのを見て昭和十七年十二月、荒木堅三氏が施

主となり、新たに鴨神社の奥社として再建された。鴨神社は、大正十三年五月に郷社に列せられ、戦後は宗教法人鴨神社となる。一の鳥居（大正三年三月再建）の脇に御神木の天然物・大公孫樹（推定樹齢数百年、高さ20m、幹周6m）がある。

## 2 年中行事と祭儀

1月1日 元旦、初詣、その準備として年末に門松をたて、注連縄飾りをつける。

1月14日 左義長（どんど焼き）正月の松飾り等を集めて焼く行事。この火で青竹にはさんだ餅を焼き、これを食べると息災になると云う。このどんどの灰を持ち帰り、家のまわりにまくと害虫を寄せないとされる。

2月 節分祭。鴨神社の庭で大焚火をし、その火に暖まると邪霊災厄から免れられるという。

〃 初午（稲荷神社の祭典）五穀豊穣祈願。

7月30日 水無月祭。鴨神社夏祭り、茅の輪をつくり、その下を潜る行事を行う。

9月1日 八朔。秋の豊作を願い、タノミ（田の実）

# 丹波のまつり



浦安の舞

ものは京都まで行って見積もり、今は不要となった、消防ポンプ用の箱付きリヤカーに載せて曳く式のものに造りあげた。流鏑馬神事終了後、子供たちの掛け声に合わせて、伊勢音頭の祭りばやしとともに区内一巡のお旅がはじまる。子

の節句ともいう。  
10月10日 秋祭り。

浦安の舞 氏子中より小学校五年・六年生の女子四〜五名により、あでやかな巫女姿で浦安の舞を舞う。

流鏑馬 綾藺笠に古代の狩装束に身を固め、太刀を背負った騎手が宮前から一の鳥居までの馬場を疾走し、立てられた的板に対して矢を三度射る。この流鏑馬神事の伝統は引き継がれている。

子供神輿 子供神輿は早くから、上垣区の愛宕神社が秋祭神事として奉斎されていたので、その台を採寸して同様のものを建具店に依頼し、当社は

榎神輿にしたものである。神輿かきの衣裳、飾り



流鏑馬



子供神輿

供達と付き添いの大人たちも、各組の休憩所でそれぞれ手篤い接待を受け、喜々として社に帰り着くのは五時近くとなる。

紅白餅まき 祭の二日前位に当番の組により紅白の餅60kgを搗き、神輿巡行終了後、餅まき行事が行われ、氏子多数が参加し、歓声をあげて餅拾ういに興じる。

### 3 各地区のご祭神

旧吉見村には、梶原の鴨神社の他に、天満宮（上田）恵比寿神社（市島）愛宕神社（上垣）と、それぞれのお祭りが伴うご祭神や、仏閣もあるが、他に委ねたい。

（元丹波市役所勤務、保護司、梶原区自治会長、吉見保育園理事長を務める。）

# 「丹波竹田祭」神輿の由来を探る

青木正文（市島町中竹田）

◇はじめに



丹波竹田祭（以下竹田祭）は、旧上・中・下竹田三か村（江戸時代は前山郷（庄））六社の合

同祭礼で、現在は十月の体育の日前日の日曜日に本宮が行われます。三竹田六社、即ち上竹田の加茂神社（以下上加茂神社）、中竹田の伊都伎、一宮、加茂神社（以下中加茂神社）、下竹田の二宮神社、三宮神社の六社から神輿がそれぞれの神社を朝七時〜八時頃出発して御旅をし、十時頃御旅所である一宮神社前に集結、十時半頃から奴行列の先導に続いて、順々に壮麗な宮入を披露しながら、本殿前の指定の場所に着座します。

この六社の神輿のうち、三宮神社以外の五社の神輿については、その由来が少しずつ分かってきたこ



六社神輿の勢揃い

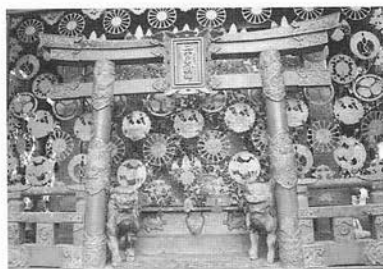
ともあり、ここにご紹介してみたいと思います。新調すれば、今の値段で一億円以上もするという高価な神輿を、江戸時代、氏子地域だけで買える筈も無く、京都松尾神社や上賀茂神社などの大きな神社系列の神社が神輿を造り替えた時、その古神輿を譲渡してもらった例が多いと伝えられて来ました。

最近の調査で、神輿の台座に残された墨書、神鏡や神輿渡御にお供をする道具などに彫られた文字、地誌や古文書類などから、新たに判明したこと、及び一部推論も含めて考えてみることにします。

## ◇下竹田・二宮神社

奥蔵に残されている神鏡に「寛文十二年（一六七二）石原村、前木戸村」の銘があり、地元の村名が入ったこの神輿から三竹田地区で最も古い神輿があったと思われる。これを二宮神社神輿の初代とす

# 丹波のまつり



神輿にのった犬の狛

ると、二代目の神輿が、京都松尾神社の摂社・櫛谷神社から譲られてきたことが、神鏡に彫られた「松尾櫛谷大明神」の文字からも分かります。江戸時代の氷上郡の歴史研究にとつて重要な資料である「丹波志・氷上郡之部」（古川茂正著、寛政六年（一七九四）編纂）によると、この神輿は「延享年間（一七四四～一七四八）に松ノ尾より銀四十枚で譲り受けた」とあります。

次に三代目の神輿が、同じく松尾神社の摂社・宗像神社から譲渡されて来ます。弘化二年（一八四五）三月二日の事で、これに関しては、当時湯長谷藩（現福島県いわき市）丹波飛地領二千石で在地代官を務めていた下竹田村の依田家に残された「依田家文書」や、松尾大社の機関誌「洛西」に載った研究論文からも明らかになっており、「洛西」には下竹田村か

ら代金百四十両（今のお金にすれば二千万円前後でしょうか）を受け取った、とあります。今も使われているこの三代目の神輿には、非常に珍しい木製の狛犬一対が乗って神様をお守りしながら、一緒に御旅をしています。この時、それまで使われていた二代目の櫛谷神社から来た神輿は福知山市三和町の王歳神社に譲渡されました。

## ◇中竹田・伊都伎神社

伊都伎神社は氷上郡に十七座ある延喜式内社の一つで、戦前は郷社に格付けされていました。祭当日、神輿のお供をする行列の中に鉾が二本ありますが、その鉾には、宝永六年（一七〇九）齋大明神と刻まれています。

その前年の宝永五年（一七〇八）、中竹田村は公家萩原家の知行地となります（萩原家領は中竹田村の一部と上垣村の一部で一千石）。

この萩原家は、豊臣秀吉が慶長三年（一五九八）に亡くなった後、豊国神社に神として祀られることになった時、その社家として京都吉田神社の嫡流、吉田兼従を分家させて生まれた家ですが、その後の



豊臣家の滅亡に伴う豊国神社の破却など数奇な運命をたどりながらも、公卿に列する二位、三位として吉田本家とともに吉田神道家として全国の神社を統括する大きな役割を果たしていくことになりました。

「竹田村志」には、萩原家丹波領の在地代官だった真壁主馬が、萩原家、吉田家の縁を頼って上賀茂神社や松尾神社関係の神輿を譲り受けたという記述があることと、伊都伎神社の神輿は上賀茂神社から来た、という伝承もあり、宝永五年か六年に、新領主萩原家の縁で上賀茂神社系の神輿を譲られたものと考えています。

#### ◇中竹田・加茂神社

中加茂神社については、最近新しい資料の発見がありました。

もともと神輿の神鏡には「寛文十三年（一六七三）松尾大宮大明神」とあるものが一枚、「明和六年（一七六九）松尾大宮大明神」とあるものが三枚あり、松尾神社の大宮社から譲渡されて来たものであろうと考えられていましたが、今回の調査で「譲渡申一札（ゆずりわたしもうすいっさつ）」という書付が



中加茂神輿「譲渡申一札」

見つかри、それには享和三年（一八〇三）八月、城州（山城国）葛（野）郡上桂村、即ち大宮社の氏子地域の惣代名で、神輿と掛物を銀五百五十目で丹州（丹波国）氷上郡前山庄中竹田村賀茂大明神へ譲った、とあり事実

#### ◇中竹田・一宮神社と上竹田・加茂神社

一宮神社の神輿は、神鏡に宝暦十四年（一七六四）松尾四大神、中島作とあり、また台座の墨書に文化元年（一八〇四）とあって、四之社（四季を司る神）の神輿であったことは確かですが、神鏡はそれが詠えられた年、台座の年号は修理の年とも考えられ、神輿本体の製作が何時だったかの確定はできません。また、それが何時一宮神社に譲渡されてきたのかも分かっていません。

さらに上加茂神社の神輿の台座には、明和八年（一

七七二) 西塩小路村、梅小路村、御所之内村(即ち松尾四之社の氏子地域で製作又は大修理された)という墨書と、文化元年(一八〇四)上竹田、との墨書があります。

つまり一宮神社、上加茂神社ともに松尾四之社の神輿であること、そして上加茂神社には文化元年にやつて来たことは確かなのですが、四之社で何時造られたのか、一宮神社には何時やつて来たのか、これには現地調査を含めた今後の研究が必要になります。

## ◇おわりに

竹田祭神輿の詳しい由来の追究や京都の祭文化との関係性、今は行われなくなった流鏝馬のこと等、まだまだ課題が沢山残されています。

(Uターン後、市島町役場、丹波市観光協会に嘱託勤務。現在は、市島町史実研究会、竹田歴史資料室などに所属して、「地域史研究と共有化」をテーマに活動中)

## 丹波竹田の祭りの思い出

山本喜則(千葉市)

進学で故郷を離れたので最後に見た祭りは18歳の時であり、55年以上も前のことなので記憶は不確かだが、思い出すままに記します。

時期は10月に開催され(何故か17日が記憶に残っているがこの日に固定されていたのかどうかは定かでない)、毎年好天に恵まれていた。6社(一宮、伊都伎、二宮、三宮、中加茂、上加茂)の神輿が一宮神社に集まるのだが、この時の「宮入」が最大のイベントであった。鳥居をくぐる前から右に左に大きく蛇行しながら本殿の前の広場に到着し、各神輿が順番にかなりの時間を掛けて「練り」を行いくらいマックスでは担ぎ手が神輿を上には放り上げたり、地面すれすれに落とす動きには迫力があつた。その後六基の神輿が本殿前に横並びに安置された姿は壮観だった。各神輿が地元神社へ戻る際には「宮出し」の「練り」が再度行われた。

我が家は一宮神社から600mくらいの処にあり、毎年二宮神社の担ぎ手の皆さんに宮入前の休憩所として表の縁側を開放し、飲み物等を提供していたが、前日から大掃除をして迎える準備をしたものである。当時松本屋という屋号でパン屋を営んでおり、祭りの時は一宮神社の鳥居の前に露店（といっても、リング箱の上に戸板を数枚並べた程度）を出すのが習わしで、姉、兄と共に売り子として手伝ったが、早朝にいわゆるテキヤの元締めが露店の場所割りを行うと同時にシヨバ代を徴収していた。

一宮神社の境内は普段は子供たちの格好の遊び場だったが、樹齢数百年の太い銀杏の木があり、秋になると競って銀杏拾いをしたものである。風で落ちればいいが、そうでないときは石を投げて落とした。この経験で、初めて靖国神社を訪れた際に同様の方法で銀杏を採ろうとして注意された苦い思い出もある。本殿の裏には鬱蒼とした空間があり、人通りも少ないが、ある年の祭りの午後、当方の家に入入りして

いたAさんが酔っ払った挙句に別の部落の若い衆三人にボコボコにされているのを偶々目撃したが、助っ人にはなれなかったのを何故かいまだに思い出す。

一時途絶えていた六社の祭りが近年復活し、コスチュームも昔は白一色の上下に晒しの腹巻だったが、今はカラフルな法被を纏い、奴振り行列もあると聞くので、元気な内に一度は観たいと思っている。

（市島町中竹田出身／昭和19年生、元サンキストパシフィック㈱代表取締役）

## ふるさと探訪市島町内

（前山・余田編）

余 田 節 哉（市島町上鴨阪）



前山の余田地区には大原神社・折杉神社など古い史跡等があり、また余田城跡もあります。が、去る平成二十六年八月台風

## 丹波のまつり

二十六号に伴う大豪雨により大災害が発生しましたが四年の月日が経ち、その復興工事がやっと落ち着きました。今回は主にこの二社について、折杉神社の粥占神社（かゆうらのしんじ）についてお話ししたいと思います。

### 大原神社

所在地 徳尾村字大原、村社（大正十五年八月十九日）

祭 神 素盞鳴命、伊邪那美命、大年命

例 祭 五月三日

建造物 本殿、拜殿、社務所、鐘楼等がある。鐘楼は社僧隆尊法仰の造立、鐘には寛文八年の銘あり、当郡葛野庄柿柴の鋳物師足立氏の造。神宮寺は真言宗明照院龍泉寺と称し、高野山宝城院であったが、明治初年の神仏分離の際、これを社務所とした。

由 緒 創立年月は不詳ですが、延宝元年（一六七三）の日記によれば、人皇三十七代齐明天皇（女帝）五己未年（六五九）の春、時の皇太子が諸国御巡礼の狩の時、当山に行幸、周囲のたたずまいをつくづくとご覧の末「待避応護の谷深く神明無双の峰高し」

と仰せられて、「松の風峰の嵐の音聞かば絶えず御法を説くのを（徳尾）の里」とお書きになったと言われております。

神社東の谷を王谷と称するのはここに由来します。また、当社山麓の観音堂に安置されている聖観音の木造は、孝徳天皇（第三十六代）の白雉年間（六五〇年代）定恵上人（藤原鎌足の長男）の御作と伝えられております。

元明天皇（第四十三代女帝）時の和銅六年（七一三）道智上人諸国を巡られましたとき、当山の霊地であることを聞かれ、社内に十七日の間参籠され、

終夜上求菩提下化衆生の祈願をなされた。

その時、全身白毛におおわれた古狼の雌雄が来て、上人の前に尾を振り耳を垂れ上人を恐れ敬うが如き態度をもって、薪を取り水を汲み片時も離れようとしませんでした。上人のつくづく



く思われるに、これは必ず明神の御使であろうと奇異に感じられたというので、今日、社前に雌雄二匹の狼の像を奉安いたしますのは、この故事によっております。

以前、旧参道にあった両部鳥居（現在は石造）に掲げられていた神号額（天一位大原大明神）は、弘法大師の直筆と伝えられており、筆致古雅まさに稀代の逸品であることをうかがわせます。これらのことを考え合わせますと、当神社の創建は和銅年間（七〇八〜七一四）以前と察せられます。その後大正十年（一五八二）頃までは、領主余田左馬頭為家の祈願所として崇敬篤かったのですが、明智光秀に滅ぼされ兵火にあい、殆ど焼失、衰微の一途をたどりました。



天正一八年（一五九〇）秀吉天下統一し全国の検地を行いました。許し給わず薬も当社祭神の靈異に驚き、ついに秀吉も



その神徳を恐れ慎み、寄進という名目で六町七反歩の山林を除地として与えたと伝えられています。現今の境内外の山林が即ちこれなのです。

当社中興開祖とし尊崇されている大内隆尊は、戦国時代の守護大名大内義隆の玄孫で、隆尊は幼児から柏原町八幡神社に奉仕し、早くから当社の由緒神徳高きことを聞き、その中興を志し慶安元年（一六四八）此の地に來り明暦二年（二六五六）本社再建、年月をかけ神域の莊嚴、神域の顯揚、旧典古儀の復興に尽力されました。中興第六世神海は性賢明、徳望高く社運隆盛、神威の高揚をもたらし、天明寛政年間（一七八一〜一八〇〇）勅によって、年々九曜星尊像を下賜せられ、時の帝（百十九代光格天皇）の御代御安泰を祈願申し上げたことは、当社前古無比の名誉としていえるところです。

# 丹波のまつり

また徳尾の領主藤堂兼之丞、領主代官高橋太郎兵衛、上下両鴨阪領主織田信憑（織田公八世の孫、柏原藩主）等は当社への崇敬は甚だ篤く、幣帛神饌の奉納、社参の儀も行われ、領内安全の祈願はもとより神器什物等の奉納も多かったと伝えられています。（宮司、岡原東光氏記述より転載）

## 大原神社観音堂（圓通閣）

大原神社の麓にあり、郡内巡礼二〇番の札所。これは神社の神宮寺明照院の観音堂で、寺院退転し、あとに観音堂と鐘楼堂が残っている。登り口に鳥居（その額の神号は弘法大使御真筆）がありその右に圓通閣がある。（前山村誌より）

## 折杉神社

社格 旧村社

祭神 伊邪那岐命、伊邪那美命

創建 正和五年（一三一六）第九五代花園天皇の御代、鎌倉時代。執権 北条高時の時代。

管試神事・管試祭くださめさい（粥占い）について

当、折杉神社においては、古来陰曆睦月十四日の夜、管試（クダダメシ、又、単にクダダメと称す）、即ち筒粥祭（ツツガエサイ）を斉行することとなっている。昔は、氏子中の十二才以下の少女十二名を選んで七日間斎戒水浴させ神事を執り行わせた。先ず、境内一定の区域に注連縄を張り、夕刻より御籬火を焚き、その火の上にて粥汁を煮き、あらかじめ米と一緒に鍋の中に入れておいた十本（現在は十三本）の管に入った粥粒の多少によって、穀類その他の農作物の豊凶を卜定するものである（現在は二月三日節分にあわせ実施）。

また、檜の木のちの駒（一寸五分大）十二箇を等火の燵（おぎ）の上に並べて燃やし、その残った灰色の明暗によって、その年内の月々の晴雨、天候を伺い定める。いずれも靈驗著しく、それがために、その昔においてははこの神事を拝もうとして遠近より参拝するもの数を知らず、堂島の米相場

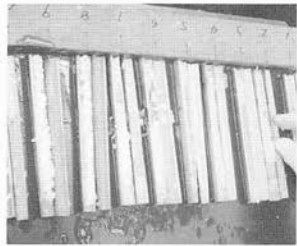


管試祭（粥占い）

## 丹波のまつり



篝火



粥の詰まり具合によって判定

にも関係したほどであったと言ひ伝えられている。しかしこの神事がいつごろから始まったのかを証するものの存在は明らかではない。粥をたく火は神前の火明より頂き、お米もお供えたものを、三合頂き占い後は参拝者にふるまう。

当日の管試の結果を記入する用紙があります（木版です）。

大原神社、折杉神社の他に、大杉ダム、余田城のこと、清水山薬師寺のこと、徳尾の東臯寺など、明智光秀の丹波攻め保月城の関わりなどありますが、また次の機会に――。

今回の資料等についての御提供は、宮司岡原東光氏、元宮筆頭総代余田忠司氏、町史実研究会の皆様

の御厚意に深謝いたします。

ありがとうございました。

（昭和十年市島町上鴨坂生れ 柏原高校（卒）六回生 国鉄福知山管理局（の各部門）を経て国鉄清算事業団で国鉄改革に従事 中兵庫信用金庫調査役 町収入役 助役 平成の大合併の協議会幹事を経て、丹波市郷土民謡保存協会会長を務め、現在は公職等はすべて離れ 教育（今日行くところ）と教養（今日の用務）にもれないように努めています。）

あとがき

丹波のまつりシリーズは、大野義昭委員の強い思い入れでスタートしたのでしたが、本号を以て、丹波市6町を一応一巡致しました。

今回は、市島町出身の会員石橋順子様、高見秀史様、山本喜則様に絶大なご助力を賜りました。ありがとうございました。また、在郷の方々の玉稿を頂くに際して、C・W氏にコーディネートをお引き受け頂きました。（ご本人の御指示にてイニシャルにて、失礼します）心より御礼申しあげます。お忙しい中、格調高い玉稿をお寄せ下さった方々へ、深甚なる敬意と感謝を捧げます。

（坂上勝朗）





■会員が書いた本

ローベル（田中） 柀子著

## ミラン・クンデラにおける ナルシスの悲喜劇

成文社（2018年3月刊）2800円

著者によれば、読者は多いが研究者は少ないというチェコ出身の越境作家ミラン・クンデラに関する論考。ナルシズム（自己愛）を切り口とし、クンデラの小説世界を新鮮な感性で洞察力豊かに読み解いている。フランス・ストラスブール大学に提出した博士論文を基にしており、注・参考文献も合わせて本格的な研究書としても読めるが、代表作『存在の耐えられない軽さ』を始め、クンデラの小説全十一作が均等且つ詳細に論じられており、クンデラに馴染みの薄い若い世代の読者にとっては恰好の入門書にもなり得る。前半は一般読者向けの「ナルシズム論」、後半は文学研究者向けの「語り

手論」が展開されている。

三島由紀夫は「女にはナルシズムは存在しえない」と述べているが、本書では老若男女を問わず夥しい数のナルシスたちが処上に載せられ、彼らの演じる悲喜劇が読者をクンデラワールドへと誘ってくれる。過度のナルシズムに捉われると、自分が「幸せであること」よりも、他人に「幸せに見えること」の方を重要視するようになり、現実感を喪失し自己を見誤ってしまう。フェイスブックでの「いいね」の獲得数を見せかけの幸せのパロメーターにしてしまうのである。本書には、こうした不幸の根源とも言うべきナルシズムから逃れるための解決策が提示さ

れており、ある種の幸福論として読むことも可能である。クンデラの魅力を伝えたいという著者の熱意が、時には研究者らしからぬ軽妙な表現を通してひしひしと伝わってくる。

（田中正邦）

著者略歴

1981年東京生まれ。幼少より休暇を父方の実家のある氷上町で過ごす。2004年東京大学文学部仏文科卒業。2007年スイス・ジュネーヴ大学博士予備課程修了。2011年東京大学大学院博士課程修了。2013年フランス・ストラスブール大学大学院博士課程修了。2012年より静岡大学専任講師、准教授を経て、2018年より東洋大学准教授。専攻はフランス文学、比較文学、ヨーロッパ文学・文化。



■会員が書いた本

清水雅子著

「極楽の余り風」第四集

丹波新聞社 1500円

清水雅子氏のエッセー第4集「極楽の余り風」が刊行された。ご存知のように丹波新聞の連載エッセー「やすらぎ」からの抜粋集であるが、その連載は今年で39年目に入るといふ。第4集には2007年から2016年のエッセーが収録されている。このように長きに渡って続けてこられたのはひとえに著者の才能と読者の支持があったからだろう。ここではそのエッセーの魅力を少々ご紹介したい。

まず第一の魅力はその文体の肩肘張らない気さくさと簡潔さである。新聞の連載コラムなので当然なのだが一つのエッセーは短く、それが150余の様々なトピックスからなり、居ながらにして次々と場面が変わる映画を見て

いるようで読んでいて飽きない。第二の魅力は多岐に渡るトピックス中に一本ゆるぎのない芯が通っていること。それは俳句である。著者は俳人でもあり、毎月、句会のために丹波に帰省し丹波の今にも通じておられる。丹波の著名な俳人や自身の句も所々に散りばめられ韻文の世界にも読者をいざなう。このことは現実の出来事にさらに深みを演出している。第三は故郷丹波への愛である。老いた母や郷里の人たちは文中で丹波弁をしゃべる。昔から伝わる家庭や地域の行事や食べ物も紹介される。それは丹波に限らず消え去ろうとする古き良き時代や言葉への郷愁を誘い、読者に自分の生い立ちや家族を



思い起こさせる。さらに、その故郷への限りなく優しい眼差しは両親、子供、孫そして震災で被災した人たちへも向けられる。このエッセーを読んで腹を立てたり、悲しくなったり、暗くなったりする人はいないだろう。読者はまさに「極楽」から吹いてくる風に吹かれ幸せな気分になるのだ。最後に、著者の夫の存在も忘れてはいけない。著者の夫は「刑事コロンボ」の決して画面に登場しない奥さんのような役割を果たしている。コロンボ刑事が捜査中に「うちのかみさんがね」と言うたびに視聴者はクスリと笑う。そして刑事の奥さんでどんな人だろうと想像を働かせる。清水氏の夫はしばしば文中でスパイスの効いた発言をされる。思うに、彼は頭が切れ優しくハンサムな(多分)気がするのだが、他にもまだまだ魅力が詰まったエッセー、読んでみて自分なりの魅力を見つけていただきたい。

(石橋順子)



## ■郷土について書かれた本

福田千鶴著

## 春日局

—今日は火宅を通れぬるかな—

ミネルヴァ書房 定価3000円(税別)

徳川時代を代表する女性である春日

局の評伝は多い。NHKの大河ドラマへの「便乗出版」も含めれば百冊を超える。だが大半は、彼女の死後に編纂された二次史料に基くものだ。彼女の書状も含め、これほど多くの一次資料があるのに！ 若き日に国立国文学研究資料館・史料館で勤務し、今は九大基幹教育院教授として日本近世史に挑む著者は、一次資料を駆使しステレオタイプ化された春日局像の再構築を図る。彼女は単なる「大奥総取締役」ではなく、根回しに長けた立派な政治家だったのだ。

美濃や丹波の人が目の色を変える「福」の出生地に著者は関心を示さな

い。黒井城落城の天正七年八月九日以降の出生であれば丹波であるが決め手がない。春日局という名も朝廷から頂く女房名なので、白杵稲葉家で後世に編集された『御家系典』のように、これから春日井庄出生と断定はできないと説く。

さらに丹波の人が狼狽するのは、「父の死後、福は母の実家、稲葉家の庇護で成長する。養子に迎えた夫、正成と離婚した後も稲葉家の角切折敷(すみきりおしき)の紋に三の字を入れて家紋とした。斎藤家では無く養家、稲葉家の娘として生きたのだ」と理由づけ、稲葉福として描いていることだ。



当時も今も(？)、女性は嫁ぎ先の家紋でも実家の家紋でもなく、「〇家の出」を示す紋を礼服に付ける。福は嫁いでおらず婿を迎えたのだから稲葉家の紋を堂々と使っているはずだが、そこへ「三」を入れたのは、亡父斎藤利三への想いではなからうか？

もつと痛快な著者の主張は「福は家光の乳母ではなく生母だ。京都粟田口に乳母募集という高札を徳川家が立てたりするものか」である。実に説得力がある。明治元年生まれの祖母が「地元では生母だと思っているが証拠がないのじゃ」と無念がっていた。著者は學士會会報2017年11月号で「上梓したが、これまでの通説と異なるので学界の反応は冷やかだ」と嘆くが、多くの地元の方々に是非読んで頂きたい。

(徳田八郎衛)



■会員が書いた本

原谷洋美著

偲ぶ草 『お宮さんのとなり』

丹波新聞社 1000円

祖母が亡くなって五十年、母が亡くなって二十五年、手元に遺されていた俳句を纏められての著書である。祖母高田 栄さんの、和綴じの句帖には、達筆な文字で綴られた句が並んでいる。句帖には「その折々の美しい気持を思い出すためのことば」と、表書きしてある。祖母や母の住んでおられた処は、丹波新聞に寄稿され本書にも載っている著者の「下滝随想」の文から、丹波下滝で大歳神社の近くで、そこに住まわれて作られた句だと受取りながら読ませて頂いた。「お宮さんのとなり」、短くてなんと味のあることばだろう。お宮の境内と周辺の雰囲気、年中行事を通しての住民との繋がりが、ぼのぼのと伝わる。このことばは、祖母の「ひ

ねもすを蟬時雨かな宮となり」や、著者の冊中の随筆「お宮さんの蟬」の文中にあることばを元に、付けられたことばであろうか。表紙の題字も、書家の手になるもので、美しい気持を思い出すに、これ以上のものはない。母の高田まささんの遺句は、「松風会俳句集」や「権の実句会」の句として纏められ、昭和四十六年から平成三年四月に亡くなるまでの二百余句が収録されている。

祖母、母の句のあとに、著者の随筆六編が載せられ、祖母や母が住んでいた土地の雰囲気や彷彿とさせ、句の情景を補足してあまりある。

著者は、歌人でありエッセイストで



もあるが、その繊細な感性で、亡くなられたご両所の思い出を残した著作として、よいものを残されたと思います。泉下のお二人もお喜びのことだろうと思います。

高田 栄さんの句より

さりげなく咲いてゐるなり敷の梅花提灯かけたる駅や臨時バス

雛どのに物語りつつ終ひけり

ひねもすを蟬時雨かな宮となり  
病み起きて精霊まつる柿をもぎ

高田まささんの句

淡雪や姑の遺せし句集読む

風花を捷毛に受けて孫帰る

暮き替えし大屋根高し春の月

冬野菜漬けそれぞれの名札かな

霧こめて宮の大樹の高き朝

病院のうら山わらびの丈高し

大家族雑煮の餅の五十二個

満開の花や冷たき夫の足

(俳句研究誌『鈴』代表金子徹)



■郷土について書かれた本

宮崎修一朗・徳山静子編

## 兵庫の民話

未来社 本体2000円

1960年に「日本の民話」シリーズとして府県別（東京と北海道には民話がない?）、あるいは房総、石見、飛騨、屋久島と国別や地域別に75巻に分けて発行された国民的遺産が2015年に新版となつて再発行された。篠山周辺を担当された朽木司郎さん（城跡研究者としても著名）をはじめ、共著者の大半が物故されている。この発行が10年早かつたら、と悔やむ。

初版の際と同様に悔しいのは、五カ国で構成される「大県」兵庫が1巻に押し込まれていることである。加賀・能登、安芸・備後や石見、越後、佐渡、大分、茨城などは2巻に分かれているのだから、民話の宝庫、播磨にも1巻を与えてもよいのでは? と思う。

その冷遇兵庫の民話の内訳は、「但馬の国」26話、「丹波のやまあい」15話、「六甲山とそのふもと」15話、「淡路しま」7話、「播磨路にそつて」20話である。丹波のうち氷上郡9話、多紀郡4話、有馬郡2話であるから、ここでは多紀郡が気の毒でならない。

兵庫県の中では優遇された氷上郡であるが、執筆者は山田隆夫さん。大阪民俗研究会等に所属し、兵庫や奈良の戦前に活躍した在野の研究者である。全国の誰が読んでも興味を持つ9話を選んでいるが、他地域の民話の多くが地名・人名付きのため親しみが持てる



のに、氷上郡の民話にはそれが無い。

1話だけ例外があり、「遠阪の貧乏男が夕方まで仕事に励んでいるのに帰宅すると寺の和尚が妻に酒の接待を受けている。そこで一策を案じ天誅を加える」というものだが、地名が災いして「遠阪の坊さんはすべて破戒僧なのか」と思いかねない。そのような誤解を避けるために地名を外したのかもれないが、「寂しい芦屋の里で貧しい身なりの旅僧、実は北条時頼が……」や「それでこの地は宝塚と呼ばれるようになった」に比べると、親近感が欠くのである。

だが山田さんは、「がいよう」、「いんだ」等の丹波方言を注釈付きで多用することで氷上郡9話を盛り立てている。

（徳田八郎衛）

◆赤井 紀男さん

当日は元会社のOB会総会と重なり欠席いたします。盛況祈念いたします。

◆浅倉 成樹さん

所要にて欠席させていただきます。皆様のご活躍をお祈りいたします。

◆芦田 あつ子さん

ご連絡頂きありがとうございます。今回の「山ざる」には青垣町に関する内容が多く、とても興味深く拝読させていただきました。皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

◆芦田 美代子さん

「山ざる」48号に私の拙い文を掲載していただきましてどうも有り難うございました。厚く御礼申し上げます。投稿のご依頼を頂いた時は自信がなくて随分悩んだ末に書き上げましたが良い仕上がりにして頂き感謝しております。

す。今後益々のご発展をお祈りしています。

◆足立 正美さん

身体に色々な体調不良要因を抱える歳となり約束するのが難しくなりましたので…。会の益々の発展をお祈ります。

◆足立 美都子さん

当日家族で出かける予定がありまして申し訳ありませんが欠席いたします。

◆荒木 司郎さん

歳相応に元気でおります。

◆安達 健一郎さん

織田さんの記念講演楽しみにしています。氷上ゴルフ同好会に参加されておられた友達の顔を沢山見られればと楽しみにしています。

◆石倉 良介さん

いつも故郷のことを思い出し、特に秋の味覚を懐かしく感じます。

◆石田 勝彦さん

毎年案内を頂きながら何分にも遠路のため失礼をしております。

◆石橋 順子さん

「山ざる」の送付ありがとうございます。編集、構成などのご苦勞お察しします。次号には是非投稿をさせて頂きたいと思っています。

◆井出 恭子さん

今年こそは出席できるよう会社に申請を出して叶いました。皆様にお会い出来るのを楽しみにしています。

◆植田 茂樹さん

当日は勤務先の会社が関係している北九州市のイベントが都内で開催され、終日参加しなければなりませんので残念ながら「ふるさとの会」は欠席

させていただきます。

◆内堀 祥司さん

いつも「山ざる」ありがとうございます。いつも「山ざる」ありがとうございます。当日は予定があり欠席させていただきます。会の皆様によるしくお伝えください。

◆大城戸 しず代さん

25日は家の用があり申し訳ないです。「山ざる」48号のマイギャラリーに掲載頂き有り難うございました。編集委員の方には大変お世話になりました。時節柄皆様ご自愛なさって下さい。

◆大塚 秀弐さん

15歳で旧生郷村を出て47年、まさかここで一生を終えることになるとは思っていませんでした。昭和30年に両親が脊椎で病死、柏高1年で豊中高に転校、父は生郷村最後の村長でした。氷上町誕生と同時に私の故郷は無くなりました。

◆岡田 充利さん

元気にしております。「山ざる」に故郷の匂いをかいでおります。ありがとうございます。ありがとうございました。ご盛会をお祈りしています。

◆形田 恒夫さん

11月で満69歳になりました。この年まで仕事を続けることができたことに誇りに思います。又丈夫に育ててくれた両親に感謝しています。田舎暮らしも幸いしました。

◆河本 幸子さん

皆々様お変わりないことと存じます。いつもご案内ありがとうございます。出席して皆様とお会いし柏原弁でお話できるのが楽しみです、よろしく願います。

◆岸田 勇さん

あいにく亡実姉の法事の為欠席いたします。

◆木呂子 恵美子さん

いつもお世話になり有難うございます。「山ざる」充実した内容で興味深く拝見しました。皆様の御努力のこと深く感じ入ります。体調気を付けて出席させて戴きたいと思えます。

◆久下 善生さん

ご案内ありがとうございます。29年7月郷里(春日町)へUターンいたしました。在京中のご厚誼に改めて感謝いたします。ありがとうございます。ご盛会を祈念しております。

◆久呉 道子さん

ただいま「山ざる」48を拝読させていただきました。原谷洋美様より承り入会させて頂きました。同郷の名士の誌なので恐縮しています。「ふるさとの会」のご盛会をお祈り申し上げます。

◆小竹 政孝さん

事務局様先日は大変お世話になりました。



した。欠席させていただきますが、皆様の健康とご盛会をお祈り申し上げます。

◆小西 允子さん

この度「山ざる」48号に掲載していただきありがとうございます。都合がつかず例年欠席をしましたが、今年は参加させていただきます、よろしくお願いたします。

◆坂上 豊さん

「山ざる」を毎回懐かしく拝読させていただいています。会長様はじめ編集委員の皆様のご健勝を心よりご祈念申し上げます。ふるさとの会のご盛会をご祈念いたします。

◆笹倉 鉄平さん

大変ご無沙汰いたしております。今年の会もまた海外出張と重なっており出席が叶いません。残念です。ご盛会をお祈りしております。

◆笹倉 強さん

毎年お陰様で郷里の皆様にお会いすることの喜びが楽しみです。事務局の皆様ご苦勞様です。

◆澤田 みさをさん

いつもご丁寧にお招きいただきありがとうございます。ご盛会をお祈ります。

◆正呂地 悟さん

ご盛会を祈念しております。昨年同様体調は変わりませんが我が家の猫(4匹)の内一匹がこの夏糖尿病と診断され10日毎に一泊二日の検査入院、伊東から車で約40分の大仁の動物病院に送迎する暮らします。会員の皆様のご健勝を祈ります。

◆杉岡 明美さん

お世話になっております。素晴らしい「山ざる」をお送り頂き楽しみに読ませて頂いています。日頃年齢など忘れて趣味に明け暮れておりましたら、

何時しか傘寿といわれる歳に、この世での持ち時間が少なくなり思い残すところがないよう方々に参加しています。

◆鈴木 智丈さん

80歳の祝寿のご招待をいただきありがとうございます。気持ちはとても嬉しいのですが欠席とさせていただきます。今年は中国四川省へ探鳥に行ってきました。その際撮影した「オグロツル」の写真を送ります。「オグロツル」は最も高地で生息する鶴で撮影できたのは幸運でした。

◆勢川 雅弘さん

86歳にもなっておりますので出歩くのが面倒になっております。

◆勢川 武彦さん

「山ざる」を落掌いたしました。今号の出来栄えも見事の一語につきます。関係者の皆様に深謝致します。

◆瀬々 妙子さん

記念講演が楽しみです。幼い時、子供の武者行列が楽しみでした。神社名もけんくん(?)忘れていました。

◆高尾 久子さん

腰痛で悩んでいます。外出もままならなくなりました。

◆高松 常太郎さん

市内ボランティアで多忙の日々を送っています(介護施設回り)。月に3〜4回座長として踊り、フラダンス、歌、腹話術、手品、民謡など

◆竹中 紀代子さん

元気に過ごしています。

◆田中 一美さん

「ふるさとの会」ご案内有難うございました。この度は失礼いたします、25日は丁度母の法事で丹波におります。「山ざる」大変興味深く読ませていただいております。大変な努力をおも

つづ。

◆谷 敬三さん

誠に申し訳ありませんが、25日は出勤日の予定を変更できずふるさとの会に出席できません。皆様によりしくお伝えください。

◆谷垣 悦夫さん

いつもご案内ありがとうございます。25日は都合がつかず欠席します。ご盛会を祈念申し上げます。

◆千葉 淳子さん

いつもお世話様です。楽しみに読んでいます。皆様によりしくお伝えください。

◆塚口 恭一さん

盛会を祈っております。37年卒の妻と元気に暮らしております。

◆出町 京子さん

ご案内ありがとうございます。祝寿

とは実感がありませんが出席させていただきます。

◆西川 宣孝さん

「山ざる」48号楽しく拝読いたしました。「丹波の祭り」「鬼瓦巡り」の特集記事は身近な話題であり楽しく読ませていただきました。ご盛会をお祈りいたします。

◆西田 健一さん

とみに体力がなくなり出掛けることが億劫になりました。ご出席の皆さんにはよりしくお伝えください

◆西田 みどりさん

来月、兵庫に転居の予定です。三十数年間のご連絡お手数をお掛けし誠にありがとうございます。転居先 芦屋市涼風町

◆野村 節三さん

今年5月に心臓発作を起こし入院。その原因になった「冠状動脈狭窄」

「ステント処置」で快癒しましたが、次に前立腺肥大で目下治療中です。このような次第で今回は未だ通院もあり欠席いたします。ご盛会をお祈りしております。

◆廣瀬 安伸さん

何時もお世話になりありがとうございます。当日は会社OB会の総会役員で運営担当のため参加する事が出来ません。織田氏の講演が拝聴出来ず残念です。会の盛会を祈念申し上げます。

◆廣瀬 佳智さん

ご苦勞様です。拙稿の掲載時には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。又今回欠席ですが盛会を祈念しております。

◆福田 治子さん

隣県に住んでいるのに欠席ですみません。足腰が弱くなり東京へ行く自信がありません。ご盛会をお祈りしてお

ります。

◆藤田 玲子さん

おかげさまで80歳になりました。ご招待くださいませありがとうございます。織田信孝さんのお話楽しみにしております、よろしくお願いいたします。

◆藤田 正雄さん

丹波囲碁会で坂上さんや谷口さんと碁を打っていたのも遠い昔となりました。

◆本城 英明さん

誠に申し訳ありませんが当日は帰丹することになっております。月日を移動させる事が出来ないで欠席とさせていただきます。いつもお世話になりました。ありがとうございます。

◆松田 けい子さん

主人の兄弟会と重なるため欠席させていただきます。

◆松永 富子さん

ご丁寧な案内状有難うございました。大変残念ですが出席することができません。盛会であることを念じています。

◆松本 栄二さん

「山ざる」48号「読んで」「見て」心豊かになる編集ですね、感謝。「丹波・水上」は小生にとつて被災による難渋を強いられた5年であり、柏原中、高校生として過ごした寄留の地です。しかし恵まれた友や恩師など忘れえぬ人々と出会った素晴らしい故郷の地でもあります。

◆三木 亮さん

今回は所用があり欠席させていただきます。昭和39年卒の同期の皆さんに宜しく！

◆室井 利代さん

「山ざる」をいつも有り難う存じます。お祝いの会のお誘いも感謝いたし

ます。この記念の年に手術を受ける羽目になり老いの生活が目の前にやってきました。気ままな会員で申し訳ございません、いろいろ失礼ばかりでお許しください。会の益々の発展をお祈りいたします。

◆山岸 幸子さん

旅行とかち合つてしまい今回は参加できません。次回を楽しみにしています。

◆山口 敏之さん

オランダ単身赴任中の為欠席とさせていただきます。ご盛会をお祈りしております。

◆山口 泰男さん

仙台に腰を落ち着けて、ますます元気でやっております。

◆山田 貞子さん

このたび「ふるさとの会」にお招きいただきましたが諸都合により勝手な

がら欠席させていただきます。同窓生の皆様のご健康をひたすらお祈り申し上げます。

◆山名 昌衛さん

何時も積極的な活動ぶりに心より感銘を受けています。若手世代を引き連れて盛り上げていくべき役割世代であることは充分認識しつつ、今回も時間の制約上参加する事が出来ませんがお許し下さい。

◆横谷 喜代孝さん

いつも「山ざる」ありがとうございます。121年も続いている会の会員として、出席出来なくても嬉しく、又誇りに思います、今後とも宜しくお願いたします。

◆若松 操さん

6月から南相馬市で仕事をしております。まだまだ復興の道半ばという状況です。

◆若森 敏郎さん

一昨年秋腰を打つてから足がしびれて治らず歩行困難になりましたので欠席いたします。

平成30年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

今年の東京支部総会・懇親会は、平成30年7月8日（日）学士会館にて開催されました。今年の幹事学年は、昭和47年卒24回生の皆さんです。

数日來の西日本を襲った集中豪雨の影響による鉄道と道路網の寸断により、



総会風景

竹内同窓会会長、母校の井上校長を始め丹波から予定されていた10数名の皆さま全員が、残念ながら欠席となりました。然しながら、同窓会の仁藤阪神支部長・山下阪神前支部長・畑東海支部長・山名京滋支部長・奥山篠山副支部長、兵庫県東京事務所入江所長・兵庫県人会志度常任幹事の計7名のご来賓、他支部からの参加を含め150名近くの面々が集い盛會に催すことができました。

総会では会務報告、会計報告に続き、2年に一度の役員改選で4期8年間支部長を務めて頂いた谷口浩章（15回）前支部長が退任、後任として谷敬



前支部長 谷口浩章（15回）  
他の新役員も承認されました。

出席頂けませんでした竹内同窓会長、新しく母校の校長に就任された井上校長、谷口丹波市長からは心温まるメッセージを頂き、代読により披露されました。また今年も日本酒の差し入れを頂いた榎西山酒造場が紹介されました。

恒例の柏陵セミナーは、幹事学年の小説家の江上 剛（本名小島晴喜）さんによる講演『私が小説家になった理由（わけ）』です。大手銀行幹部から小説家へと転身された氏の原点についてのお話でした。

来賓の入江兵庫県東京事務所長様の挨拶に続き畑東海支部長の乾杯の音頭で始まった懇親会は、途中に幹事の田村さんによる自作の弾き語り披露、ソ



講師の江上氏

プラノ歌手足立 さつきさんから丹波市の歌の経過報告などのスピーチを頂きました。最後は恒例による校歌、

応援歌の大合唱、山名京滋支部長の音頭による万歳三唱と続き、来年の再会を約しての散会となりました。

懇親会終了後は「屋形船貸切による隅田川下り・東京湾夜景見物」を九年振りに企画、38名の参加を頂き楽しいひと時を過ごして頂きました。

## 柏陵同窓会東京支部 支部長に就任して



このたびは  
谷新支部長  
成30年度柏陵  
同窓会東京支

部総会で、新しく東京支部支部長を仰せつかりました。柏原町の出身でございます。何分にも私は軽輩でございますので、たいしたことはお約束できませんが、支部会員の皆さまのために誠心努めてまいりたいと思います。

先ず、4期8年にわたり支部長をお

務め頂きました谷口前支部長に対し、感謝の意を表したいと思えます。在任中は同窓会本部や他支部との交流に努められ、東京支部会員はもとより他支部からの総会参加も大幅に増えるなど、支部の活性化にご尽力を頂きました。

私はこうした前支部長が取り組んで来られた、支部の活力に繋がる方策を踏襲し発展させて参りたいと存じます。

柏原高等学校井上学校長からは母校の現状をお伺いし、いろいろな機会を利用し支部会員の皆さまにご紹介してまいります。また同窓会活動については、同窓会竹内会長ほかの皆さまのご指導を頂きながら、阪神、京滋、東海、篠山の各支部とは連携を図ることによう、減少傾向にある若い世代の会員の名簿確保などの課題を共有していきたいと思えます。支部会員間の交流機会の醸成に尽くしてまいりたいと存じますので、皆様方の後押しを頂ければと思います。

今年には母校創立121周年に当りま

す。創立期の東京支部を夢想致します。と、母校で学んだ政・官・財・学術などの分野に身を置く面々が東京に集い、酒を酌み交わしながら国家の発展と世界平和を語り合つたことでしょう。

当時に比べると現在の丹波と東京の時間距離は格段に短縮されていますが、東京から 見ると丹波はやはり遠く、格別な思いがございます。支部会員の皆さま方とは、世代を超えてこうした気持ちも繋げてまいりたいと思えます。合言葉は「柏原高校と丹波」だけ。

引き続き東京支部にご参集頂きますよう、宜しくお願い致します。

## 幹事学年を終えて



代表幹事  
田村

昨年の7月  
から幹事学年  
に向けての準  
備作業が始ま  
りました。当

時の24回生の同窓会出席者は、植田茂

樹君と私の2名だけでした。直ぐに田中正邦君と足立邦子さんが協力を約束してくださり、この四名で幹事学年のスタートです。もちろん東京支部からは同級生名簿を頂いていましたので、そこから協力者探し。一番の難関が講演者探し。ところが植田君の心のこもった一通の手紙で、なんと今現在我々同級生の中では最も知名度があり、スケジュール上最も多忙であろう作家の江上 剛氏が快く講演を引き受けてくれたのです。感謝感謝で、同級生探しにも弾みがつき一人、二人と賛同者が出現してくれました。本当にうれしかったです。幹事学年の準備会議に於いては、これまでの東京支部懇親会のアカデミックな講演に加え、どうしても少しのエンターテインメント性のあるアトラクションを添えられないかと思っていました。支部役員さんや理事の方々に、この辺の要望を申し出て許可を頂いた上で、やはり24回生で、現在は関西では知名度があがってきている、

手作り楽器漫談のマエストロ足立君に出演依頼をしたところ、丹波からの参加を快諾頂きました。が当日は豪雨災害の為出席は叶いませんでした。今回の経験上この幹事学年制は、隠れた同級生の発掘、参加増には大変理にかなった運営方法だと、感じた次第です。今回久しぶりに隅田川ナイトクルージングが復活し、38名もの沢山の方に夜の東京を楽しんでいただけたのは穏やかであった天候のお陰様と、感謝感謝でした。あれやこれやどうか無事に講演、総会、懇親会、アトラクションを終えることが出来ましたのも支部役員様、事務局様、理事の皆様、そして幹事学年を契機として少しでも力になってやろうじゃないかと今回初めて同窓会の集まりに参加してくれた多くの24回生同級生の方々のご支援のお陰と衷心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。心配と感謝の一年でした。

(幹事学年代表 田村 公平)

# インフォメーション

## 展覧会

### ●笹倉鉄平「原画」展

今年も9月19日～25日大丸東京店11階催事場で開催されました。お知らせが後手に回り残念です。昨年も20日～26日に開催され、「光の情景画家」心に安らぎをもたらす絵として人気の高い『鉄平癒しワールド』へと誘われ、どっふりと浸り込み、可愛いワンちゃんを見つげながら優しさにあふれる絵を鑑賞しました。清々しい生気が蘇えり幸せ感一杯もらえました。今年は、



鉄平さんを画家の道へ導いた影響本「赤毛のアン」の舞台であるプリンス・エドワード島を訪ねられ、漸く絵が完成したとか。鑑賞させていただける日が待



## ◆インフォメーション

ち遠いのです。

### ◎可部美智子さんの展覧会

その1 第六十五会陶彫展

5月20日から26日まで、銀座の「ギヤラリー青羅」で開かれました。

「粘土を素焼きするだけで、こんな見事な作品が出来るんだ」（日本陶彫会・歴史と現在）可部さんの作品は、まさにこの一言に集約されています。毎年の陶彫展で、可部さんの作品に出合うたびに、なぜか「ほっ」とさせられると同時に、背筋がすつと伸びるようで、その前を去りがたい思いにさせられます。

### その2 可部美智子陶展



9月26日から10月1日まで、日本橋室町の「日本橋ナンワギヤラリー

」で催されました。展示作品は、これまで作りためて来た塑像や抽象陶彫などで、いわば可部さんの集大成ともいえる催しでした。

(岡田)

「これが最後の個展」と案内状に書かれていましたが、今後とも後進の指導や新境地の開拓に精を出して頂きたいと願います。詳しくは来月号にお知らせします。

(坂)

## リサイタル

### ◎足立さつきさん・デビュー30周年記念リサイタル(2017.9.30)

春日町出身の音楽家足立さつきさんのコンサートは、「祈り・謡」のテーマの下、ソプラノの足立さんは、バリトンの井上敏典氏、オーボエの山本直人氏、ピアノの田中明子氏と共に様々な音色、ジャンルの演奏を華やかに繰り広げられました。第一部ではヴィヴァルディ「グロリア」、ヘンデル「優しい眼差しよ」、などを穏やかにまた、た敵かに歌い上げ、コンサートへの期待に満ちた聴衆を静謐な世界に誘い、



静謐な世界に誘い、

第二部では山田耕作の「城ヶ島の雨」などの日本歌曲で日本の伝統や情景の素晴らしさを音で紡いでくれました。そしてオペレッタ「チャルダッシュの女王」からの「山こそわが心の故郷」でコンサートは最高潮を迎えました。これはハンガリーで生まれウィーンで活躍した作曲家カールマンの代表作で、チャルダッシュはハンガリーの民族音楽ですがウィーンナワルツがふんだんに組み込まれています。さつきさんはバリトンの井上氏と共に、時には愁いを含み時には華やかな歌声で紆余曲折の恋物語を繰り広げ、同時にアップテンポのワルツを軽妙なステップでまるで蝶が舞っているかのように踊り、拍手喝さいを浴びました。終盤にはさつきさんのユーモアを交えた語り口に出演者たちと聴衆はすっかり打ち解け、熱気溢れる歌の世界に引き込まれていった人々は満足感と心地よい疲労感を覚え会場を後にしました。

(石橋)

◎寄附者芳名(平成29年度)

兵庫県東京事務所所長

早金 孝殿(ふるさと会御祝儀)

二〇、〇〇〇円

柏陵同窓会会長

竹内 牧人殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

柏原高等学校校長

大西 伸弘殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

丹波新聞社会長

小田 晋作殿(ふるさと会御祝儀)

一〇、〇〇〇円

中山 昇殿

五〇、〇〇〇円

岸本 動殿

二〇、〇〇〇円

中居 篤子殿

一〇、〇〇〇円

廣内 卓生殿

一〇、〇〇〇円

山口 敏之殿

一〇、〇〇〇円

瀬澤 博殿

一〇、〇〇〇円

瀬澤 豊殿

一〇、〇〇〇円

橋本 真二殿

八、〇〇〇円

吉見 弘文殿

八、〇〇〇円

若松 操殿

八、〇〇〇円

若森 敏郎殿

六、〇〇〇円

梅田 重二殿

五、〇〇〇円

大野 義昭殿

五、〇〇〇円

荻野 武殿

五、〇〇〇円

金出 一郎殿

五、〇〇〇円

笹倉 強殿

五、〇〇〇円

鈴木 智丈殿

五、〇〇〇円

谷口 捷殿

五、〇〇〇円

谷口 浩章殿

五、〇〇〇円

藤田 玲子殿

五、〇〇〇円

堀井 隆川殿

五、〇〇〇円

渡辺 昌彦殿

三、〇〇〇円

赤井 正洋殿

三、〇〇〇円

足立 和孝殿

三、〇〇〇円

足立 敏悟殿

三、〇〇〇円

足立 義雄殿

三、〇〇〇円

石橋 昭彦殿

三、〇〇〇円

形田 恒夫殿

三、〇〇〇円

坂上 登殿

三、〇〇〇円

坂上 豊殿

三、〇〇〇円

笹倉 鉄平殿

三、〇〇〇円

高見 秀史殿

三、〇〇〇円

千葉 淳子殿

三、〇〇〇円

鶴田 宏・ゆき子殿

三、〇〇〇円

原 利充殿

三、〇〇〇円

藤田 純殿

三、〇〇〇円

藤田 千治殿

三、〇〇〇円

絹川 正殿

三、〇〇〇円

松本 栄二殿

三、〇〇〇円

足立 美都子殿

二、〇〇〇円

梶原 やす子殿

二、〇〇〇円

廣瀬 安伸殿

二、〇〇〇円

本城 英明殿

一、五〇〇円

足立 武夫殿

一、〇〇〇円

足立 東一郎殿

一、〇〇〇円

稲岡 俊一殿

一、〇〇〇円

植田 茂樹殿

一、〇〇〇円

大坪 則夫殿

一、〇〇〇円

大野 均殿

一、〇〇〇円

岡田 充利殿

一、〇〇〇円

久呉 道子殿

一、〇〇〇円

権田 道男殿

一、〇〇〇円

戸倉 謙治殿

一、〇〇〇円

山本 述子殿

一、〇〇〇円

余田 幸夫殿

一、〇〇〇円

❖ 本誌にご協力有難うございます



SOMPO  
ホールディングス

保険の先へ、挑む。

損保ジャパン日本興亜

# 保険の 先へ、挑む。

変化の時代にも、揺らぐことのない確かな明日をお届けしたい。  
その想いをカタチにするために、私たちは進化します。お客さまの  
「安心・安全・健康」な暮らしをひとつなぎで支えるグループへ。  
保険の先へ、挑む。

日本の「損保」から、世界で伍していく「SOMPO」へ。

損保ジャパン日本興亜はSOMPOホールディングスの一員です。

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

南東京支店 品川第一支社

〒108-0075 東京都港区港南 1-6-31

Tel:03-5781-8041 <https://www.sjnk.co.jp/>

すべての  
働く人のために、  
タイヤは強く  
進化した。

優れたロングライフ、より確かな耐摩耗性能、

さらに向上した性能が働く人たちをサポート。

よりタフになった、ヨコハマのライトトラック用タイヤ、LT151R。

イサゴイサゴ-アール

このタイヤには、プロに選ばれる理由があります。

**LT151R**

New High Performance Radial Tire for LIGHT TRUCK

 **YOKOHAMA**

❖ 本誌にご協力有難うございます

## ひょうご出会いサポート東京センター



### ◆登録のご条件◆

- ・結婚を希望し、20歳以上の独身の方
- ・インターネットに接続できる環境にある方で、E-mailアドレスをご登録いただける方

### ◆登録手数料◆

- ・5,000円/年 (20歳代3,000円/年)  
(※登録手数料以外はかかりません！)

### ◆詳しくは

ひょうご出会い

検索



恋活・婚活・あなたの結婚の  
お相手探しのお手伝いをします。

TEL (03) 6262-3035

URL <https://www.msc-hyogo.jp/>

東京都千代田区大手町2-6-2

パソナグループ本部ビル3F

開館日：火・水・金 10:00～18:30

土 10:00～17:30

認定NPO法人アジアの新しい風 理事

<http://www.npo-asia.org>

## 上 高 子 (氷上町出身)

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414

TEL / FAX 03-5426-6714

e-mail [takako-ue@t05.itscom.net](mailto:takako-ue@t05.itscom.net)

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援する NPO です。

交流大学は中国・清華大学、タイ・タマサート大学、ベトナム・貿易大学、インドネシア・パジャジャラン大学。

東京都によって認定NPOに認定され、当NPOへの寄附金は、確定申告をすることで、税額控除の対象になります。すなわち、寄付総額から2000円を差し引いた金額の40%が税額より差し引かれます。ご支援をよろしくお願いいたします。

地元兵庫県産の酒米と神地寺山伏流水を用いた  
古式和釜、三段仕込み、槽搾りの創業以来  
ほとんどスタイルを変えない伝統的な  
仕込み方法と、江戸時代より続く  
寒仕込みにこだわる

丹州氷上之地酒

# 奥丹波

時代を経ても変わらない  
深い味わいと穏やかな香りの純米酒  
そして、現代の  
酒造りの粋を極めた  
純米吟醸酒・純米大吟醸酒を  
中心に仕込んでいます



創業：江戸享保元年

山名酒造株式会社

TEL 0795-85-0015  
<http://www.okutamba.co.jp>

関東氷上郷友会の益々のご発展を  
祈念いたします。



埼玉りそな銀行

RESONA

❖ 本誌にご協力有難うございます

# 丹波新聞



## 伝えたい 届けたい

親鸞聖人750回大遠忌法要

氷上町西中の正福寺にて営まれた「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」。18年ぶりにおねり(稚児行列)が行なわれ、約90人の子どもが、父母と一緒に本陣から同寺までを歩いた。(昨年11月9日号より)

無料お試し購読受付中!!

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201

丹波新聞

検索

tel.0795-72-0530

fax.0795-72-1956

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,255円(郵送料205円)

あなたの町の「石屋さん」  
そんな石屋をめざしています!!

墓石・霊園・建築石材・造園石材

## (株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高 昭和36年卒

いしやは ここよ

☎ 0120-1480-54



工場・事務所 〒669-3311 丹波市柏原町母坪425

TEL 0795-72-3032

FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>





## 筑波東急ゴルフクラブ

〒300-4204 茨城県つくば市作谷 862-1

TEL029-869-0109 FAX029-869-0568

<http://www.tokyu-golf-resort.com/tsukuba/>

株式会社東急リゾートサービス

## 今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送  
データ入力等の情報処理、コールセンター、  
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

———いつでもよりよいサービスを———



株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉県花見川区宇那谷町 1501-2

TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865

<http://www.betterservice.co.jp>

e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

## 関西丹波市郷友会会報

### たんぼ 第3号

(10月発行予定)

郵送料のみご負担にて配布致します。

[申し込み先] 関西丹波市郷友会  
[事務局] 大阪市西区新町2-15-27  
サンキン内 (tel.06-6539-3201)

#### 平成30年度総会

11月11日(日) 午前11時半より  
武庫川女子大甲子園会館  
(西宮市戸崎町1-13)

同会館は遠藤新が設計した旧甲子園ホテルで、戦後、武庫川女子大(青垣町出身の公江喜市郎創設)が譲り受けました。国有有形文化財。総会に先立ち、館内見学会も行います。

関西丹波市郷友会会報  
第3号 2018.11.1

# くすの木14 14回生部会

足立 悦雄	木下 寛爾
足立 義雄	高田 温美
井上 巖	仁藤 欽嗣
上田 道代	三觜 洋子
大竹 博美	森田 栄子
岡 洋子	山名 靖英
岡田 昌子	山本 喜則
岸本 敏子	

医療法人社団 順孝会 理事長／医学博士  
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒347-0015 埼玉県加須市南大桑一六二〇一

TEL 〇四八〇〇六五五九八八  
FAX 〇四八〇〇六五五九八七  
E-mail: kazu358@pastel.ocn.ne.jp

株式会社ナレッジリンク  
足立国際会計事務所

代表取締役  
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足立知佳子

〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一三三四U11自由が丘ビル六〇二  
TEL 〇三三七七八八〇四七 FAX 〇三三七七八八二四七  
E-mail: cadachi@ata.gr.jp

足立静雄

モンテッソーリ・スクール ひまわりこどもの家  
NPO法人小学生モンテッソーリ・スクール  
理事長・園長

池田和子

行徳校 〒272-0137 市川市福栄二一六一一  
本八幡校 〒272-0823 市川市東菅野一三二二三

池田忍

〒247-0005 横浜市区桂町一〇一〇一  
TEL 〇四五二八九五二二七二二

石橋順子

金  
出  
一  
郎

岡  
田  
昌  
子

PCC大洋

岡

〒351-0014

吉  
明

朝霞市藤折町四一四一三〇  
TEL〇四八四六〇一六〇一  
FAX〇四八四六〇二三九七  
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

木  
呂  
子  
惠  
美  
子

岸  
田  
勇

上  
武  
正  
次

坂  
上  
勝  
朗

近  
藤  
仁  
司

栗  
田  
功

合唱指揮者

笹  
倉  
強

〒 352 | 0014 新座市栄四一五一二五  
TEL・FAX ○四八―四七七―五六四〇

仲 山 坂  
口 上  
一 泰  
聰 男 登

仙台市在住

坂  
上  
豊

高見秀史

谷 社会保険労務士・CFP事務所  
年金・保険・労務・ライフプランの談話室

谷 敬三

東京都 豊島区池袋本町四―三―十七  
TEL 〇三―三九七―七八二六  
E-mail:tanl\_finance@a.toshima.ne.jp

谷口浩章

鶴田宏

エネクスフリート株式会社  
西日本支店 支店長

土井聖司

〒813―0018 福岡県福岡市東区香椎浜ふ頭三―二―二四  
電話 〇九二―六八一―六八〇二

日本舞踊 西崎 祥  
端唄 根岸 妙

〒224―0032 横浜市都筑区茅ヶ崎中央五六―九―七二二  
電話 〇九〇―九九七―七七九三

西山裕三

〒669-4302

兵庫県丹波市市島町

中竹田 一七二

原谷洋美

藤原ひさ子

エネクスフリースト株式会社  
関東支店 支店長

細川貴志

〒347-0046

埼玉県加須市大字平永五三七  
電話 〇四八〇-六二二四〇〇

株式会社メイク

代表取締役 広瀬寿和

〒160-0003

東京都新宿区本塩町二十三第二田中ビル

電話 〇三二三三五四〇二一一

FAX 〇三二三三五四一三三一一

青葉山 真照寺 都立八王子霊園隣り  
八王子 青葉霊苑 第二期墓地分譲案内中  
和合廟(永代供養墓) 受付中

住職 堀井隆川

〒193-0821

東京都八王子市川町四九三一二

電話 〇四二一六五二二〇一一

FAX 〇四二一六五二二〇三三三



G e m b a L a b 株式会社

代表 安 井 孝 之

〒101-0026 東京都千代田区神田佐久間河岸七〇  
第二田中ビル三八号室

若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山五―四―一三  
電話 〇二九七―七二―〇九〇七

渡 邊 隆 男

### 郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て快よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりやを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は会の運営を支える重要な資源です。同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い致します。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、"丹波のきずな"の強さを思います。

(山ざる編集部)

編	集
後	記

★今年次女夫婦がフランスに転勤になり夏休みに訪問した。日本の猛暑を逃れられると思いきやフランスも猛暑でテレビをつければ熱中症に対する注意が頻繁に流れる。訪問したパリのベルサイユ広場では35、36度はあるうかという暑さの中荷物検査で観光客が長蛇の列をなし、その間を縫ってタンク車が派手に水を噴霧している。さらに石畳の上に置かれた長いホースのいくつかの穴から水が空に噴き出し大人も子供もはしゃいでいる。東京オリンピックでは本腰入れて暑さ対策をしなくては選手も観客も尻込みしないかと余計な心配をしながら長蛇の尻尾に並んだ。(石橋)

★シリーズ「丹波のまつり」は、大野義明さん担当で、会員や在郷有志の方々の絶大なご助力を得て、魅力ある誌面作りが進められてまいりました。ところが本年3月、その大野さんが急きよ長期療養に入られるとのことにて、替わって小生が受け持つこととなりました。

本号は市島町の巻。在郷の方々への執筆依頼、その他の資料提供などに、普段何かと助言を頂いている高見秀史氏にはここでも筆舌に尽くせぬお世話になりました。衷心より感謝申し上げます。(坂上)

★高校卒業五十年の今年は、もう四回も丹波へ帰りました。恩師由良琢郎先生のお見舞いと偲ぶ会。この年を吉祥に友人たちと開催した展覧会。五十周年同窓会。柏原のビジネスホテルに泊まつたり、日帰りしたりと、実家に泊まることはなく、手の届くところにある実家が車窓から飛び去りました。やはり淋しいことでした。文芸欄は皆様の寄稿をお待ちしております。(原谷)

★姪から、「書いて残しておいてもらわないと、話を聞くだけでは、すぐに忘れてしまう。」と言われ、書き記すことの重要さを再認識しました。(本城)

★一九九一年の水上新高女子バレーボール「偉業」を篠山産業高校卒業生の多くは良く記憶してくれていますが、柏原高校卒業生の方は酷いものです。「知らないだ」が続出。何故だ？(徳田)

★今年も様々な分野から様々なご支援をいただき読み応えある「山ざる」が完成しました。来年は創刊50周年を迎えます。草創期の涙ぐましい努力があつてこそ今であり、繋いで来て下さった先輩たちの心意気に痛く感動。長年の大都会暮らしでも心は丹波にあり。そんな思いを今号のインタビュから再確認。関係者の皆様に感謝です。(岡田)

## 山ざる 第49号 定価500円

平成三十年十一月一日発行

編集委員 井徳省吾 石橋順子 上高子  
 坂上勝朗 岡吉明 岡田昌子  
 藤原ひさ子 徳田八郎衛 原谷洋美  
 本城英明 安井孝之

発行者 関東水上郷友会会長岸本 勲

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町4-4-30  
 関東水上郷友会事務局(岡吉明)

☎〇四八(四六〇)一六〇一  
 振替〇〇一〇一三二二二二〇

製 作 株式会社二玄社  
 編集協力 ダイワコムズ



**HINO**  
**RANGER**

社長、こいつに乗せてくれ！



**HINO**  
**PROFIA**

**東京日野自動車株式会社**

本社：東京都港区新橋5丁目18-1  
TEL 03-3578-3955 (代表)

書写教育の第一人者による手本。

# 美しい毛筆の 書きかた

宮澤正明 著

B5判・208頁  
●2200円+税



きれいに整った文字を書く  
毛筆を基礎から学ぶ  
楷書・行書・仮名・漢字仮名交じり

- 家庭で子どもに教えられるよう、「基本点画の書き方」を徹底解説。
- 日常に即した例文で、はがき・手紙などの書き方をマスター。
- 全ての常用漢字(2136字)を楷書の毛筆文字で一覧表化。



## 大人が学ぶ小学校の漢字 [なぞり書き練習帳]

宮澤正明 著

B5判・160頁 ●1500円+税

教育漢字1006字について楷・行・草書の三書体をマスター。小学校レベルの漢字を練習するだけで、キレイなくずし字が気軽に身に付く練習帳。

## 大人が学ぶ中学校の漢字 [なぞり書き練習帳]

宮澤正明 著

B5判・178頁 ●1800円+税

中学校で学ぶ漢字1130字について、楷・行・草書の三書体を網羅。ポイントを学びながら、キレイなくずし字が実用レベルで使えるようになる練習帳。

## きれいな文字の書きかた [書き込み式練習帳]


宮澤正明 著

B5判・160頁 ●1500円+税

なぞり書きを交えながら実際に鉛筆やペンで反復練習。ひらがな・漢字の練習から、ハガキ・手紙の書き方まで、きれいな文字が身につく練習帳。



株式会社二玄社 会長 渡邊隆男

 二玄社

〒113-0021 東京都文京区本駒込 6-2-1 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 <http://nigensha.co.jp>